

資料

(平成元年十月)

第三十四回「合宿教室」(島原)感想文集

——日本人としての自覚をもとめて——

社団法人 国民文化研究会



—“合宿教室”34年の歩み—

回数	年度	開催地	参加人員	主 要 講 師
1	昭和31年	霧 島	92	広田洋二・日下藤吾・川井修治
2	” 32年	福 岡	127	竹山道雄・高山岩男・浅野晃
3	” 33年	佐 賀	72	勝部真長・木下彪・森三十郎
4	” 34年	阿 蘇	160	花田大五郎・中山優・野口恒樹
5	” 35年	雲 仙	200	木内信胤・花田大五郎・佐藤慎一郎
6	” 36年	雲 仙	203	小林秀雄・木内信胤・津下正章
7	” 37年	阿 蘇	215	福田恆存・木内信胤・黒岩一郎
8	” 38年	雲 仙	202	竹山道雄・木内信胤・木下広居
9	” 39年	桜 島	202	小林秀雄・広田洋二・木内信胤
10	” 40年	大 分	215	岡潔・花見達二・木内信胤・夜久正雄
11	” 41年	雲 仙	240	福田恆存・木内信胤・戸川尚
12	” 42年	阿 蘇	336	林房雄・太田耕造・木内信胤
13	” 43年	霧 島	353	竹山道雄・高谷覚蔵・木内信胤
14	” 44年	阿 蘇	403	岡潔・木内信胤・木下道雄・奥田克巳
15	” 45年	雲 仙	491	小林秀雄・木内信胤・桑原暁一
16	” 46年	霧 島	302	村松剛・木内信胤・戸田義雄
17	” 47年	阿 蘇	402	木内信胤・山本勝市・胡蘭成
18	” 48年	雲 仙	433	村松剛・木内信胤・山口宗之
19	” 49年	霧 島	528	小林秀雄・木内信胤・戸田義雄
20	” 50年	阿 蘇	435	福田恆存・木内信胤・夜久正雄
21	” 51年	佐世保	372	長谷川才次・村松剛・木内信胤
22	” 52年	雲 仙	332	木内信胤・衛藤藩吉・高木尚一
23	” 53年	阿 蘇	440	小林秀雄・木内信胤・松本唯一
24	” 54年	霧 島	268	木内信胤・高山岩男・山田輝彦
25	” 55年	雲 仙	431	福田恆存・法眼晋作・宝辺正久
26	” 56年	阿 蘇	353	齋藤忠・村松剛・青砥宏一
27	” 57年	霧 島	321	齋藤忠・黛敏郎・幡掛正浩
28	” 58年	雲 仙	327	齋藤忠・小堀桂一郎・長内俊平
29	” 59年	阿 蘇	302	吉岡一郎・小堀桂一郎・加納祐五
30	” 60年	阿 蘇	249	市原豊太・高村坂彦・小田村四郎
31	” 61年	島 原	294	江藤淳・村松剛・小柳陽太郎
32	” 62年	阿 蘇	269	小堀桂一郎・鈴木一・関正臣
33	” 63年	島 原	227	児島襄・小堀桂一郎・加納祐五
34	平成元年	島 原	204	村松剛・山田輝彦・国武忠彦
累計・参加人員				10,000名



# 第三十四回 “合宿教室(島原)” 全参加者の感想文と和歌詠草



と き 平成元年八月五日(土) から九日(水) まで四泊五日間  
 ところ 長崎県・雲仙国立公園隣接・島原市「島原グランドホテル」  
 参加総数 二〇四名

## 目 次

“はしがき” に代へて……………	理事長・小田村寅一郎……………	2
大学別参加者数・その他の人数の内訳……………		5
“合宿教室”の日程表(四泊五日)……………		6
第34回 “合宿教室”のあらまし……………		7
感想文と第二回目の“短歌詠草”……………	参加者全員……………	29
短歌詠草……………	合宿中の第一回目の創作作品……………	97
あながき……………	参加者全員……………	120
カメラ・レポート33枚(31ページから95ページの左頁に掲載)……………		



## “はしがき”に代へて

小田村寅二郎

(本会理事長・元亜細亜大学教授)

昭和三十一年の本会創立以来、一年も欠かすことなく続けて来た“合宿教室”は、本年は第三十四回目を八月上旬の四泊五日間（リーダー学生による事前合宿をそれに先立って三泊、事後検討合宿を本合宿後一泊、従ってリーダー学生にとつては合計八泊九日間）、九州・長崎県・島原の「島原グランドホテル」で開催いたしました。このホテルの上の階からは、ひろやかな有明海が見渡され、お天気の良い日には対岸の山々も眺められ、その景色に参加者一同は心のなごむ思ひをしたことでもありました。宿舎側の設備も心くばりも行き届いてをり、この“合宿教室”独自の日程の運びにもきはめて好都合でした。

全国津々浦々から馳せ参じてくださった参加者諸君（四十六大学から、男女学生一〇九名、社会人及び関係者九五名、計二〇四名）は、旅装を解く間もなく開会式（八月五日午後二時）に列席し、開会宣言、国歌斉唱二回、今は亡き昭和天皇の大御靈に對し奉り三十秒間の黙禱を捧げ、ついで、祖国のために尊い生命いのちを捧げられた先人の御靈みたまに三十秒間の黙禱を捧げたあと、参加学生を代表して、リーダー学生の一人、西南学院大学四年の西山博章君が、「この合宿教室では、疑問や迷ひを率直に班友に語って下さい。また生きた言葉を見つけ、生活の糧となるやう頑張ってください」と訴へたのに対して、全参加者は“この合宿教室に参加したからには、自分から進んで飛び込んでいかななくては”との氣持にさそはれていったやうでした。場所もよし、空氣は殊のほか澄み切つてゐる有明海のとおりで、夏山の展望を窓外に眺めながら、今年の合宿教室はこのやうにしてスタートいたしました。

お招き申し上げた講師の、筑波大学教授・村松剛先生は「天皇と日本国家」と題してお心こもる御講義を、また質疑に對する御応答を、長時間にわたつてしてくださいました。特に新天皇陛下の御心労についてのお話は、一同に深い感銘をお与



へくございました。また、主催者側講師の諸氏の講義をはじめ、登壇者諸氏の発言に対し、それらを一言も洩らさずとの思ひで熱心に聴き入つてゐた参加者たちでしたので、場内には、ピンと張りつめた緊張感がみなぎり、この「合宿教室」ならではの、真摯な求道の間が日を追ふにしたがつて、次第に充実感を深めていくことになり、まことに嬉しい次第でした。

さて、この「合宿教室」では、「学問」と「人生」と「祖国日本」と「世界平和」といふ四つの命題を今年も掲げましたが、いまの日本の大学生活では、これら四つの命題に何らの統一性・関連性が見られず、バラバラな教説が無反省に錯綜してゐる気配が多いため、この合宿教室では、そのことへの指摘と反省の上になつて、この四つの命題を何とかして各自の心中に統一的に把握してもらはうと、参加諸君に強く期待しました。はじめのうちは、いろいろな抵抗や反感を持たれた方もをられました。しかし日程が進むにつれて、濃淡の差こそあれ、ごく一部少数の学生を除き、ほとんどの参加者諸君は今日の大学が、「心を鍛へることの重要性」を忘れてゐること、また「知識偏重」と「学問の分化」が精神の混迷をもたらしてゐることなどについて、これらの欠陥を欠陥として認識し直すと共に、それらへの対処には、結局一人びとりが、学問の名に値する真の総合的な学問を求めて学生生活を確立するのしなければならぬこと、さうしなければ、これからの日本の発展に寄与することにはならない、といふ重要事をとらへてくださった、と思はれました。このことは、主催者として何よりも頼もしく思つたことでした。特に今回は、日本の文化のすばらしさが、諸講師、特に若い諸講師によって具体的に説かれたことは、参加者一同の心に沁み入る成果であつたと回想されます。それは同時に、三十四年間つづいたこの「合宿教室」が次の世代の人々に継承されつつあることを、確認出来た喜びにも連らなることでした。

一方、大学生諸君にとって、「友情、友との付き合ひ」の問題は、大切な関心事でありますので、「上つただけの遊び友達ではなく、真に心を許し合ふことの出来る友だちを持ちたい」、といふ願望に対して、この「合宿教室」では、「こちら側がどういふ心掛けて自分自身の心を整へて相對していけば、真に心を許し合へる友と出會ふことができるか、それにはど



う努力すべきか」についても、各班ごとに、胸襟を開いての班別討論、輪読、各自が詠んだ和歌についての相互批評などを通じて、真の友だち付き合いについての具体的な経験を積んでくれたことは、各自の大きな収穫となったと思はれます。また合せて、「読む書物の選び方の如何が、自分の人生にとってどんなに重要なかはりをもつか」、また、「読書に際して「輪読」といふ勉強の仕方が、独りで読むのに比してどんなに深い意味合ひを持つか」についても、真剣に考へてもらへたことと思ひます。

さて、ここに編した『この感想文集』は、全参加者が「解散の問ぎは」に走り書きしてくださったものです。全文をそのまま載せ得なかつたのは、紙面の都合でやむをえぬことで、ご容赦いただきたく存じます。「この文集全体の編集」は、日本油脂・技師の上村栄章さん、日本真空技術・技師の北浜道さん、神奈川県立・上溝高校・常勤講師の大日方学さん、千葉県庁・安房支庁・職員の秋山信之さん、タマポリ・社員の吉川理夫さん、アポロサービス・社員の金子光彦さん、ならびに在京会員多数の協力によって進められました。また「合宿教室」のあらましについては前述の上村栄章さん、大日方学さんが纏めて下さり、巻末の第一回目の「短歌詠草」については、戸田建設・主任技師の青山直幸さんが選歌をしてくださいました。

今夏の「合宿教室」に参加された方々、またこの文集をお読みいただく方々にお願ひ申し上げたいことは、どうか全ページを通して御判読いただきたい、といふことであります。

なほ、最後になりましたが、この合宿事業を行ふに当りまして、本年もまた、朝野からお寄せくださいました得難い御支援の数々に対しまして、会員一同に代り心から厚く御礼を申し上げます。

来年（平成二年）の合宿教室（第三十五回）は、八月五日（日）から八月九日（木）の日程（四泊五日）で、熊本県「阿蘇の司・ピラパークホテル」に於て行ふことに決定してをります。





「第34回合宿教室」記念撮影（参加者 205名）於・島原グランドホテル

参加者

（学生班 四七大学）（洋数字は参加学生数）

- 早稻田大11 亜細亜大10 拓殖大9 九州女子大7
  - 鹿児島大6 九州大5 東北女子大5 西南学院大4
  - 中央大3 防衛大3 中村学園大3 千葉大2
  - 福岡大2 九州国際大2 九州産業大2 長崎大2
  - 高千穂商科大2 熊本大2 尚綱短大2 東北大1
  - 金沢工業大1 秋田大1 東京大1 日本大1
  - 一橋大1 国学院大1 獨協大1 玉川大1
  - 大東文化大1 立正大1 帝京大1 東京女子大1
  - 実践女子大1 成城短大1 京都橘女子大1
  - 同志社大1 神戸商科大1 帝塚山学院短大1
  - 徳島大1 北九州大1 佐賀大1 福岡教育大1
  - 西日本短期大1 尚綱大1 鹿児島高専1 沖縄大1
- 計 一〇九名（うち女子三八名）

（社会人・教員班）会社員 教員など

計 二二名

（招聘講師）一名 （国民文化研究会）六二名

（事務局）九名 （見学者）一名 （写真）一名

総合計 二〇五名

第34回「全国学生青年合宿教室」日程表—平成元年8月 { 5日(土) } 4泊5日間  
( 1 9 8 9 年 ) { 9日(水) }

主催 { 社団法人・国民文化研究会  
大学教官有志協議会

8月5日(土) (第1日)	8月6日(日) (第2日)	8月7日(月) (第3日)	8月8日(火) (第4日)	8月9日(水) (第5日)
(注 意) ↓ 会場入口受付で、 学生参加者は、一 班八名前後の班編 成です。 所属する班を確 認のこと。	6:30 (起床) (洗面・清掃) 朝の集ひ(国旗掲揚 と国歌斉唱・体操) 朝食	6:30 (起床) (洗面・清掃) 朝の集ひ(国旗掲揚 と国歌斉唱・体操) 朝食	6:30 (起床) (洗面・清掃) 朝の集ひ(国旗掲揚 と国歌斉唱・体操) 朝食	6:30 (起床) (洗面・清掃) 朝の集ひ(国旗掲揚 と国歌斉唱・体操) 朝食
	8:30 ( 8:30 ) (講義) 神別 課立 深沢 高校 教諭 國武 忠彦 先生	( 8:00 ) (講義) 筑波大学教授 文芸評論家 村松 剛 先生	( 8:00 ) (講義) 国文研 理事長 小田村 眞二郎 先生	( 8:00 ) (講話) 三大名義教授・香久 正雄 先生
	10:00 (10:00) 10:10 (10:10) ( 10:00 ) 10:10 (10:10)	( 10:00 ) 10:10 (10:10) ( 10:00 ) 10:10 (10:10)	( 9:30 ) 9:40 ( 9:40 ) ( 別班別討論 )	参加者による (全体感想自由発表) ( 9:50 ) 長澤一成 合宿準備委員長・所感
	11:00 ( 別班別討論 )	( 10:40 ) 11:00 (11:00) ( 別班別討論 )	( 10:30 ) 『聖徳太子の信仰思想と 日本文化創生』 輪読導入講義 内科医師 長澤 一 成 氏	8:00 (講話) 8:30 (講話) 9:50 ( 9:50 ) 10:10 (10:10) 10:20 (10:20)
	12:00 (12:00) 昼 食	(12:30) 昼 食	(12:00) 昼 食	感想文執筆及び 第2回短歌創作 (11:40) ( 別班別討論 ) (12:10) (12:10)
	1:00 ( 1:00 ) ( 講義 ) 九州女子大学教授 国文研・常務理事 山田 輝彦 先生	( 1:30 ) 短歌部特導入講義 福岡県立山田高校教諭 与 島 誠 央 氏	( 1:00 ) ( 別班別輪読 )	閉 会 式 (このあと昼食) ( 解 散 )
2:00 ( 2:00 ) 開会式・合宿趣旨 説明・諸注意伝達				
2:50 ( 2:50 ) 3:00 ( 3:00 ) ( 別班自己紹介 )	( 3:00 ) ( 3:10 )	レクリエーション ( 雲仙仁田峠 登山 )		
『日本への回帰第24集』 ( 別班輪読 )	( 別班別討論 )			
5:00 ( 5:00 ) 夕 食 入 浴 散 歩	( 5:00 ) 夕 食 入 浴 散 歩	( 5:00 ) 夕 食 入 浴 散 歩 ( 短歌提出 )	短 歌 創 作 ( 4:00 ) ( 講 義 ) 国文研 常務理事・事務局長 長 内 俊 平 先生	4:00 ( 4:00 ) 5:00 ( 5:00 ) 夕 食 入 浴 散 歩
7:00 ( 7:00 ) ( 合宿導入講義 ) 日産自動車・社員 奈良崎 修二 氏	( 7:00 ) ( 講 義 ) 九州協短期大学教授 国文研・副理事長 小柳陽太郎 先生	( 7:00 ) 青年体験発表 北原尚氏(日本郵政労働者)・講師 森田仁士(元国産電機・技師) 短歌祭の説明) 浜田清人氏	創作短歌全体批評 九州大学医学部附属病院内科 講師 小柳 左門 氏 ( 8:00 ) ( 班 別 ) 短歌相互批評	7:00 ( 7:00 ) 8:00 ( 8:00 )
8:30 ( 8:30 ) 8:40 ( 8:40 ) ( 別班別討論 )	( 8:30 ) ( 8:40 ) ( 別班別討論 )	( 8:30 ) ( 8:30 ) ( 8:30 ) 慰霊祭執行 ( 9:30 ) ( 別班別懇談 )	( 9:30 ) ( 9:40 ) ( 夜 の 集 ひ )	9:30 ( 9:30 ) 9:40 ( 9:40 ) 10:30 (10:30)
10:00 (10:00) 10:30 (10:30) 消 灯	(10:00) (10:30) 消 灯	(10:00) (10:30) 消 灯		10:30 (10:30) 消 灯

(合宿心得)

1. 同じ班の人々のあひだに限らず、全参加者一体となつて、心の交遊をはかつていただきたい。
2. 上記の日程は、合宿中途において一部変更されることもある。
3. 集合は迅速に行ふこと。
4. 講義の時間には、会場に講義開始5分前までに、必ず入場すること。
5. 講義のはじめと終りは正坐し、司会者の指示に従つて講義に礼をすること。
6. 講義中は服装・姿勢に留意し、不作法は慎むこと。
7. 講義会場、自室をおぼし、部屋に入るときは、スリッパを、必ず向ふむきに、そろへておくこと。
8. 質問は、司会者の指示をりきりて行ひ、質問のはじめに  
① 班名 ② 学校名と学年(社会人は就職先) ③ 氏名を、明確な言葉で告げること。
9. 講義会場における席原は、その都度移動するので、必ず班別に、指定の場所によつて、着席すること。



## 第34回 “合宿教室”のあらまし

### 第一日

(八月五日・土曜日)

平成元年八月、全国各地の学生諸君が島原の地に、はるばると集まつて来た。「友よと呼べば友は来りぬ」と合宿教室へ向ふ道に掲げられた垂幕のこの言葉は、参加者の心にすがすがしい気持ちと合宿に対する期待を抱かせた。

### 開会式

参加者が一堂に会した講義室に東京大学三年松岡恒男君の開会宣言が響き渡り、国歌斉唱に続いて、一月七日に崩御された昭和天皇の御神霊の安らかな御冥福をお祈り申し上げ三十秒間の黙禱を、更に、戦時平時を問はず祖国日本の為に尊い命を捧げられたすべての祖先の御霊に対し三十秒間の黙禱を捧げた。続いて主催者を代表して国民文化研究会理事長の小田村寅二郎先生は「友との付き合ひが表面的になりがちな学園生活と違ひ、友と心から親しみ合ひ、語り合ひ、そして自らを省みる中で、楽しい合宿を営むことを目指してをります。国際的な人付き合いも今後益々盛んになることと思はれますが、自らが語り易い雰囲気を作り出してゆくことが大切です。合宿の中では、体験としてこのことを学んで下さい」と合宿教室の主旨について語られた。

続いて、参加者を代表して西南学院大学四年西山博章君が、「この合宿教室では、疑問や迷ひを率直に班友に語つて下さい。また生きた言葉を見つけ生活の糧となるやう頑張つてゆきませう」と元氣よく挨拶した。

続くオリエンテーションでは、本合宿の運営委員長・長澤一成氏(国家公務員等共済組合連合会浜の町病院医師・32歳)が班構成、合宿運営体制などを説明した後、所感として、小林秀雄氏の文章「豊かな経験は心を豊かにし、貧しい経験は心を貧しくする」を引用され

ながら、経験するといふことの意味を説明された。その後「人生に対する心のありやうを整へてゆく修練の場が少なくなつてをります。本合宿では先人や先輩達が世の中の動きなどに対して、どの様に敏感に心を働かせてきたかが話されることと思ひます。各大学、各職場の中で一人一人の立つ立場は違ひますが、どの様に心を働かせて人と付き合つていくのか、また、世の動きを見てゆくかは同じなのです。この合宿で、平素の生活の中では体験できない世界に触れて下さい」と参加者に強く訴へられた。

続いて、合宿細部にわたる注意事項が指揮班長・矢永誠二氏（福岡県立玄洋高校教諭・31歳）によつて伝へられた。この後、直ちに参加者は各自に割り当てられた班室に入り、合宿参加の動機や、日頃の生活ぶりなどを含めた「自己紹介」を行ひ、昨年の合宿教室のレポートである『日本への回帰―第二十四集』の輪説に入つた。

## 合宿導入講義 「現代タブーの克服―自由闊達な学問のために」

日産自動車(株)栃木工場生産課 奈良崎 修 二氏



氏はまづ、御自身の大学生活を振り返られ「四年間に、生涯学んでゆける学問をつかみたい」といふ思ひで学生生活を送られたことを語られた。しかし自ら確かめ思考することが少ない大学の中で、ある先輩に紹介された江戸時代の儒学者伊藤仁斎の「学問する喜び」を語られた後に、副題の「自由闊達な学問のために」に触れられ「人と人との付合ひの中で発せられた言葉によつて自分の心が動かされてゆく、さういふ楽しさをこの合宿で味はつて下さい」と語られ、この合宿教室に対する心構へを参加者に示された。

続いて、今日多くの日本人がマスコミの言葉の一つのものさしとして物事を考へ、精神的努力を働かせない現代の風潮を経験を通して指摘された。その例として、昨今の教科書問題を取り上げられ、高校教科書で大東亜戦争における中国の記述で「進入」を「侵略」とあたかも変更になつた如く誤報したマスコミ、さらにその誤報を確認もせず謝罪した日本政府に触れられ「国内の教育に内政干渉を許している日本は独立国家とは言へない」と言及された。その根底には、敗戦後連合国に



よつて日本は諸外国に対して犯罪的侵略戦争を起したといふ犯罪者意識を植ゑつけられ、いはゆる「東京裁判史観」が日本人の心の中に深く浸透してしまつてゐる現状を語られた。さらに「日本が明治以来、み祖達が艱難辛苦したのは、欧米の列強の圧力により自立自衛したものである」と語られた後に、国の意義について、リンカーンのゲティスバーグでの演説の中の「国家の事業とは完結することのないものであり、先輩から後輩へ、死者から生者へと脈々として受け継がれてゆくものである」を引用され、「その中で、自分の存在を確認してゆくものである」と国と自分との関係について語られた。

最後に、昭和二十一年一月一日に公布になつた「新日本建設に関する詔書」を紹介され、「冒頭に『五箇条の御誓文』を挙げてゐるのは、昭和天皇が国の指針となる詔書として公布するには、急に民主的になつたのでなく明治の御代にすでに出来てゐたことを指摘なされた」と述べられ、戦前は悪、戦後は善とする中、昭和天皇がすでに文化の継承を行なはれてゐたのだということ語られた。そして、現代のタブーとして精神的努力を働かせない現状を打破してゆくには「過去に生きた人々の心に思ひを寄せ、共感し合ひ、それを自分の心に問うてほしい、それが本当の学問ではないのか」と強く参加者に訴へられ、御講義を終へられた。

講義の後、全参加者は班室に戻り、班別討論に入つた。講師の訴へられんとされた事はどのやうな事か、どこに感銘を覚えたかを中心に討論は進められた。

尚、この班別討論の時間は各講義の後に設けられ、お互ひが心に湧き上がる思ひを率直に語り合はうと努めながら討論が行はれた。最初は自分の思ひをなかなか言葉にできないもどかしさを感じられたが、回を重ねるごとに熱気を帯び、時に反発し合ひ、時に共感し合ひながら、班員相互の心の交流は深められていつた。

## 第二日

(八月六日・日曜日)

合宿の日程は、毎朝六時半に流れる「日本唱歌」の清々しいレコード音楽から始まる。洗顔と清掃を済ませた全参加者は、眉山を背後に望む広場に集合、朝の集ひに臨んだ。「国歌斉唱」「ラヂオ体操」「連絡事項の伝達」が行はれ、一同、今日一日を過す心の準備が

整へられる。

## 講義「明治の精神」

九州造形短期大学教授・国民文化研究会副理事長 小柳陽太郎 先生



先生はまづ、現代に生きる私達の眼には国の姿が非常に見えにくくなつてゐる現状を指摘され、それに対し「明治といふ時代は、日本の国の姿が本当によく見えてゐた時代であつた。国の命と自分の命が融け合つてゐた。進むべき道を一步誤れば、国全体が崩壊してしまふ危機的な状況の中で、何とか日本の国を守り支へてゆかうとする燃えあがるやうな使命感を持つて生きた時代だつた」と述べられた。そしてこの様な明治のはつらつとした生き様を示すものとして、明治二十五年、北方より迫り来たるロシアの脅威から日本を守らうと、軍事視察のためベルリンからウラジオストックに至る単騎シベリア横断を成し遂げた福島安正陸軍中佐、千島・樺太交換条約締結後の千島開拓に全力を注いだ郡司成忠海軍中尉、さらにその両軍人の連業の成り行きを一喜一憂で見守り、日本の将来に思ひを馳せた女流文学者樋口一葉の三人の同時代の人の生涯を、遺された文章を通して丹念に辿られた。

その中でも特に、福島中佐が横断途中で倒れた愛馬に寄せる慈しみの気持や、また郡司大尉が日本の領土となつた占守島に対する限らない思ひと捨子古丹で凍死した九名の隊員に対する厳肅な慰霊の気持ち綴つた文章に、愛馬や国土に対して限らない愛情を注ぐ優しさと、敵や困難に対しては勇敢に立ち向ふ強靱な精神の両面を兼ね備へた真のますらをたる軍人の姿を偲ばれた。さらにその当時無名の樋口一葉が、この二人の行動や生き方に心を動かされて記した文章や二人を通して国の運命を感じ国の行く末を憂へた文章を味はつてゆかれた。

最後に「現代に生きる我々は国の姿が見え難くなつてゐる。二人の軍人を始めとした明治の人達に、温かく、強く、燃え



上る様な精神が息づいてゐたかは心を働かせてゐなければ見えてこないのです」と平成に生きる我々の態度として先人の言葉に対して心を働かせて徳ぶことの重要性を示され講義を終へられた。

## 講義「古事記」と高校「日本史」

神奈川県立深沢高校教諭・国民文化研究会理事 國 武 忠 彦 先生



先生は初めに、昭和天皇崩御の際のテレビ報道に対する学生達の反応について話されながら「戦前は天皇について教へられ過ぎ、戦後は教へられなさ過ぎたのではないでせうか。教科書でも天皇に関することは出来るだけ触れないやうにしてゐます。私達は天皇を真に国民統合の象徴と受け止めてゐるのでせうか」と語りかけられた。そして先生が高校で日本史を教へられる時に天皇について詳しく触れてゐらつしやるところを、実際の教科書の記述を紹介されながら話してゆかれた。先生は「みそぎ」「伊勢神宮」といつた教科書の語句を説明される時に、『古事記』から伊邪那岐の命が伊邪那美の命を追つて黄泉の国へ行かれるお話や、須佐之男命、大国主神の物語を手振りや声色を交へて話され、我々は眼前に神々の御姿が浮かんでくるやうな思ひで時に爆笑しながら引き込まれて聴き入つた。そして先生は「これらの語句は神話に触れなければ解らないのです」と述べられた。

次に、倭建ヤマトタケルの命が西征・東征して遂には亡くなるさまを物語られながら「悲しいお話です」と繰り返し言はれ、「命の御生涯には、国土統一と朝鮮出兵とを天皇と共にやり遂げた疾風怒濤の時代に生きた人々の姿が映されてゐると思ひます。さういふ人々の喜びと誇りが『古事記』の伝説を支へてをり、日本人が神々の物語に触れて感じてきた喜びを、我々もまた感じる事が出来るのです。私にとつて天皇を考へるヒントは『古事記』でした。日本史の中でこれを教へずに何を教へるといふのですか」と語られて御講義を終へられた。

九州女子大学教授・国民文化研究会常務理事 山田 輝彦 先生



先生はまづ、先帝陛下の崩御を偲びながら「私達は先帝陛下の崩御により昭和といふ時代が完結する滅多にない劇的な瞬間に立ち合つたのです」と語られた。さらに今上天皇の御誄を読み上げられ「平易な口語文であり、親に対する愛惜の念の迫り来る心のもつた希有の名文です」と語られた。そこで夏目漱石の文章を引用され「明治は『自由と独立と己』の確立といふ非常に明確な精神を持つてをりましたが、昭和とはどのやうな時代であつたのか」と我々に問ひを投げかけられた。

昭和といふ時代は、時期により国民の国家像が違ふのです」と話された後『あかげらの叩く音するあさまだき音たえてさびしうつりしならむ』の昭和天皇の辞世の御製を偲ばれ「私には昭和は『悲しい時代』であつたと思へるのです」と話された。さらに「現代は豊かな時代であるが、その『悲しみ』とは敗戦による傷痕がもたらすものであり、その例として、戦死者慰霊祭や長崎・広島原爆慰霊祭などを挙げられ、また九十歳になる田中美代子さんが戦死した息子二人に手紙とかけがえないお金を靖国神社に送られた話から、戦死者に対する純粋な慰霊の態度を我々に訴へられた。

続いて、先生は昭和を見直されながら「戦後はポツダム宣言、日本国憲法、東京裁判が思想の枠組みを形成した」と話され、さらに戦後を平和といふ虚構に生きてゐることを痛切に批判し自決した三島由紀夫氏のこと言及され「一人の人間の死をもつて行つたことが時代を変へるのです」と語られた。そして大塩平八郎の「肉体の死するを恨まず、心の死するを恨む」の言葉を取り上げられ「現代は肉体の死に戦々恐々として、心が死んでゐるのです」と物質的に豊かに生きる我々の現状を指摘された。さらに天安門事件で中国の学生が語つた「私のためには悲しくはないが、祖国のために一度しか死ねないのは残念です」を取り上げられ、日本での国を軽視する風潮を戒められた。さらに「国といふものは祖先の方々が命をかけ



て作つたものであり、我々が引き継ぎ子孫に受け渡すものである永久の生命体であり、名もなき祖先の苦闘とまごころによつて支へられた言葉を通して全身で感じてゆかなければ国の姿は見えてこないのです」と語られた。

最後に「終戦時の昭和天皇の御製と、陛下をお守り申し上げようと一国民がマッカーサーに宛てた直訴状には、いにしへより伝はる『捨身飼虎』の精神があります」と語られ、陛下とまごころを尽した民の無私を偲んで降壇された。

### 第三日

(八月七日・月曜日)

### 講義「天皇と日本国家」

筑波大学教授・文芸評論家 村松 剛 先生



先生はまづ、現代の日本の風潮に対し、「日本人が日本人たる自己意識をもつてゐないといけない」と指摘された。そして現在日本の天皇は、英語ではエンペラーの称号で訳されてゐるが、欧米ではそれが独裁者の意味であり、戦争責任論の起きる原因ともなつてゐる。しかし明治憲法を引用されつつ、「天皇は立憲君主として憲法を遵守せられた」と話され、日本の天皇を独裁者とみる風潮の誤りを指摘された。次に元号について、「アジアでは支那大陸を支配した者が皇帝と呼ばれ、周辺国が支那皇帝によつて元号を決められた中で日本は独自の元号を守つてきた。民族はそれぞれの文化社会に特有の時間の集積があつて、これを守つていかなければならない、日本人は元号を通じて歴史に深い愛着をもつてきたのである」と元号を大事にすることの重要性を力説された。また文字の大切さを説かれ「日本人は漢字を日本風に訓で読むことを始め、また漢字を略して平仮名、片仮名を創るなど、日本人の体質に合つただけを支那から受け入れた」と日本文化の独自性を強調された。

続いて、天皇は祭祀が大きな仕事であると話され、古代は世界中が祭祀王により統治されてゐたが、殆どの共同体が巨大化すると祭主では統御できなくなつた中で、日本だけに祭祀王が存続したのは、権威と権力が分離してゐたことが大きな理由だと話された。また、「フランス革命の失敗は国王といふ国の中心が失はれたことであり、後には権力闘争が続いた。これに対し我が国では、明治維新といふ大改革ができた背景には、明治天皇の大御心があつた。また、終戦時に連合国が皇室を廃止してゐれば内戦が起つてゐたであらう。伝統と権威が安心感をもたらしたのだ」と話された。また、「日本文化の基本には神道があり、日本人は死者の魂に対して独特の感覚をもつてゐる。神道はある無限なものに対する信仰であつて日本人の体質の中に溶け込んでをり、天皇は神道の祭祀王として国民の心と繋がつてゐる」と述べられた。最後に先生は、「日本の文化は個性が強いものであり、日本文化を国際的に通用する論理で説明するには日本の歴史を学ぶことが大切で、歴史を学ぶ際には天皇に直面せざるを得ない。天皇をいかにして守るかが日本にとつて最も大きな問題である」と話され御講義を終へられた。

### 短歌創作の手引き

福岡県立山田高校教諭 與 島 誠 央 氏



氏は、先づ最初に「みんな苦勞しながらも短歌を詠むことができます」と言はれ、「それはこの合宿で心が動かされる講義を聴き、班別討論で自分の大切な気持ちを伝へようとして言葉を選んで心を磨いていく経験をしてゐるからです」と話された。次に以前の合宿教室で先輩の和歌に触れた感動を『和歌を詠むことが心の修練になるのですしたら、もつと詠んで美しい心になつていきたいと思ひます』と語つた女子学生の言葉を挙げられ、「美しいものはさらに美しい心から生まれるといふことを私は和歌を通じて実感しました」と述べられた。そして「短歌を創るのは、何かに感じた自分の心を整へていくことであり、短歌にすることによつて感動がもつと深く表れてくる」と語られた。最後に、小田

村四郎先生の連作短歌、若山牧水の友を思ふ歌と、江頭俊一さんの詩と短歌を誦まれ、「これらのすぐれた歌を見習ひながら、皆さんの大切な体験を歌に詠んで下さい」と言はれて御講義を終へられた。

## レクリエーション

この後、全参加者は、各々バスに乗車し、楽しみにしてゐた雲仙、仁田峠へと出発した。霧がかかり仁田峠の展望台からは展望がきかなかつたが、さらに徒歩やロープウェイで妙見岳まで登り、自然や景色を満喫して合宿生活の疲れを癒した。また中には足をのぼして仁田峠の近くにある昭和天皇の左記の御製歌碑（吉田茂書）を訪ねた友もあつた。

昭和天皇御製（昭和二十四年）

高原にみやまきりしま美しくむらがりさきて小鳥とぶなり

## 体験を語る

最初に、日本真空技術㈱に勤務する北浜 道氏（九州大学・工・昭60年卒）が登壇された。氏は先づ、亡き小林秀雄先生の「美には、人を沈黙させる力がある」といふ文章を紹介され、「感動すると言葉を失ふ。そしてその沈黙から本当の言葉は生まれてくる」と語られた。そして氏は、感銘を受け沈黙せざるを得なかつた文章として、村松剛氏と勝田吉太郎氏の対談集『一つの時代の終りに』を紹介された。その中に「アツツ島の玉砕」についての「（突撃する連隊に対し）遺族に對しての心配はするな、という電報を打て。陛下が東条さんに、そう指示された。通信機を破壊して、

もう最後の突撃をやっているところです。それでも陛下は、かまわんから打て、とおっしゃったそうです」といふ村松氏の文章に対し、「この文を読んだとき自分の心が掴まれて、身動き出来なくなる経験をしました。この沈黙するといふ経験が自分の生きる姿勢を支へてくれてゐます」と語られ、話を結ばれた。続いて北九州市立八幡病院に勤務する森田仁士氏（九州





大学医療技術短期大学部・昭52年卒）が登壇された。氏は放射線による癌治療に携はつてゐての体験を語られた。様々な患者を治療される上で、癌治療といふ性質上、常に苦心するのは、病状をいかに患者に告げるかといふことである。コバルト照射の治療を受けてゐた或る主婦は、肺癌で亡くした夫の看病をしてゐただけに自分の病状を自覚してゐた。それにも拘はらず、氏の苦心を気遣ひ、強いて明るく振舞つて下さる態度に接し「患者を物のやうに扱つてゐた自分が非常に恥づかしかつた。人の心を思ひやるといふこと、感ずべきことに臨んで感ずることを、その主婦から教はる思ひでした」と時に声をつまらせて語つてゆかれた。最後に、癌治療のための大手術を受けられた広瀬誠先生（前富山県立図書館長）の癌治療中の短歌を偲んでゆかれ、「この短歌に表はれてゐるやうな患者の不安、苦闘を思ひやりながら仕事に努めていきたい」と語られ話を結ばれた。

## 慰霊祭

「慰霊祭」に先立ち、濱田清人氏（福岡県立門司北高等学校教諭・29歳）によつて慰霊祭の説明が行なはれた。その後、夜のしじまの中、屋外の広場に設置された祭壇の前に全員が整列した。まづ、故三井甲之先生の

ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもる大和島根を

の和歌が長内俊平先生によつて朗詠され、慰霊祭は始められた。

次に関正臣先生の御発声で警蹕の声の響く中、戦時平時を問はず祖国日本の為に尊い命を捧げられた全ての祖先の御霊を最敬礼でお迎へする降神の儀が行はれた。献饌の後、参加者一同を代表して、宝辺正久先生が祭文を奏上され、明治天皇、昭和天皇の御製を小田村四郎先生が拝誦された。続いて玉串奉奠の後、全員で「海ゆかば」を斉唱、撤饌の後、最敬礼のもと御霊をお送り申し上げ、慰霊祭は滞りなく終了した。左に慰霊祭に於ける祭文と拝誦された御製を記しておく。



## 祭文

今年平成元年はも先の帝昭和天皇には類ひ稀なる国難に当らせ給ひ六十四年の長き御治世を遂げさせ給ひて神上りましましけるを、み民われら悲しみ喪に服しつつも、ここに第三十四回全国学生青年合宿教室を九州島原の地に開催し今宵眉山の麓波も静けきこの海の辺の広庭を齋庭と定めまつりて、とこしへにみ国守ります遠つ御祖達をはじめみ国のためにいのちを捧げ給ひてわれらが祖国日本を守りましまししもろものはらから達のみたまを招きまつりてみ魂祭りを仕へまつらむとす。われらここに日本全国より集ひ来り、過ぎし昭和激動のさ中、昭和天皇が御一身をなげうち給ふ尊き大御心もてわが国柄を守り給ひし御聖徳を偲びまつり、祖国の古き歴史を、古事記に、また歴代天皇の大御歌に、また明治先人の残されし至誠潤達の業績に学びては心開きてかたみに語り合ひわれらが日本の国の行くべき道をさだかに見定めんと、心あはせてこの集ひを過ぎし来れるさまを、畏かれどもいましみこと達みそなはし給ひみ国のゆくてをとこしへに守らせ給へと参加者一同に代り宝辺正久謹み敬ひ恐み恐みも白す

明治天皇御製（拝誦者 小田村四郎）

月前薄（明治四十年）

はるばると風のゆくへの見ゆるかなすすぎが原の秋の夜の月

夢（明治四十四年）

たらちねの親のみまへにありとみし夢のをしくも覚めにけるかな

花（明治四十五年）

あかず見し山へのさくら春の日のくれてのちもおもかげに見ゆ

をりにふれて（明治四十五年）

ひとむらと思ひし雲のいつのまにあまつみそらをおほひはてけむ

昭和天皇御製

雲仙嶽にて（昭和二十四年）

高原にみやまきりしま美しくむらがりさきて小鳥とぶなり

雲仙嶽・仁田峠（昭和三十六年）

大阿蘇は波路はるかにあらはれて山なみうすく霞たなびく

引揚者に対して（昭和二十四年）

国民とともに心をいためつつ帰りこぬ人をただ待ちに待つ

折にふれて（昭和二十三年）

風さむき霜夜の月をみてぞ思ふかへらぬ人のいかにあるかと

七十歳になつて（昭和四十五年）

ななそちを迎へたりけるこの朝も祈るはただに国のたひらぎ

よるこびもかなしみも民と共にして年はすぎゆき今はななそち

沖繩（昭和六十三年）

思はざる病となりぬ沖繩をたづねて果さむつとめありしを

那須の秋の庭（昭和六十三年）

あかげらの叩く音する朝まだき音たえてさびしうつりしならむ



講義「これからの日本と日本人について」

国民文化研究会理事長・元亜細亜大学教授 小田村 寅二郎 先生



先生は先づ、「即位の礼」と「大嘗祭」について、これらの儀式が一世一代の御代みよがひ替りに行はれる伝統的なものであること、そして二つの儀式の持つ重要な意義や過程を懇切に説明された。次に国家の存亡を賭けヨーロッパで行はれようとしてゐるECの経済統合を例に出され「今後国際化が進むにつれ一つ一つの国がその存在意義を一層強くしてゆくであらう。かうした『国家』間の関係において大切なのは、『独立不羈ふきの姿勢』であり、これは国民一人一人が『独立不羈』の精神を持つことから生れるのであつて、そのためには各人が学問により精神を鍛へねばならない」と訴へられた。

さらに先生は、「民主主義」について「現在の日本人は戦後、西欧から導入された民主主義が良いものであると無条件で考へてゐるが、この民主主義を思想・政治経済的制度・統治形態の三つの側面それぞれ視点から考へ直すべきだ」と指摘された。思想的意味としては、「五箇条の御誓文」には民主主義の精神が明確に表はれてゐるのであつて、西欧から導入されるまでもなく、我が国において培はれてきたのであり、昭和天皇は「新日本建設に関する詔書」の冒頭にこの「御誓文」をあげられることにより、その御確信を表明されたのだと話された。政治、経済的制度の意味としては、千四百年の昔に聖徳太子がすでにデモクラシーのシステムの良さと多数決原理の弊害を見抜かれ、形式よりも内実を求めようとされたのであり、我々は「十七条憲法」に立ちかへり、考へ直すべきだと訴へられた。最後に統治形態については、民主主義はあくまで西洋で生まれたものであり、その民主主義の統治形態を基準に天皇のことを考へると誤解が生ずるが、その誤解を解くこと

こそ『独立不羈』といふことであると話された。

最後に、歴代天皇が国民の幸福を願はれ誠心誠意を尽してこられたといふ歴史的事実を御製等を通して指摘され、そして今後我々が今上天皇をお守り申し上げていかななくてはならないと語られて、御講義を終へられた。

講義『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』輪読の導として

福岡・浜の町病院内科医師 長澤 一成 氏



氏はまづ、この本の著者黒上正一郎先生の御生涯を「黒上君之碑」に刻まれた碑文から偲んでゆかれ、先生の聖徳太子研究が、求道的な独学により為されたこと、また、それは、梅木紹男さんとの厚い友情の世界から生まれてきたことを指摘された。そして、『三経義疏』を読んでゐて、難解な箇所に出会ふ毎に太子の肖像に向ひ、香を焚いてお祈りをされたといふ先生の御研究姿勢を、津田左右吉氏の「資料分析的研究」と比較され、「聞く」といふことは簡単なやうで、実は大変難しい。黒上先生のお祈りは「聞く」といふことです。太子に思ひを寄せて、どういふお気持ちでその言葉を遣されたのかを黙つて考へてをられたのです」と語られた。

次に「輪読」の意義について、「読み方の間違ひを正し合ふなどするうちに一つの対象に皆の気持ちに向ひ、心が輪になつてつながつていく」と話された後、「聖徳太子の思想と信仰」について語られた。氏は太子の思想・信仰が具体的な姿となつて結実したものとして山背大兄王等、上宮王家一族の滅亡を取りあげられた。皇極天皇二年、国民の信頼を集めてゐた上宮王家を滅ぼさうとする蘇我入鹿により襲はれた山背大兄王は、兵を起せば必ず勝つにも拘らず、『一つの身の故に由りて、百姓を残り害はむことを欲せじ。是を以て、吾が一つの身をば、入鹿に賜ふ』といふ御言葉を残して御一族諸共自刃されたことを『日本書紀』にもとづいて紹介された。そして、氏は「聖徳太子の『諸の悪をな作せ。諸の善奉行へ』といふ

御遺言が山背大兄王に受けつがれ、この御決心を導いた」と語られた。更に「歴史を振り返ると、祖国が平和なまゝに継続していく蔭には、多くの方々の努力と犠牲がある。私達はそれを知らないだけだ。それを自覚し、自分自身の耳と目で事実を改めてみることが必要だ」と訴へられた。

最後に、輪読箇所の中で「こゝに我は他に没し他はまた我に生きて」について、太子の片岡山のみ歌を偲ばれ「飢人を思はれる聖徳太子の御心、山背大兄王の先きの御言葉、そして終戦時の昭和天皇の御製に仰がれる国民を思はれる大御歌と国民の陛下に寄せる思ひには一本の太い糸が確実に通じて流れてゐる。その糸は意識してゐないところで私達の体の中にも確実に流れてゐる。それをこの合宿では学んでゐるのです」と訴へて御講義を終へられた。

講義「若き友らへ語りかける言葉―知識と学問―」

国民文化研究会理事・事務局長 長内俊平 先生



先生は、今の時代「知識」を持つてゐることで安心してゐる人が多いが、それと「知恵」といふものは全然違ふといふことを貴重な経験談を織り交ぜながら話してゆかれた。先生は独特の抑揚ある調子で「政治形態に於ける君主制と民主制の優劣を、考へ続けて二十年、結論を見出せぬまま僕は疲れ果ててしまつた。さうした時、神棚に向ひ明治天皇の御製『世はいかに開けゆくともいにしへの国のおきてはたがへざらなむ』を拝誦し愕然として知る所があつた。信じる人の言葉を信じるしかない」と知つたのです」と話された。先生は一つの問題をとことん考へつづけられ、かけがへのない信念を得られたといふ話をされたのである。そして先生は「物事にすぐ答を出して覚え込んでゐる『知識』は自分の人生に何ら関係してこない。現実の人生に勇敢に立ち向ひ、自分の内部を見つめる所から、人生につながる、生きる力となる

『知恵』を掴むことができる」と語られた。最後に先生は「学問をしてゆく道統に於て生死を共にする友がどんなに大事な



ものであるのか知つてもらひたい」と強く訴へられ御講義を終へられた。

## 創作和歌全体批評

九州大学医学部循環器内科医師 小柳 左門氏



氏は初めに「合宿の参加者全員が歌をつくる経験をされたのは尊いことです。私達は祖国に連綿と続いてきた和歌の世界に足を踏み入れたのです」と話され、「自分の心は解つてゐるつもりでも、独りよがりな表現が沢山あります。班別の相互批評では作者の気持ちを思ひ合つて、友人の歌を直し合ふことをして下さい」と語られた。そして歌稿から参加者の歌を幾つかとりあげられて、「一首の中に二つの気持ちは詠めない」「実感を離れた言葉を使つてはいけない」などと指摘されたが、ユーモアを交へ添削されていた。講義は時に笑ひの起る和やかな雰囲気が進み、初めて歌を雲のよそに求むな世の人のまことの道ぞしきしまの道」を読み上げられて、「日本人は和歌を詠んで自分の心を見つめることを最も大切にしてきたのです」と言はれ、講義を終へられた。

## 夜の集ひ

激しい日程を消化してきた参加者も、この時はかりは大いに宴に興じた。今年もまた、坂東一男先輩（朝日麦酒働務）から心尽しのビールが届けられた。班毎に、大学毎に様々のグループが登場し、歌ひかつ踊つた。「神州不滅」「進めこの道」の大合唱によつて宴が閉ぢられた後も、各班室に戻つて最後の夜を尽きぬ思ひを夜の更けるのも忘れて語り合つた。

第五日

(八月九日・水曜日)

合宿教室最終日の朝がきた。前夜は夜の集ひの後も、各班で心尽きせぬ語らひが持たれたらしく、夜遅くまで明りの灯つてゐる部屋が多く見られた。四泊五日間に亘る合宿教室の日程も、あと半日を残すのみである。参加者一同は朝の爽やかな空気を胸一杯に吸ひ込み、声高らかに国家を斉唱した。

講話「昭和天皇の最後のお歌」

亜細亜大学名誉教授・国民文化研究会理事 夜久正雄 先生



先生は、崩御された昭和天皇が重い病床の中にあられても、御歌をお詠みになり、発表されようと言われたことに大変驚き感動されたことを話された。次に終戦時の昭和天皇を御製から偲んでいかれた後、「陛下の御心が国民に伝はらぬやう妨げる動きがあるが、耳をそば立てて“天皇様のお声を聴くやう努力して欲しい」と語りかけられた。そして昭和天皇の御製七首を参加者全員で声を合はせて拝誦し、御講話を終へられた。

全体感想自由発表

閉会式も間近に迫り「合宿教室を通しての各自の所感を全員の前で自由に披瀝し合ふ全体感想自由発表の時間となつた。参加者の胸には、どのやうな思ひが渦巻いてゐるのだろうか。参加の動機はそれぞれ違つてゐても、この五日間寝食を共にし、友の言葉に、そして先人の生きた言葉に心を寄せ合つた体験は各自の心にしっかりと刻みこまれたに違ひなかつた。一

人の学生がこみ上げる思ひのままに登壇して発表を始めると、一人また一人と次々に壇上に立ち所感を披瀝していった。「輪読や短歌相互批評では年齢の差を越えた深いつながりを感じた」、「新たな問ひが生まれ人を信じることの大切さを感じた」、「真剣に話をする」と白い目で見られる風潮の中で、本合宿ではとても素直な心で語り合ふことが出来た」、「先人の言葉をかみしめてゆくと自分の心が清らかになつた気がした」、「他人の眼を気にしがちな自分であつたが、一生懸命に語る友の姿に接して、素直に何でも語れる様になつた」、「スローガンでない本当の学問に触れることが出来た」、「迷い乍ら参加したが日本人としての誇りを持つことが出来た」、「昭和天皇の御製を詠み涙が出て来た」、「大学生活で友との付き合ひが表面的で不満だつたが班友との真剣な語り合ひが出来た」と。

時には涙を浮かべ、時には笑顔で心からの思ひを率直に語る友らの真摯な姿は、実にはすがすがしく、聞く者に深い共感と感動を呼び起した。

全体感想自由発表の後「運営委員の所感発表」に登壇した酒村聰一郎氏（福岡県立筑紫丘高校教諭）は、この合宿に寄せられた加納祐五先生（元日特金属工業(株)常務）のお手紙を紹介され、「先生は『拙き身を痛感すればこそ、人生の真実を求めようとしてきた』と書かれてゐます。私達は、この合宿で班別討論や短歌相互批評を通じて友の心に迫つていかうと努めました。友の言葉に耳を傾け、その思ひを受け止めようと必死に努力したのです」と語られた。そして「ここに集まつた学生と今後も共に合宿で学んだ学問を続けていませう」と呼びかけられて降壇された。

### 走り書き感想文執筆

全参加者は班室に戻り、合宿感想文の執筆と第二回目の和歌創作にとりかかつた。走馬燈のやうに蘇つてくる合宿での様々の思ひがうちつけに書き綴られた。ここにまとめた「感想文集」はその文章と和歌を編集したものである。



## 閉会式

全参加者が心を合はせ精魂を傾けて営んできたこの合宿教室も、最後の日程である閉会式を迎へた。先づ全員で国歌を斉唱した後、参加者を代表して中央大学四年三林浩行君が「僕はこの合宿教室で学んだ言葉と、共に過してきた班友のことを思ひ出していききたいと思ひます」と挨拶した。

続いて主催者を代表して、国民文化研究会副理事長・宝辺正久先生が「この五日間、一所懸命に先生方の御講義を聴き、感激したことを班友と共に語り合ふことにより、二百人の参加者の心が一つになりました。私達は先生方の様々な御講義を通して日本の文化を学んだのです。その中でも聖徳太子の御慈しみの御心が歴代の天皇様に受け継がれ、国民もその御心を守らうとしてきたことが大切なのです」と語られ、閉会の挨拶を終へられた。

その後、全員で「神洲不滅」「進めこの道」を斉唱し、千葉大学二年中富仁君が力強く閉会宣言を行ひ、四泊五日にわたる合宿教室は無事全日程を終了した。

式の後、お互ひに別れを惜みつつ、来年の再会を約して鳥原の地を後にしたのであつた。

助言者の紹介

(元)熊本県砥用町立砥用東中学校校長

梶中央塩ビ製作所 代表取締役

(元)法政大学 人事部長

梶平塚魚市場 相談役

梶宝辺商店 代表取締役

舞岡八幡宮宮司

尚綱学園常務理事・兼尚綱大学講師

私立東福岡高校講師

(元)三菱重工

日本銀行監事

梶不動産コンサルタント 代表取締役

県立佐賀商業高校非常勤講師

浄土真宗本願寺派沼田組光隆寺僧侶

梶千代田コンサルタント 専務取締役

航空自衛隊航空教育隊生徒隊

日商岩井梶大阪本社・エネルギー第一部部長

拓殖大学外国語学部教授

梶講談社広告営業推進部部長

熊本市立帯山中学校教授  
神奈川県立湘南高校教諭兼亜細亜大学非常勤講師

福岡県立新宮高校教諭

梶戸田建設開発事業統轄部事業計画課副参事

熊本市役所技師

福岡県立福岡中央高校教諭

熊本県立第二高校教諭

山口県立高森高校教諭

久留米大学附設高校教諭

大分県立大分豊府高校教諭

福岡県立武蔵台高校教諭

梶日本興業銀行 広島支店営業課長代理

仙台防衛施設局施設企画課専門官

佐賀県立病院好生館内科医師

福岡県立筑紫丘高校教諭

福岡県立須恵高校教諭

梶日立製作所 エネルギー研究所研究員

日本油脂(株) 戸塚工場技術研究職

福岡県立玄洋高校教諭

那覇防衛施設局建設部設備課

福岡市立弥永小学校教諭

フリーランスコピーライター  
福岡県立山田高校教諭

小野 吉宣

青山 直幸

折田 豊生

占部 賢志

白濱 裕

宝辺 矢太郎

名和 長泰

石井 雅晴

藤 寛明

小柳 志乃夫

山根 清

安藤 洋志

酒村 聰一郎

那須 三元

松井 哲也

上村 栄章

矢永 誠二

神谷 正一

是松 秀文

布瀬 千代子  
與島 誠央

福岡県立門司北高校教諭

濱田清人

船橋市立古和釜小学校教諭

竹内孝彦

京華産業㈱

桐山澄子

神奈川県立上溝高校常勤講師

大日方学

㈱東和銀行昭島支店

長場真一

中央大学文学部卒

久保田真

福岡県立玄界高校常勤講師

倉光朋子

合宿運営委員

長澤一成・白濱裕・山根清・酒村聰一郎

指揮班

矢永誠二・森田仁士・上村栄章・長場真一

是松

秀文・濱田清人

事務局

名和長泰・藤寛明・石井雅晴(事務協力者)

蘇原

幸枝・田籠榮一(本会職員) 福岡県立筑紫

丘高校二年

辻伸幸・高棕剛太・石原章弘

熊本県立第二高校一年

吉原美鈴・富士登加良

子・江原紀子

国立市立国立第一中学一年・坂東陽子

記録班

松吉基光

写真班

フリーカメラマン 佐藤道明





走り書きの感想文集（各別集録）

これは閉会間ぎはの三十分間で参加者全員に、四泊五日間の感想を走り書きで書いてもらったものです。「仮名遣ひ」は原文のまま掲載してあります。

なほ、各人の感想文の末尾に小さい活字で載せられてゐる和歌は、この感想文とともに提出された第二回目のもです。この文集の末尾にまとめて掲載したものは第一回目の創作です。対比して御覧いただくと大変に進歩してゐる跡がお分りいただけることと思ひます。

心一つになった短歌相互批評

(中央大学 文 四年 三林浩行)

四泊五日間を班員と共にすごして、今思ひ出されるのは短歌相互批評のことです。僕は相互批評の長い時間が終了し、皆と姿勢を正して黙想をしてゐたとき、本当にいい短歌相互批評の時間であつたと思へました。といふのは初日から四日目まで、ずっと班員と時を過ごしてきて、今一つ何か班員がしっくり心一つになれてゐないなと思つてゐたのです。だが有難いことに、この時間ではそれぞれの人から素直な言葉をきくことができ、本当にいい感じであつたからです。

つくらねばならぬ歌ぞとせかせつ歌をよみけり別れのまきは

一生をかけ得る仕事に就きたい

(拓殖大 政経 三年 角田 学)

昨年そして今年の合宿教室を通して学んだことは、歴史を学ぶことを通して、一度しかない貴重な人生をどう生きていくのかを深く考えること、そして自分が何をすることによって社会に貢献していくのかを真剣に考えること、更に物事の本質をしっかりと見つけることの三つです。

あと約一年程で、進路を決めることになるわけですが、深

く国家社会と関わることができ、一生をかけるにたる仕事に就きたいと思ひます。そしてこの合宿で出会うことのできた多くの友ともっともつとつき合いを深めていきたいと思ひます。

勝ちマスと踊り歌ひて拓大のますらをこの意気示しけり

「青葉繁れる」を聞きて

刀折れつひに倒れし正成はみ国守りぬ七たび生まれ

遠い存在を近くに感じた

(鹿児島高専 土木工学 五年 長谷正義)

自分はこの合宿のパンフレットを見て、少し不安でした。なぜなら今まで天皇の事や国のことなど考えたこともなかったし、そういう事を考えている人々は少し危ないんじゃないかと思つていたので。しかし実際に参加してみても、私の考えは間違つていたということに気付きました。と同時に今まで遠い存在だつたものが近くに來たような感じでした。

自分なりの意見も後の方では少々発表できるようになつたし、この合宿に参加して本当に良かった。友達も出來たし、他の同じ年ぐらいの人がどういふ事を考えているのかもわかつた。自分は今年度卒業し社会に出るけれどもここでの体験を忘れることなく頑張つていこうと思つた。

暇があれば社会人になつてもまた参加してみたい。

友達と討論し合つたこのつどひ長くて短し四泊五日よ

この体験社会に出ても忘れずに一所懸命頑張るゆかむ



## 本当に充実した四泊五日

(西日本短大 法 二年 田中裕一郎)

初めての体験でした。こんなに講義を一所懸命聴いたのはその内容は難かしいものだと思いましたが、言わんとするところはよくわかり感心しました。共感するところは多くありました。しかしそれをすごいことだなどと思っても信念を貫いて、生きていくことがいかに難かしいかということがよくわかりました。

もう少し勉強し、自分の信ずるものをみつけれ、それに向かってどんどん進んでゆける様になりたいと思いました。

この四泊五日、本当に充実しており、自分では、ああよくやっただと言えます。

ことのはをさがして思ひ伝へけり歌つたなきも喜び多し

## 合宿後どうするかが大切だ

(早稲田大学 法 一年 川瀬弘至)

私は先輩の紹介で、今回の合宿に参加させていただきました。他大学の友達や社会人の方々とも深く交流できるときき、自己の理論の確立のため、あるいは今後の活動方針をも含め、大きな参考になるのではないかと期待してやっけて参りましたが、私のこの志は十分に達せられず、合宿を終えようとしております。というのも班内での議論が単なる感想発表になってしまい、生産的な議論があまり交されなかった

## カメラ・レポート1



様々な思いを胸に全国各地から参加者が集まって来る。

からであります。

これは私のせいでもありませんが、それ以上に我々が今後いかに活動していくかを話さない雰囲気があった。

これからの日本をつくるのはわれわれです。これからの天皇制も国政もわれわれの手にかかっているのです。

「何を感じたか」それはもちろん非常に大切なことです。そこにとどまらず「だからどうする」が更に一層大切です。

先帝の大御心に添ふやうに日本の明日われらつくらむ

## 大御心に近づく学問がしたい

(福岡大学 法 聴講生 亀田隆久)

今振り返ってみますと、私の心に印象深く残っている言葉があります。それは村松先生が言われた「これから我々国民は、陛下のことをもっと考え、お慕い申し上げなくてはならない」という言葉と長内先生が言われた「日本の国体とは、陛下と国民との心の繋がりのことである」という言葉です。そのようなお話を聞きまして私がいましましたことは、日々の生活の中で和歌の創作や祭りの実践等を通して心を鍛え、陛下の御心にできる限り近づける学問を積み重ねていくことが大切であり、そのことが来年十一月にとりおこなわれる大嘗祭をより良きものにしていく土台となるのであると思いました。

美しき祖国に生まれし喜びがおのが心ゆ湧き出づるなり

## 第二班—男子学生—

短歌批評に寝食を共にした喜びを感じた

(早稲田大学 法 四年 新屋信隆)

班長は、一人一人の素直な心聞き出すのが大切であると思つた。しかし、本当に皆、自分のいいことをいっているのか気にかかった。ところが、4日目の短歌相互批評の際夜遅くまで班員の歌を一生懸命いい歌に直そうとがんばっている姿を見て私は少し救われたように思いました。

班員が他の班員の歌をどう感じたのか、懸命に語ろうとしている姿勢に感動した。班での話し合いでは、なかなか自分の思いを語れなかった班員が、歌の批評をし、自分の思い、感想をありのままに語っているのを目にし、4日間寝食を共にして合宿に臨んだことに喜びを改めて感じる事ができたと思う。

### 短歌相互批評

班員の一人一人が素直にもおのれの思ひを語りけるかな  
友どちの語らん姿目にすればおのが心もはればれとする

言葉が生きて舞っている

(日本大学 文理 四年 井坂信義)

合宿はあっという間に終ってしまいました。何か夢のよう



な気がします。振り返れば何と多くの言葉が「幸はう」であったことでしょう。言葉が生きて舞っている、そのような感じを持ちます。

「言葉を大切にす」「人の話をよく聴く」「思いやりをもつ」「慈しみをもって接する」「真友となる」多くの言葉がここでは生きています。しかし、帰れば忘れ去られるかもしれない。私は帰っても、この言葉一つ一つを大切にし、それらの美しい言葉そのままの人になりたい。その様に思っています。言葉に生命を与えるのは人間であり、人間に人の命を与えるのは言葉であり、相呼応して本当に素晴らしい人間となるのではないのでしょうか。

一言を大切にせでなくて世の乱れを憂ふ資格あるやは  
帰りての後こそはげめいざ共に学びの道はいと遠くも

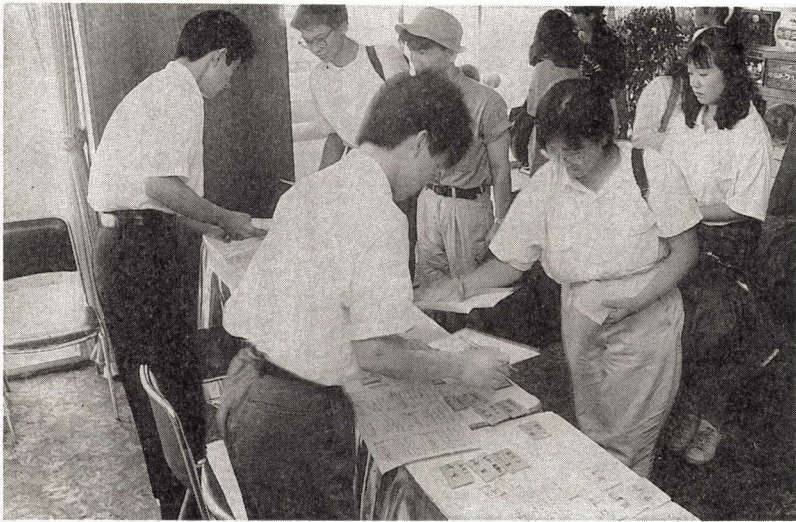
今までは外見だけで勝手に解釈していた

(拓殖大学 外語 三年 唐沢 昇)

はじめの二、三日は、心の中に葛藤がありました。天皇についての講義は右翼ではないか。国旗の掲揚や国歌の斉唱は強制されるものか。慰霊祭の儀式は宗教ではないか。その他諸々の問題が、頭の中をめまぐるしく回った。でも四、五日ぐらいになるとほとと解消された。それはこれらの問題を、今まで外見だけで判断して、本当の意味がよくわからなく、勝手に解釈していた為だ。

とにかく自分にとって得たものが多すぎて書ききれませ

カメラ・レポート2



受付で参加許可証を呈示し、名札と資料袋を受取ってから、各自の班室へと向かいふ。



ん。今までの軽く浮わつた気持ちを後悔しています。また、この合宿にきて自分の心を強く打ったことは、今の若者でもこんなに沢山の人が物事をこんなに真剣に考えているのかということでした。

つらき日もふと気がつけば刻々と終りの鐘の近づきて悲し

### 太子の言葉が印象に残る

(九州大学 法 二年 大瀬博幸)

一番強く感じたのは、この合宿に参加していた人たちの生き生きとした顔であった。その一方で自分の表情の暗さや冷たさを見た時の落胆であった。このような時に班別討論のときに読んだ「忿を絶ち、瞋を棄て、人の違ふを怒らざれ。人皆心有り」という言葉が非常に印象に残りました。聖徳太子の心との闘いがわかり、自分も自分の中にある「おごった心」をなくすよう努力しなければならぬと思った。自由感想発表に登壇された方々は、皆んな「忿を絶ち、瞋を棄て」を実践されているように思えて、とても素晴しかつた。

忿を絶ち瞋を棄つる御言葉はわれの心にひかり与へり

### 次回は今回以上の感動を味わいたい

(亜細亜大学 経済 一年 富井達之)

「行きたくない」これが参加する前の自分の気持ちでした。

合宿の締切りも延ばし延ばし、結局は行かされたようなもの

だった。合宿には遊びがあつて笑ひがあるだろうという甘い考えをもつて参加した。実際に参加すると考えがまとまらず講義についても言葉が難かしく初日から嫌になつた。そんな合宿ではあつたが今考えてみると何か心にジンとくるものが残っている。参加する前は否定的であつた自分が、ここまで考えさせられたことは初めての事だつた。初めから気を入れて参加した人にとっては大変な収穫だつたと思う。今回の反省は、事前の知識不足が原因だつたと思うので、次回は今回以上の感動を味わいたい。良い合宿でした。

参加して皆の心がまとまりて初めてわかるそのすばらしさ

### 感じたことを正確に相手に伝える

(沖縄大学 法 二年 山田悦朗)

ものの試しにと思つて参加してみましたが、実際参加してみると講義の内容に難しいところも沢山ありました。本当に実があり素晴らしいものでした。

班別討論では、最初のうちはなかなか自分の思ったことを表現できませんでした。少しずつ気持ちを正確に伝えられるようになったと思います。私にとって、この合宿に参加した一番大きな目的は、この班別討論で自分のもっている能力を最大限に生かし、また他の班員の意見を取り入れ、感じたことを正確に相手に伝えることだと思ひました。この経験は、この合宿が終つた後も日常生活、学校生活、社会生活において必ず生きてくると信じています。

始まりしときは長いと思ひしに合宿も終りて一瞬のことなり

### 言葉がいかに大切かを学ぶ

(早稲田大学 政経 二年 岡田 浩)

この合宿で言葉がいかに大切かということ学びました。言葉を発する、書く、読むことによつて、人は相手の感動を受けとめ、また自らの思いを伝えることができます。さらに自分の漠然とした思いを言葉、時には拙いつぶやきによつて一生懸命伝えようとすることにより、自らの内なる感動、考えを整理することができます。

このことは特に短歌を作るときや鑑賞するときに感じました。短歌を読むと歴史の表面的授業ではわからない先人の心の中にまで入りこむことができます。また歌を作ることにより、漠然とした感動をより正確に認識し、その内容を整理する作業により、感動がよりきめ細かになっていくのが感じられました。

合宿の窓より見ゆる海原は遠くはるかに広がっており

### 第三班—男子学生—

自然な雰囲気が出来て嬉しかった

(千葉大学 工 四年 石川名津朗)

今年も又、班長をやらせてもらひましたが、中々何をどう



開会式では、昭和天皇の崩御を悼み、三十秒間の黙禱が捧げられた。

話していったら良いのかつまる所が多かったのが残念です。ただ、班友たちの、一つの話し合ひの場といふものをつくりたいといふ意識から、自然な雰囲気になっていったことは嬉しかったことです。夜の集ひの後は、部屋に帰り、歌を歌って、遅く迄和歌の相互批評をやりました。充実してゐたと思ひます。

それから、長内先生の御講義の際、御製を調べ高く誦みあげられたその御声に、大変に感動しました。何といふか、御言葉の一つ一つがしみ入って来るやうな感じでした。短歌の良さを、又一つ見直したやうな気がします。今、帰ってからやってみたいと思ふことは、御製を何べんも繰り返して誦んでみたいといふことです。

長内先生の御講義を拝聴して

高々に御歌誦まるる師の声の響きそのまま心にしみ入る

### 天皇陛下について思う存分話し合えた

(亜細亜大学 法 一年 佐塚 謙)

普段話すことがなかなか出来ない天皇陛下について、思う存分話し合うことが出来て大変うれしく思います。近頃、天皇についてタブー視する傾向がある中で、あえてこの問題に正面から取り組み、且、このような場を提供して下さった国文研の方々には、心より感謝いたします。故郷を遠く離れたこの島原の地に集いし我らは、一人一人、今の日本に疑問を抱き、将来の日本を憂う、生粋の日本人であると私は確信い

たします。

余りにも書きたい事が多すぎて、書ききることが出来ません。私の書きたい事は、この感想を読んでいる人、一人一人の心の中にあるものと全く同じであると思ひます。最後に、私の考えを最後まで聞いてくれた友、又、自分の考えを私に余すことなく聞かせてくれた友に感謝の言葉を送りたいと思ひます。

涙ぐみ感想述べたる乙女見て我も心に涙流るる

### 何て真剣な眼をしているのだろう

(拓殖大学 外国語 三年 栗山隆司)

私はゼミナールの松本先生に誘われましてこの合宿教室に参加したわけですが、ゼミを履修する際に合宿教室に参加しさえすれば単位は確保できるというあまりにもおもしろい情報を入手したのです。この合宿について友達とは、「参加する人は皆堅い人達で所詮私達とはとけこみにくい人ばかりだ」と話していました。初日に班の人達と話をしている段階ではやはりその通りだと感じましたが、次第にその顔が見れるようになると、何て真剣な眼をしているのだろう、まさにこれこそ澄んだ眼というのだろうと思ひました。その時、私は、私自身の利害しか考えず、こんな素晴らしい人達から遠ざかっていたことを恥ずかしく思ひました。

全体感想発表の時、ある女性が「日常真面目な話をする周囲から白い眼で見られました、この合宿の参加者は真剣



に話し合ってくれました」と言って涙を流していました。

彼女のように人々から遠ざかって見ていた私のような者こそ白い眼で見られるべきなのです。私は自分の行為に恥ずかしくなり、彼女にあやまる言葉も出ないまま、ただただ目を潤ますだけです。

この合宿は自己を見直す点、自分が今迄に深く考えたことのない講義内容を聞いた点、その他諸々の事を学べた点について私には大変有意義なものとなりました。この背景には、講義をされた先生方から、その裏で支えていただいた方々は勿論ですが、この四泊五日未熟な点ばかりの私と真剣に討論して頂きました班友にも心より感謝致します。班付の與島さんには貴重なお話をして頂きましてまことに有難うございました。

ある女性の全体発表を聞きて

壇上の友の泣きたる姿見て醜き我的心ぞ恥づる

知識の人ではなく知恵の人になってゆきたい

(早稲田大學 第一文 二年 大島伸一)

この合宿の問題点、改善すべき点を僭越ながら挙げさせていただく。まづ第一に疑問に思ったのは、天皇制といふ問題に人格といふ観点からしかアプローチしてゐないのではないかといふことである。先生方は東京裁判史観を一種の禁忌と考へてをられる様であるが、「悪しき天皇もまた天皇か」といふ、天皇制を考ふるに絶対避けられない問題について何の

カメラ・レポート4



主催者を代表して、国民文化研究会理事長・小田村寅二郎先生が「友と心から親しみ合ひ、語り合ひ、そして自らを省みる中で、楽しい合宿を営んで下さい」と参加者を励まされた。

言及もなされなかつた。先生方の心の中にもこの種の禁忌が存在してゐるのではなからうか。矢張、理念・制度といふ視点からも研究なさつて行つて欲しい。

次に合宿のデイスカッションの形式についても一言意見を言はせて戴く。現行の男女毎の班別討論では異性がどういふ感性をもつて物を見てゐるか、またどの様な意見を持つてゐるのか知ることとは出来ない。男女が天地の法則に従つて一致協力して行く事が、日本の国体（国民が天皇の下に中心帰一する国家形態）を護持していくためには必要不可欠であると確信するものである。国民文化研究会の会員の方々に一顧一慮して戴ければ幸ひに存する。

さて意見文はここ迄にして感想に移る。今回一番心を打たれたのは長内先生の御講義であつた。日頃私が行つてゐる学問は知識偏重の色を帯びたものであることを痛感した。今後知識の人ではなく知恵の人になるべく日々研鑽していききたい

長内先生の講義をきいて

真剣にまこと説きたる師の影に軍服姿の弟君をともの見ゆ

最後までやり遂げた時の充実感がすばらしい

（九州大学 法 二年 花田芳夫）

この合宿教室に参加したのは去年につづいて二回目である。ハードスケジュールなので最終日にはぐったりとなる。しかし学界のトップレベルにあられる講師の先生方の御講義を聞いたのは、それだけでも参加した甲斐があつた。また班

友との親密な交流をもつたのは貴重な体験であつた。勉強すくめの厳しい合宿だが、最後迄やり遂げた時の充実感はすばらしいし、これによつて得られた感動は日常生活では滅多に味わうことの出来ないものである。

全体感想自由発表を聞きて

壇上上がりし友は涙ぐみ己が思ひを語りけるなり

心を修練していくとは実感のこもつた言葉を積み重ねていくことである

（徳島大学 総合科学 三年 倉木聖也）

この合宿教室に参加させて頂いたのは今回二度目ですが、前回と同じく、否それ以上に「言葉」の大切さ、また、その厳格なる事を強く感じました。班別討論において、自分の実感した事を語つていかうと思ひ、さう努めてきたつもりではありますが、なかなかさかしらな心の消しさり難き事を痛感しました。心を修練していくとは、この実感のこもつた言葉を積み重ねていくことであると思ひます。

小柳先生が御講義で話されました三人の明治の先達は、先生の仰有る如く「国のいのちと自分のいのちが一つにとけあつてゐた」方々でありました。福島中将にしろ、郡司大尉にしろ、その志の雄なること、そして明治陛下へのまことのあつきことに感動しました。昭和の御代に生を享け、これから平成の御代を担つていくのは我らが世代であります。明治の先達の生き方を知り、如何に生くべきかの指針を手へられた



やうに思ひます。今上陛下を本当にお支へ申し上げることが  
できるやう頑張つていきたいと思ひます。

最後に、小田村先生はじめ国文研の先生方、班付でお世話  
になった與島さん、そして班長、班友の皆さん、ありがたう  
ございました。

長内先生の御講義を聞きて

父母にまこと尽せてふ言の葉に両親の顔浮かびて来たり

和歌相互批評

四日前初めて会ひし友どちの心偲びて歌をなおさむ

#### 第四班 — 男子学生 —

何か心が動かされた

(九州国際大学 国際商 一年 庄子文郎)

私はこの合宿に来るのは初めてでした。人に勧められての  
ことだったので、あまり本気で行く気ではありませんでした。  
しかし、講師の御話を聞いているうちに、何か心が動か  
されるものがありました。なるほどと共感したこともありま  
した。この合宿で得たこと、感じたことといえば、人間は年  
の差に関係なく何か共通するものを持っているんだというこ  
とでした。これからは、そういうことを大学以外の社会にお  
いても生かしたいと思う。ここにきて損はなかったと思う。

討論を終へにし時の解放感この心地良さ誰かわからん

カメラ・レポート5



参加学生を代表して、西南学院大学経済学部四年西山博章君が力強く挨拶した。



人生を豊かなものにした

(中央大学 経 三年 福田剣充)

僕は三度目の合宿参加ですが、今回の合宿は一番苦勞しました。今回は討論をしても、話がそれてしまい、一体何のために参加しているのだろうかと思ったことが何度もありました。しかし、三日目の夜に班員とこの合宿に参加する意義などを語り合い、今までの合宿の中で、一番おもしろかったと思います。自分の将来を決める大事な時期に、この合宿に参加し、自立の精神や豊かな心の育成などの大切な心を教わり本当に良い経験をしたと思っています。毎回感動するものの、己の怠惰の為に、いつもその場かぎりになっていました。これからは、少しずつでも地道に努力して、自分の人生を豊かなものになりたいと思っています。

合宿で学びし日々は短かれど我的心は豊かになりけり

班友と真剣に話し合へた

(西南学院大学 経 四年 西山博章)

班別討論では初日からなかなかかみ合はない議論が進んでいった。班長として何とかしなければと思ったが、一日目、二日目となかなかうまくゆかないまま過ぎてゆき苦しかった。しかし、食事の後や消灯後、一対一で話すしかないと思つてできるだけ積極的に話していった。一対一で話してみるのと、皆、班別討論を突りあるものにした、自分の思つて

ることを何とか討論の場を出してゆきたいと考へてくれたることがわかった。そして、三日目、班友の一人から「このままでは班別討論をやつてゐる意味がないのではないか」といふ言葉が出た。その夜は遅くまで、如何したらよりよい班別討論ができるか、真剣に話し合った。

翌日四日目の討論及び輪読は班員皆の心遣いが感じられ、非常にうれしかった。充実した時間だった。

全体感想発表の折に

み友らの涙ながらに語らるる言の葉聴けば胸込みあぐる

大いなる満足感を得た

(早稲田大学 文 三年 福島伸行)

島原における四泊五日の青年合宿教室は、最初あまり期待している所がなく、自己鍛練の場ととらえていた。しかし何よりもこうした機会であるからこそ、真の友を求めゆく姿勢が大事と思い、自らに喝を入れ、班別討論では積極的に発言していきましました。はじめは班内の発言の少なさにいらだちをおぼえ、自分の思いを共有する人間が一人もいず、一人よがり終わるのではないかと思ひました。しかし、徐々に皆の積極的な発言がでてくるようになり、また、班長や国文研の方々の僕の発言に対する情熱溢れる真摯な対応に大いなる満足感を得ることができました。

筑紫路に足跡のこす我ありて心にきざむ友どもの声

御講義に感動し、共鳴した

(亜細亜大学 経 一年 宝田 誠)

この合宿へ来る前は「天皇と国家」のことはあまりよく知らず、合宿へは行きたくなかった。しかし、先輩が合宿の申し込み期間を過ぎても熱心に勧められ、その先輩の言葉に魅かれて参加した。

初めて会ふ友と語ることは、自分の心が広がり、大変良かった。講師の方の御講義は、所々わからないことがあり、最後の方では多少混乱もした。しかし、全部は理解できないけれども先生がおっしゃったことに感動し、共鳴を受けたことがあり、自分自身に何かを得たという気持ちである。そして、素通りしやすい天皇のことを、東京に帰ってもう一度勉強したい。

今もお語りられし言葉の胸にせまり我の心は奮い立つなり

相手のことがわかっていくことの素晴らしさ

(九州産業大学 芸術 一年 藤原武史)

初対面の人達といきなり討論をするという体験は、私にとって非常に面白いものであった。相手について何も知らないという先入観なしの状態から、話を進めていくうちに相手のことが段々と判っていく。これは、日常の生活の中であまりその様な機会を持ってないだけに貴重であり、すばらしいことだと思ふ。

カメラ・レポート6



開会式後教室に戻り、お互ひに自己紹介。四泊五日を共にする仲間達が参加の動機や抱負を語り合ふ。

私の班は、特に色々な体験を語ることによって、かなり打ちとけた雰囲気であった。討論をしている時には、かなり真剣であり、班付きの人をまき込んでかなり危険な状況になったことも幾度かあった。それでもなお、我々の間には楽しい雰囲気が存在し続けた。それが私にはとてもすばらしいことであるように思う。

別れゆく友と語りふ日々ありて思ひ出深く胸に残るも

## 第五班―男子学生―

みんな、ありがとう

（九州大学 法 三年 三沢茂美）  
この合宿ではじめて班長をしたのですが、非常にむずかしくて何もできませんでした。輪読中も時間とか、みんなに話してもらうことばかり考えてなかなか本当の気持を語ることも、相手の心を察することもできませんでした。本当に申し訳なく思います。ですが、いろいろと班員のみんなは、協力してくれてありがとう。

合宿の御講義の中でたいへん印象に残ったのは、長沢さんが中国の虐殺事件のことにふれて、学生運動の中心的存在であったある女性の訴えることばが非常に胸にせまってきてなみだがしらずしらず出てきました。その言葉の中で一番印象に残ったのは、「もし生きることがゆるされるなら、子供を

生んで、りっぱな中国人に育てたい」ということでした。あへぎつつ展望台にたどりつけば友らが我にやつたとさげべり

深まるものを感じる

（西南学院大学 経 四年 田崎恭士）

合宿は二回目ですが、来る度に何か深まるものを感じます。ある本を読んでいて、日本人は日本がどれだけありがたい国であるかがまだわかっていないと書いてありました。天皇存在の意味など、少しづつわかりかけてきたと思います。短歌を詠むことは、文章を書いたり、気持ちを表現する時にも役立つそうです。

こうして集まり、言葉を交わせるということは奇跡だと思います。大事に歩いていこうと思っています。

昨日まで歌など詠まぬ生活に短歌の世界開かれにけり

人の話を聞く事は難しい

（佐賀大学 理工 三年 白木潤）

今回の合宿は主に聞く事に専念した。しかし人の話を聞く事は簡単な様で実に難しい事だった。そして又、それは実に疲れる事だ。しかしこうした合宿などで人の話を聞く訓練をしていかなければならないと思った。班別討論では始め他の班員の話をお聞きばかりで、自分の意見をあまり言わなかった。四日目あたりから積極的に意見を言い始めたが、とても言い尽くせたとはいえない。ましてや、三日目までは自分の



言いたい事もあまり言わなかっただったのでその時間が実に残念に思える。そうした事で班別討論の時間は僕にとって非常に短かった。もつともつと班員の人達と語り合いたかった。それが今合宿での唯一の心残りだ。

慰霊祭にて

国思ふ同志と共に御祭りを行ふ事の有り難きかな  
かがり火の紅蓮の炎は吾々の愛国心のうつしなりけり  
友どちは今日を限りに別るれど結びしきづなは永遠に忘れじ

体の中から力がわき出る

(亜細亜大学 経 一年 斎藤義宏)

初めてこの合宿に参加してみても、非常に多くのことを学び得たと痛切に感じている。また自分の不勉強さも感じた。実際、班友と討論等をしていても、うまく説明出来ない非力さに情なくなつた。しかし、これはあきらめてしまい、無気力になるというようなことでは全くなかつた。逆に、体の中から力がわき出るような気になつたのである。これは合宿中、自分を素直に出せたからだと思う。今までは相手に軽蔑されたくないと思う気持ち、自分を素直に出そうとする気持ちを幾分抑制してきた。そんな自分を恥かしく思った。この合宿では全くその必要はなかつた。そのことがかえって自分の成長を遅らせたのであろう。この合宿に参加して本当に良かった。ここでの四泊五日は生涯忘れることの出来ぬものとなる。

カメラ・レポート7



合宿教室の一日は朝の集りから始まる。爽やかな空気を胸一杯に吸ってラジオ体操。



合宿初日にて

思ふこと一人語れぬ寂しさに我一人にて紫煙をくゆらす

素直な心で歴史が見られる

(千葉大学 工 二年 中富 仁)

私は今回の合宿教室に参加してとても良かったと思っています。それは古事記や、日本書紀や明治に生きた人々の言葉を迎えることによって、その時代の人々が、どのように生き、どのように感じていたかを偲ぶことが少しではあるが、できるようなったからです。このような精一杯に生きてきた我々の祖先の欠点や失敗だけを集めて歴史を見ている人が私のまわりにも沢山います。そういう人たちの姿勢は僕の眼に冷たく映ります。しかし私も以前はそういう見方をしていました。そういうことを本人は気付いていなかったのです。そして気付いてもなかなかそれを認めようとはしなかったのです。

去年の夏合宿以来、悩み、考え続けてやっと素直な心で歴史が見られるようになりました。

全体感想発表で石川先輩の話の聞きて

とつとつと言の葉逸びて感想を言ひたる声は震へてをりし  
おのれ自ら合宿に行く気になるといふ君の言葉に驚きにけり  
来年は卒業ですといふ君のおもはは実にすがしきかな

心に訴えるものがある

(北九州大学 外国語 一年 土橋功昌)

大学の友人たちとは「おしゃべり」することはあっても、お互いの心を開いて「語り合う」ことがないことに、やるせなさを覚えていた頃でしたので、それほど悩むこともなく申し込みました。その頃イデオロギーの問題で心にしこりが生じていたのですが、実際参加してみるとイデオロギーを越えて何かに訴えるものが感じられ、この合宿を少々でもいぶかった自分の心の狭さに恥じ入りました。

正直言ってこの五日間は大変きつい思いをしました。でもやらされているという気持ちは毛頭なかったので、夜遅くまで続いた短歌批評も目をこすりつつもやり通すことができました。何もかもが初めての経験で大変刺激になりました。

壇上に登りし友らの言の葉をしみじみ味はふ心はすがし  
新しき友と過ごし五日間顧みればああもうなつかし

不思議な共有意識が生まれてきた

(早稲田大学 政経 二年 岡安太郎)

とびぎりの現実主義者であり同時にニヒリストを自認する私にはこの合宿は非常に辛いものであった。今回の合宿参加にあたって私が目標としたものは、国際化時代における権力体系としての天皇制の把握であった。しかしあては外れた。場違いとも思った。ことに戸惑わされたのは「リンドク」と

いう得体の知れない活動である。正直言って馬鹿馬鹿しいとは思いつながら、輪読を重ねるうち、文章が奥深く豊かなものであるように思えてきて、また輪読をする人間たちの間に不思議な共有意識が生まれてくるのを認めざるを得ませんでした。最初に感じた異様な靈氣、それは積重の言霊だったのではないかと思うようになりました。

和歌全体批評に

我が歌にまきおこりたる哄笑にひとり笑へぬ我が心なり

## 第六班—男子学生—

実感のこもった言葉にふれえた充実感

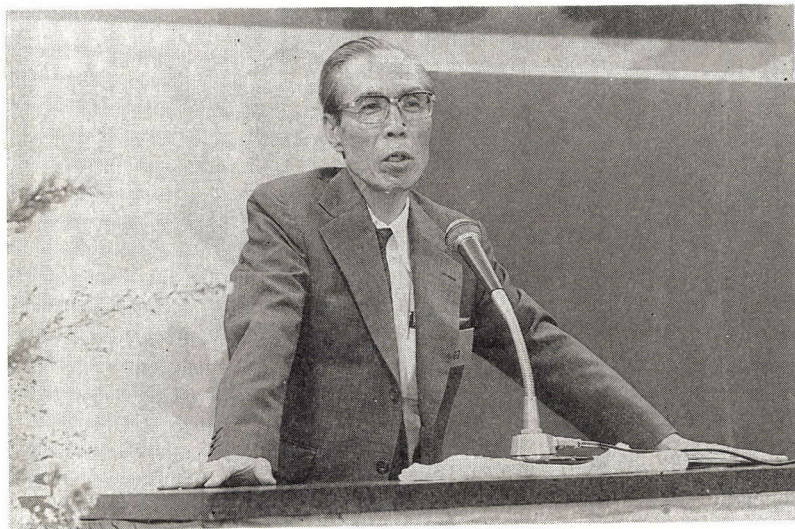
(早稲田大学 政経 四年 鶴野光博)

何とも言えぬ充実感が湧いてくるのを覚えます。それは、先生方の御講義や班友との話し合いを通じて、その人の実感の籠もった言葉に多く触れ得たからだと思います。班別討論で、班友が感じのままに、共感なり、反感なりに正直に話してゆくのを聴いていると、自分の心に生気が吹き込まれるようで嬉しくなりました。普段の生活で実感の籠もった言葉に触れる機会が少ない、というより、そういう言葉に対する飢えを失いかけていたのではないかと気付かされました。

慰霊祭では全く予期していなかった感動を経験しました。

ああ日本人はこういうことを大切にし、祖先の時代から続け

カメラ・レポート 8



講師ひとりひとりの人生観に根ざした真摯な御講義が展開されてゆく。写真は「昭和の精神」と題してお話される、九州女子大学教授・山田輝彦先生。

てきたんだなあという思いに突然おそわれました。又誦み上げられる御製を聴き、御霊に言葉を手向けるということが、本当にいいなあと思えました。

手を握り別れゆくかな友どちとやうやくにして馴染み合ひしに

### 明治の先人達のことをもつと知りたい

(亜細亜大学 経営 二年 佐藤潤一郎)

御講義の後、小柳先生が「今日は三人しか紹介出来なかつたけれども、本当に素晴らしい人達はもつとたくさんいます。明治二十六年だけでも一つのドラマが出来るくらいに」と言われた。これらの人達についてももつともつと知りたいと思つた。又歴史上の人物でなくても森田先輩の体験発表に来て来た患者さんの話は素晴らしかった。

班生活でも、班員のことに常に心を配り、夜も寝つけないでいる鶉野班長をみて副班長の立場にしながら自分のことばかり考えている自分が恥ずかしくなつた。一年生の高倉君が悩みを本当に素直に話してくれたのに自分には答えてやれなかつたことに力不足を感じ、また、彼が私の担当している朝の体操を心配してくれたことに彼のやさしさを感じた。残念なことは村松先生の御講義を単なる知識を教えこむ講義だと勝手に決めつけ、心を働かせようとしなかつた為に何も感じなかつたことである。何か大きなものを損した気がする。

班室での写真撮影の際に

真面目なる友の語りし冗談に班員皆が笑ひこけたり

閉会宣言を控へた中富兄を見て  
椅子に座し出番を待ちますわが友の顔は緊張にこぼれており

### 人の心にはじめてふれた

(九州大学 教 一年 高倉庸輔)

合宿直前の八月四日に、合宿に行けないとホテルに電話したが與島さんと三沢さんに説得されて出発しました。ホテルに着くと與島さんと三沢さんが僕を見て本当にうれしそうに顔をしてくれた。初日の僕は班別輪読や班別討論がものすごくいやに思われました。ところが二日目になると少しづつ楽しくなつて来たのです。班員や班つきの澤部さんの顔をみているとなにか嬉しくなつて来ます。みんな個性があつて、素直で一所懸命で、見ていて気持ちがよく、いつもこんな毎日だったらなあと思ひました。こんなに人間の心というものを意識したのは初めてです。自分は今まで相手の心を真剣に考えたことがあつたらうか。思っていることがうまく書けないのですが、この合宿で感じたことを大切にして、日常生活に戻つて行きたい。

友らみな帰りし班室にひとりあて思へば日々は夢の如くに

現代の大学教育では得ることの出来ない感動を  
得た

(獨協大学 法 四年 木下裕司)

現在の大学教育(特に史学、法学の分野)は、所謂「進歩

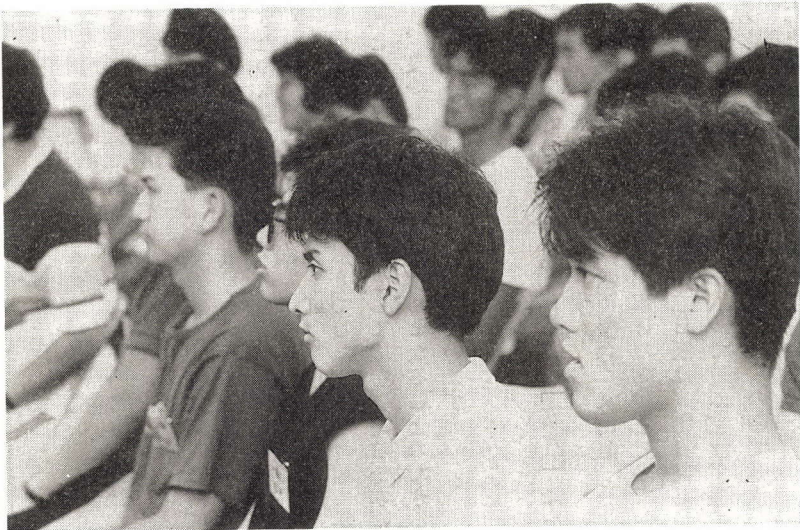


的」なる思想に大方支配されてゐます。其の根元は「東京裁判史観」であり、特に私の専攻してゐる「憲法」の分野では、この史観が通説となつてゐます。この愚劣なる史観超克の糸口を求めこの合宿に参加しました。合宿は私の期待に充分答へてくれるものであり、単なる理論、理屈、あるひは学説など形式論争にあけくれる大学の講義とは大いに違ひ、先人達の言葉、壮烈なる生きざまにふれ目頭の熱くなる事が何度もありました。国武先生の神話に基づく国つくりのお話、小柳先生の郡司大尉、福島中佐のお話など涙なくして聞くことは出来ませんでした。又村松先生の御講義は大変感銘深く、「神道」の事、並びに、「大嘗祭」又、「祭祀王」についてのお話は、今後の私の研究に大いなる指針を与へて下さいました。そして何といつても忘れられないのは長内先生の「孟母三遷」の本質論についてのお話です。真の忠心、孝心の意味について考へさせられました。

最後にもう一つとても感動したことは、対馬の白井伝先生の美しく、清らかな横笛の音です。「青葉繁れる」と「四条駉」の曲が流れた時、楠公父子の心が伝はつてくるやうで、はらはらと流れる涙を禁じ得ませんでした。

清らかな対馬の人の笛の音をしみじみ聴けば涙流るる

たぐひなき誠つくせし楠公の心伝ふるあや笛の音よ



講師のお顔をじっと見つめて聴き入る学生。

ありのままの自分を自然に語ることができた

(早稲田大学 第一文 五年 本多達雄)

今回の合宿で最も大きかったことは、ありのままの自分を極く自然に語ることが出来た、といふことである。一年、二年の時参加した時は、気負いや理屈にとらわれてゐた気がするが、今回は自分の実感をもそのまま話すことが出来嬉しかった。

班の一人一人が、ありのままの自分の心を表現してゐる姿に、何とも言えないかけがえのないものを感じ、感動し、素直に耳を傾けることが出来た。その中でも班長が相手の心を思ひやりながら、自分を飾らず自然に語つてゐるのに触れて非常に素晴らしいと思つた。

小柳先生の語られた明治の人達の祖国と同胞に対する心からの愛情と勇敢さに感動すると同時に、眼前に福島中佐が愛馬と別れを惜しむ場面が浮んでくるようであつた。自分も小柳先生のやうにかうした方々を蘇らせるような歴史の学問をやつて行きたいと思つた。

森田仁士さんが体験発表で話されたように、日々接する人に対し真心を尽くして生きたいと思つてゐる。

とつとつと己が体験語りたる友の言葉の心に迫り来  
思ふこと語りゆくとき我を見る真剣なる目のありがたかりき

良い友達と出会えた

(高千穂商科大学 商 三年 村上貴生)

私はこの合宿に参加する前まで、自分は祖国日本を愛し、天皇様を敬慕している人間だと思つていたが、合宿の諸先生の御講義を聞いてゐるうちに、私の思いは頭の中だけのものであることに気付かされました。今のままではいけないと励まされる思いがしました。

班別討論では皆、真剣に私の意見に耳を傾けてくれました。又、私自身が人の意見をあそこまで真剣に聞くことができたのも初めてでした。皆知識を語るわけでもなく、うわべのことを構うのでもない。心から語つてくれたからだと思ひます。本当に良い友ばかりでした。この合宿で学んだことを糧として日本国民の一人として国を支える一本の柱となるよう、又少しでも世の中の清めとなることのできる人間になるよう日々精進していきたいと思ひます。

島原にのぼる朝日に祈りたり我が国ぶりにゆるぎなかれと

初めての体験で混乱したが「素直」になれた

(拓殖大学 外国語 二年 名和憲真)

僕はこの合宿に参加し、連日の講義と討論でかなり精神的に疲れていました。最初の二日間、毎日同じことの繰返しでいやでした。近くにはプールで遊ぶ家族、遠くには島原湾の美しい景色が見え、一日中ホテルの中で勉強している僕達にとつては、非常に残酷だと思ひました。

しかし三日目になり先生方の御講義を聞いてゐるうち、次第に日本人の精神というものがわかつて来ました。今まで理



解できなかったことなので大変うれしく思いました。また戦争で亡くなった方々の気持ちも大変良くわかりました。ただ慰霊祭は全く初めての体験で頭の中が混乱しましたし、超自然現象をもって教えられることになりに抵抗しました。

しかし、僕はこの合宿に来て少し心が澄んだように思えます。自分で思ったことを何でも言える、この合宿に来て良かったと思います。今はまだ複雑な気持ちですがこの合宿で得た「素直さ」はきっと忘れないでしょう。

疲れたる我的心をいやしたり窓より吹きくる鳥原の風に

## 第七班 男子学生一

自分と友らをつなぐ言葉を大事にした

(中央大学 文 四年 土井郁磨)

班員の皆のおかげで、班別討論・輪読・短歌創作等で、興味深く、又身につまされる意見が多く出ました。「天皇陛下と自分のつながりをはっきりと感じられない」「先生方の話を聴いても、理解は出来るが心に響いてくるものが少ない。そんな自分の心がかわらぬ」等々。

そのやうに皆が思っていることは、又自分の思ひでもあるやうに感じられました。人それぞれに違ふ個性を持ち乍ら、友の思ひが、自分にもよくわかるのは不思議なことでした。自分と友らをつないでゐる言葉を大事にしたい。耳をそばだ

## カメラ・レポート 10



班別討論では、講義のポイントを確かめ合ひながら、感想や疑問を率直に語り合ふ。



ててじっくりと聴きたく思ひます。

夜久先生の御講義を聴きて

大君の御歌に耳をそばだてて聴かむと語る言葉尊し

### 自分の感じる心の足りなさに愕然とした

(東京大学 法 三年 松岡恒男)

今回で合宿参加は二度目になりますが、何か大きな壁にぶち当たっています。それは、自分で本当に感じたということが少ないからです。何かわかったような気がする、わかったと思ひ込むのが厭でなりません。まだ自分が至らないのか、輪説をしても、言葉は頭の中ではわかっているが、それを体の中にまで入れて血や肉とすることができません。どうすれば本当に知ることが出来るのだろうか。ホームー少年のような心境に達したい。今回の合宿では、自分の感じる心の足りなさに愕然とさせられました。慣れが緊張を殺しました。しかし、そのことに気付いただけでも合宿に参加して良かったと思っています。今回の経験を踏み台にして本当に感じたり信じたたりするということは、どういう心持ちなのかを追い求めたい。わかったふりをするこただけは止め、自分の心に素直に問うていくつもりです。

妙見岳に登りて

薄き雲山を包みて我が心身を身に纏ひ進みゆくなり

### 個の生命以上に価値あるもの

(早稲田大学第一 文 三年 樫本 稔)

平成の御世に変わっても、国を思い、友と真剣に話を交わす場を与えて下さったことを何よりも感謝したいと思ひます。

私たちは、自分とは何かを今こそ問わねばならない。個の生命以上に価値あるものはないかと思ひを致さねばならない。この問いを徹底してつきつめるうちに私は「歴史」という言葉に導かれてくるのです。アリストテレスの著書に「賢い人にしたがうことは賢い」という言葉がありますが、すぐれた先人の事跡を心静かに偲べばいいのではありませんか。

今の風潮が歴史を軽視し、それが改まるぎざしの見えないことは心苦しいことですが、己れの理念にしたがって精一杯のことはしたいと思ひます。

言の葉の幸ふ国ぞ敷島の道遠くとも我踏みゆかむ

### 相手の気持をわかろうとする姿勢を学んだ

(同志社大学 工 二年 村木隆広)

今回でこの合宿は二度目になりますが、昨年になまして学ばされることの多き合宿であった。とりわけ今回は、人の話を自分なりに勝手に先に解釈してしまわないで、じっくりと話を聞き、相手の気持をわかろうとする姿勢を持ち続けることの難しさを学ばされたように思う。そういった心の姿勢こそ

感すべきことにあたり感ずる心を持ち得、日々の生活を生き生きとしたものにするのだと痛感した。しかし、長内先生が言われたように、知ることと行うことは全く違う。そのことが、日々の生活においてここで学んだことを少しでも実行していこうと努力する中で問われてくるようにも思った。

白井先生の横笛をききて

横笛の調べに御国を思はるる御心しみじみつたわれるなり

我もまた師の君のごと己が心いく年にわたりみつめてゆきたし

### 素直になつて友人の話聞くことができた

(防衛大学校 国際関係論 二年 石巻義康)

村松先生や諸先生方の講義を聞き、又本当に美しい歴代天皇の御製を拝誦するにつれ、自分が今まで悩んでゐた「天皇とは自分にとってどういふ存在なのか」といふ疑問が、単に言葉で説明のつく問題ではなくて、心で感じ、その感じたことをそのままに大切にしていくことで理解すべき問題であることに気づかされました。班別討論の際に、班員・班付の皆さんに自分のかうした疑問を打ちあけてその中で一人一人の考へてゐることにふれた時、本当にさうであることを実感し、これから生きてゆく上での一つの指針を得たやうに思ひました。昨年は初めての合宿といふ事で自分に少し気負ひがあり、素直になりきれない面がありました。今年、最初は最初からリラックスして合宿に臨むことが出来、その分素直になつて友人の話も聞くことが出来たやうに思ひ、自分にとって実



各班ごとに食卓を囲み、おいしい料理をいただく。

のある合宿であったと思ひます。

全体感想自由発表を聞きて

み友らの語る一言一言に真心ありて心打たるる

本当に人間らしい合宿だった

(拓殖大学 政経 三年 岡崎 巧)

私は、ここ数年、特に大学に入ってから、めまぐるしく、ろんなことを体験してきたし、またそうするようにしてきたつもりである。今回の参加もその一つである。いろんな人の意見を聴き、それに対する答えを持ちそして語る。本当に人間らしい合宿だったと思う。その中でも私は、長内俊平先生の講義がとて心に残っている。先生のようにいろんなことをなされてこられた人の話を聴くと、話される言葉の一つ一つが重みをおび、私の心に深く入ってくる気がした。また「知識」についても考えさせられた。多くのことを知り、それに対して十分な体験をすること。まさに今の私の考え方にぴったりであったから、なおさら感動した。私は先生のような人間味のある人物になりたい。そのためにも、もっともつと学ばねばならないと思う。

全体感想自由発表の折

み友らのせつせつと語る言の葉に心震へる思ひのするも

心の底から話し合える友人ができた

(亜細亜大学 経済 一年 吉井一聡)

この合宿には、自分のためになるものを得ようとして参加しました。初日はこんな調子でやっていけるのかと思つていましたが、慣れてくると意見もでるようになってきたし、班友とも違和感なく話せるようになりました。森田氏や長内先生の話には特に感動しました。申し込み書のアンケートに出会いの尊さを学びたいと書きましたが充分に学ぶことができました。そして自分の思つていることを言葉にして相手に伝えることがいかに難しいことであるかを知りました。合宿前と比べると自分が少し大きくなったような気がします。この地で新しい友人がまた六人増えました。しかも自分の心の底から話し合える友人がです。来年はアメリカ留学のため参加できませんが、再来年は自分の仲間をひきつれて参加したいと思ひます。

苦勞してやつと仕上げし作品を読み返したれば駄作と思はる

### 第八班—男子学生—

これからの一日一日がもっと重大

(九州大学 工 一年 松岡篤志)

自分は日本民族として生まれたのであり、この日本なるものを大切にして真の日本人とならねばならぬと、痛感した。今迄は、全身から発する実感ではなく、頭でそう考へていたに過ぎなかつた。特に班別討論で、班付の国文研の方が、



御自身の戦争体験、天皇陛下への思い、国を思う気持等を我々に実感を込めて語って下される姿に触れ、その切実な願いが自分の心に強く迫ってきて、何としてもその願いに応えたいという気持が心の底から湧きおこってきた。

又、和歌創作並びにその相互批評では、言葉というものがいかに難しく、いかに重要であるかを思い知らされ、言葉を鍛えてゆかねばならぬと痛感した。然し、これからの一日一日の過し方が我々にとってもっと重大な意味があると思う。

全体感想自由発表

切々とあふるる思ひ語りゆく友の姿に心打たるる

### 心を働かせることの大切さ

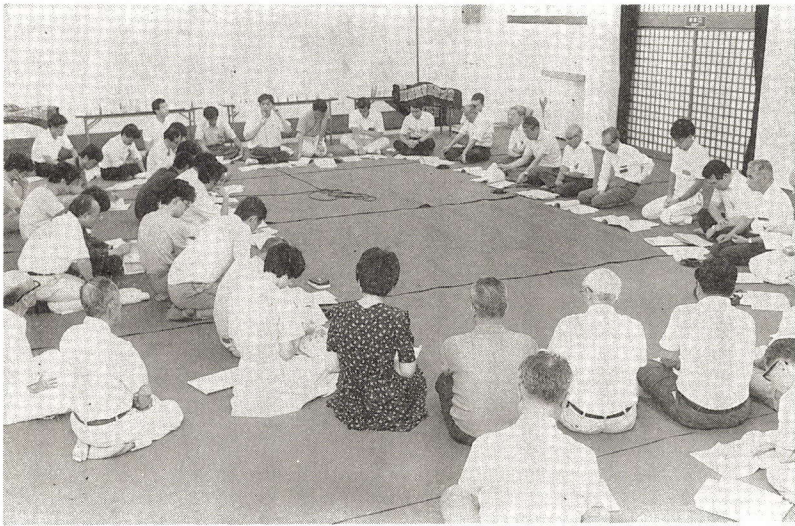
(亜細亜大学 経営 四年 木村謙二)

今回の合宿を通じて思ったことは、ほかの人のことも考へられ、その人の気持を感ずるといふことです。先生方の話される言葉の端々から、班別討論での班友との語りひから、つくづくこの事を思はされました。

また、小柳陽太郎先生の御講義で、歴史を知るには、心を動かす、働かせることが大切であり、心を動かすとは、先人の言葉に触れるしかないでせう。といふ御言葉が心にのこつてゐて、帰ってからこの気持を忘れずに持続していけるやう勉強し頑張っていきたいと思つてゐます。

そして、小柳先生のやうに、身体から溢れるやうに楽しく友達に語っていったらどんなにいゝことかと思ひます。

### カメラ・レポート 12



合宿教室を実り多きものにするために、運営委員をはじめ各スタッフが集まり夜遅くまで検討会がもたれた。

全体感想発表の折に  
素直なる思ひをひたに語るる友の姿に胸つまりくる

### 課題を発見した

(西南学院大学 法 二年 田鍋彰司)

私は、とにかくこの合宿で、これについて勉強してゆくん  
だという課題を見つけようということでも来ました。今年は、  
本当に大切なことを学びました。歴史に向う態度です。

小柳先生始め数々の講演で、自分は歴史に出てくる人達と  
楽しんだり悲しんだりすることを忘れて歴史に向っているこ  
とに初めて気付きました。ところが、この事は、私の恩師占  
部先生の学問に向う姿勢を本気で見つめていれば、もっと早  
く気が付いていたはずでず。

分かるというのは変わることだと占部先生からよく聞きま  
した。長内先生も知識で知っていても実行できないのでは、  
学問したことにならぬとおっしゃいました。今度こそ本当  
に、自分を変革したいと思えます。

今合宿の全日程を終了して詠める

行ひの伴はざるは学ならずと師の語られし言葉忘れじ

### 人を尊敬し信ずる事

(防衛大学校 理工 四年 古川 茂)

今回、改めて再認識させられたことがあります。それは  
長内先生の講義の中で、「両親と話す時、しっかり、お父さ

ん、お母さんと言えますか」と言われたことです。幼い頃か  
ら、寝る前や起きた時、外から帰って来た時、出かける時の  
挨拶をしつけられました。例へば就寝前に兄弟三人両親の前  
に正座して「お父さん、お母さん、明日もいゝ子であります  
ように、おやすみなさい」という風にです。今になってみる  
と、それが非常に大切なことなのだと思付かされました。

この合宿で人を尊敬し信じる事のできる自分に変わりました。  
親と喧嘩はしますが、子供達の事を心から思ってくれる  
素晴らしい両親を誇りに思います。先ず人を尊敬する事、が  
この合宿で心に残った事です。

伝へ難きことの言へたるこびは何にたとへんとふべからず

### 人と共感して立ちどまって深く考えたい

(東北大学 文 二年 伊藤智実)

全国から縁あって集った友達と五日間寝食を共にし、語り  
合う機会を得られたことは非常に幸運であった。

全日程を通じてあまりにも人の話を聞かなくなった。自分の  
多少の知識をひけらかして終れりとする方向に流れ勝ちで心  
を働かせて人と共に感じる事ができていなかった。今後は  
これを心に留め、人と共感し立ちどまって深く考えることを  
目標としたい。

特に白井先生の話がうかがうことができたのは最大の幸福  
であった。何を押しつけるでもなく、自分で日本を愛する事  
を体現している姿が、子供達に最も強い感銘をあたえている



のを知り、なによりも自分がまず実践することの大切さ、貴さを学ぶことができた。

町の子供達に国旗の大切さに気付いてもらおうと

白井先生が毎朝国旗を自宅の庭に掲揚される話を聞きて

朝毎に国旗掲げらるお心を我も学びて永遠に守らむ

心を働かせることを学ぶ合宿―人生の指標を得た

(一橋大学 社会 一年 松井 哲)

心を働かせることを学ぶのだ、ということが分ってきたのは第二日目からでした。班友達と輪読を重ね、一語一語の意味をかみしめ、作者の心を汲みとる努力をし、又諸先生方の御講義の言葉を自分の心でかみくだくことを通し、私はだんだん心が動くとはどういうことか、真実を知るとは、どういうことか、日本人としてどうあるべきなのかが少しずつではあります。分ってきました。そしてそれは、同様の思いを持つ班友たちと真剣に討論を交えることでより深いものとなっていきました。又短歌の創作をすることで、言葉を正しく大切に使うことが、物事を考える上で、如何に重要かが分かり、班友に自分の意見を正された時は、与へられた情報を鵜呑みにすることが如何に危険かということも分りました。

この合宿で学んだことによって、それまで怠惰でずさんだ大学生活を送り、表面的な友人関係に常に不満を感じていた私は、人生の一つの指標を得たような気がします。

島原合宿を終へるにあたって



筑波大学教授・村松剛先生は「天皇と日本国家」と題して御講義をされた。



夏空に聳ゆる雲仙背にしとき合宿に来しよろこび心に満てり

人間的に大きくなった

(高千穂商科大学 商 三年 金子 勝)

この合宿に参加するまでではない不安がありました。グループ討論、短歌創作がある為です。こんな意見を出して馬鹿にされないかと考え込んでしまっていたのです。然し、実際そのような事は一度もありませんでした。皆真面目に意見を聞いてくれ、心優しく真剣に考えてくれるのです。

日本といふ国を愛することの大切さ、相手の心を知り、その人を信ずること、日本人だから日本歴史を勉強すること等、沢山の言葉が心に残っています。これらの事から、自分自身考え方も変り、人間的に一廻り大きくなったような気持ちさえします。

師の声に耳を傾け聞き入れれば生きる喜びふつと湧く

### 第九班―男子学生―

本当に来て良かった

(国学院大学 文 四年 亀井正弘)

初めて、班長を経験した為、班をまとめようという思いが強すぎ、最初の頃は班別討論の進行が重荷だった。しかし、皆が打ちつけて、楽しくしてくれましたので、私も気負がなくな

り班員の気持が汲みとれるようになった。

天皇を考えるためには、法律や政治統治形態の上からのみ考えるのではなく、天皇と国民の昔からの繋りを知り、天皇の御歌や先人の文章などを読んで、その心を偲ぶことが大切だということを実感した。

就職や卒論など多くの予定があり、合宿に参加することをためらったが、学生として最後の合宿が有意義なものとなり本当に来て良かった。

思ふこと語りあひたる友どちと別れゆくのはさびしかりけり

勉強不足が骨身にしみた

(福岡大学 商 二年 森 信平)

初めて参加しました。最初は不安ばかりでした。合宿が始まり、講義や班別討論を行っている、だまりこんでしまいました。とても難しいというのが本当の気持ちです。自分の勉強不足が骨身にしみてわかりました。

今から、残りの大学生活をしっかり考へて生活していかないといけないなあーと感じました。とてもいゝ経験をさせていただきました。

むづかしき講義や討論無事終へて帰らむとすも頭おもたし

早く帰りたいかった

(王川大学 文 一年 増田貴広)

はじめのうちは、講義の内容もよく分らず、討論でも意見

を言うことができなくて、早く帰りたいという一心でした。

しかし、時がたつにつれて自分に足りないことが分るようになりました。今まで、あまりにも物事に対して考えなさすぎたということに気がつきました。

参加して本当によかったと思いました。また来年も来たいと思います。

遭せしすばらしき文読みゆけば昔の人の心しのぼる

本心を語り合える友情を育てたい

(熊本大学 教 二年 北島直浩)

この合宿に参加するのは、今年で二回ですごく平凡な夏休みの中では、非常にインパクトの強い四泊五日間でした。日頃の友人たちとのつき合いとは全く違った日々でした。

この合宿での班別討論や班別輪読においては、それぞれ心の内にあることを、つつみかくさず述べ合わねばなりません。そして、その述べたことについて、お互いが、それぞれの所感を正直に述べ合い、真剣に素直になりきることが必要でした。日頃の学園での友だちつき合いは、やゝもすると、自分の本心をおおいかくしがちなのに、こゝでは、そうでないことを感じました。

これからは、私も友達も本心を出し合えるような友達つき合いをし、友情を育て、人生を豊かなものにしていきたい。

五日間はあつといふ間にすぎたれど心の動く日々になりけり

## カメラ・レポート 14



御講義が終つた後の質疑応答の時間。熱心な質問が寄せられ、講義内容がより深まつてゆく。

ちゃんとした意見がもちたい

(亜細亜大学 経 二年 茅野輝章)

この合宿に参加して、まず感じたことは、勉強をもっともつとやらなければならぬということでした。

諸先生のご講義でのお話を聞き、また班別討論や輪読の友との交す言葉や短歌創作での三十一文字に自分の考へを述べるといふ作業を通して、自らが磨かれてゆくのが解ったような気がした。

日本の天皇や文化を護ってゆく志はあるが、これに批判的な人々に、これらを説明し説得するには、それ相応の知識を身につければ役立たないことが、この合宿で思い知らされた。講師の村松先生や小田村先生、班付の上村さんなどは、本当にたくさん知っておられる上に、自分の意見をちゃんと述べておられる。自分もちゃんとした意見をもてるよう勉強せねばと思った。これが、合宿で得られた一番のことだと思う。

島原に集ひし友と夜をあかし語らふことの楽しかりけり

自分に正直になることが学問のはじまり

(防衛大学校 理工 四年 五日市弘之)

私はこの合宿に参加して、日常生活にも足りなさを感じていた自分に気づきました。これまででは、全く意識せず生活していましたが、皆と意見を交わし合う中に、私は心を動か

されました。「何か違う」ということを感じました。それは皆が真剣に物事について話し合う姿勢でした。それは、未体験のものでした。それから、私の心は本当に明るくなって、皆と何でも話している自分に驚くぐらいでした。だから、合宿中、班の中にも楽しくてしようがなかったのを覚えています。自分に正直になることが学問の始まりであるという言葉は、精神に指針を示されたと思っています。

講義では、本当に心にしみるお言葉に感動するとともに、日本の文化というものゝ素晴らしさを感じました。然し、班別討論等においては、自分の知識の無さを痛感しました。班付の方の意見を聞いていると、知識の厚さの歴然とした差を思い知らされました。やはり勉強しなくてはと、意気に燃えています。この気持が薄れない中に、読書等をし、それを通じて知識を自分の血となり肉としたいと思っています。

島原の合宿地で二十二歳の生日を迎へて  
今日よりは学びし道をふみわけつ進みてゆかむ心定めて

## 第十班—男子学生—

自らに問ふ学問をしたい

(亜細亜大学 法 四年 眞田博之)

僕は、奈良崎先輩が言われた「物差」で物事をはかる癖が仲々抜けないでゐます。それをせず、自分の力でこなしてゆ



ける様にしていきたく思ひます。又同じく先輩の御講義で、仁斎は本を読んで自分に何度も何度も問ふてみたと言はれました。自分もさういふ風に学問をやつてゆかうと思ひます。

壇上に長内先生を拜して

師の君の御顔しみれば自づから目頭熱くなりけるかも

### 自分の至らない部分に気づかされた

(九州国際大学 国際商 一年 城戸 健)

私はこの合宿を高校時代の恩師と友人に薦められて参加しましたが、一日参加が遅れたこともあって、その遅れを取り戻そうと一生懸命に講義に聞き入り、班別討論や輪読で意見を述べようと思いました。そうしている内に自分の至らない部分というものに気づかされ、自分自身の内面が変わつてゆくのが実感できました。又、班の雰囲気も最初のうちはみんなバラバラで何かまとまっていかなかったのですが、日が経つにつれ、討論で意見を出したり、夜寝る前に雑談にふけつたり、一緒に短歌を創作批評し合つたりして、何かに、何か一つの絆で結ばれていると感じ、最後にはみんな打ち解けてきて友情が生まれました。

全体感想自由発表の折に

感激に胸ふさがりしか声出す涙流せる乙女あるかな

壇上で感きはまりて涙する乙女に我ももらひ泣きする

### カメラ・レポート15



休憩時間に小田村理事長と語り合はれる村松先生。

## 新鮮な気持となって合宿を終えた

(早稲田大学 社会科学 四年 村主真人)

三回目の合宿参加となりましたが、学年や参加回数を中心の内から拭い去り、新鮮な気持となって合宿を終える事が出来た様に思われます。この合宿で感じ取った事は、何よりも耳を澄まして聞く、目を凝らして見るということだと思います。対象は常に自分に対して語りかけている。その声が聞こえるか、姿が見えるかは偏に自分の心の状態で決まる。合宿の初めには心に響かなかった「貧しい経験は人生を貧しくし、豊かな経験は人生を豊かにする」と言う言葉が、徐々に分かりかかってきました。鳥原の地を去るにあたり、「身の死するを恨まず心の死するを恨む」という大塩平八郎の言葉を胸に刻みつけて学舎に戻りたいと思います。目に見えない友とのつながり目に見えない国の命と天皇様とのつながりをひしひしと感じた四泊五日でした。

御製碑を前にして

黙々と鎌うちふるふ友どちのひたひに汗のじみきたれり  
繁りたる小枝はらへばやうやくにいしぶみの文字あらはれにけり  
小道をゆきて

緑こき木立ちぬけたる尾根道にそよ吹く風の頬にすがしき

全体感想自由発表を聞きて

ただどしき言葉なれども壇上にたちたる友の大きく見ゆるも  
壇上で言葉つまりし友どちに心の内で頑張れと叫びぬ  
壇上ゆかへりきませる友どちのはればれ笑みのこぼるが見ゆ

老ひたるも若き学徒もへだてなくいやつきつぎに壇上に立つ

## 心で知ることの大切さを知った

(鹿児島学大 農 三年 榎元勝治)

合宿の御講義は日頃聞き慣れず又殆んど考えたことのない内容ばかりで中々理解することはできませんでした。その中で残っていることは「心で知る」ということです。この心の大切さをつくづく教えてくれたのは先生方ではなく班友でした。僕達の班は初めのうちは殆んどまとまりも無く、輪読や討論でも意見が生まれませんでした。そんな中、班長さんは班をまとめようと必死になって何度も各班友に語りかけてくれました。僕達もそれに答えようと必死に努力しました。僕は、友人、親、兄に心で向かっていったら、そのうちから国を思う人や天皇陛下をお偲びする方の気持が分ってゆけると思います。この合宿に参加して班友に感謝しています。ありがとう。

み友らに語りし言葉少なくて別れのいまに悲しみつもの

## 最後の最後までうまく言えなかつた

(九州産業大学 芸術 一年 北米 晃)

私がこの合宿教室に参加した理由は、私の通う九州産業大学の教授と先輩方より紹介され、強く誘われたからです。最初は余りやる気もなく、ただ時間が過ぎるのを待つばかりといった状態でしたが、講師の先生方及び班の先輩方の話を聞



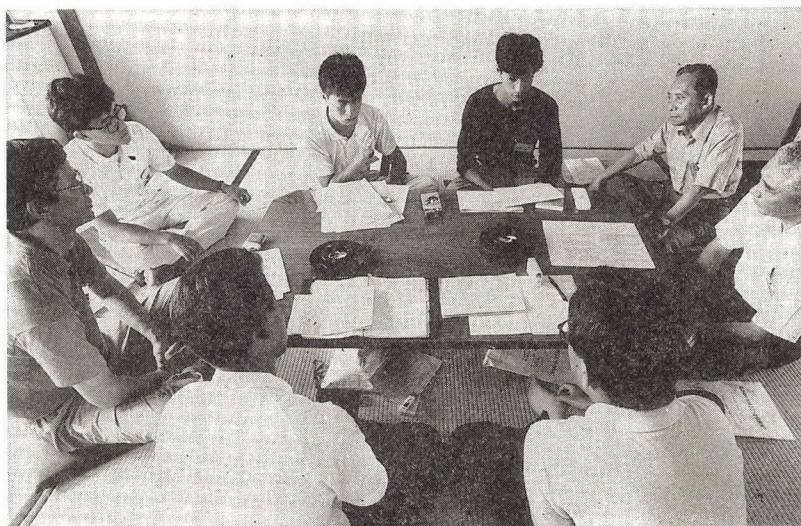
くに連れて心を動かされ、私もここで頑張ってみようと思いました。しかし、今までこのような事は全くしたことがなかったもので、言いたい事は言えず、書きたい事も書けないといった状態でした。結局最後の最後までうまく言えなかったし書けなかったので心残りでたまりません。今までの自分の生活が弛んでいたのが、この合宿で身に滲みる様に分かりました。先生方、先輩方本当に有難うございました。これから心を入れかえて頑張りたいと思います。

合宿申言ひたきことも言へぬままですごしけるこそ心のこれり

### 参加してみても本当に良かった

(拓殖大学 外国語 三年 鎌田淳一)

私は大学の先生で紹介で初めてこの合宿の事を知りました。正直なところ余り気が進まなかったのですが、参加してみても本当に良かったと思います。諸先生方の一つ一つの熱心な講義に胸をうたれる事が屢々ありました。そして部屋に戻っての班別討論では、自分の意見がうまく言葉で表わさないまでも、一所懸命に考えてくれる先輩方と班友達があり、申し訳無い気にすらなりました。今まで、大学での勉強なども与えられたものだけをこなしていくだけで、この合宿で学んだ天皇や国家のことについても関心がなく、一人暮らしをしているせいか日常生活全てが惰性になっていた様な気がしません。これからは自分の意志をしっかり貫いて一人の日本人として、又男として自分を磨いてゆきたいと思っております。



カメラ・レポート16

回を重ねるごとに、熱のこもった班別討論となってゆく。



ばる島原まで来て、得たものは大きく、本当に自分にとって  
為になりました。

島原より

君思へば己が胸ぬち高鳴りて心はやりてやみがたしかも

## 第十一班—男子学生—

腹を割って話せたらうれしさ

(亜細亜大学 経営 三年 岡山英一)

初めて班長をやらせてもらひましたが、役割を上手く果たせなかつたと思ひました。僕がみんなの知らない事を知つてゐるといふ思ひ込みがあつた為に、討論の内容を勝手に方向づけ、無理矢理その方向へ班員を向けさせたやうに思ふのです。

今思へば、僕はずる分と班付の方、班友をはじめとして沢山の方々に心配を掛けさせてしまつた。自分の事を思つて心配していただき、有難く思ひます。

多くの方々と腹を割って話せた事がとてもうれしかったです。

長内先生の昨年の御講義の冒頭を輪読した後

班室の窓の外吹きける強き風裏庭の木々を激しくゆらす

木々見つつ耳をすませばざわざわと枝葉に触れし風の聲聞こゆ

言葉をおろそかにしていたことへの反省

(金沢工業大学 工 四年 吉田隆之)

今回、初めて、この合宿に参加して、自分が今までに考えるということ、言葉の持つ意味を深くさぐるということ、いかにして、他の人に、自分の気持や意見を伝え、相手の気持ち、言葉を聞くということをおろそかにしていたなど、あらためて感じた。

合宿全体をふり返ると初めて聞く話、初めて詠む歌など、初めてのことがあまりにも多く、戸惑い、また感動もした。自分が日本人として当然知っておくべきことに、耳をふせ、目をそらしていたことがとてもよくやしく、講義を聞いていく内に、自分の意見、考えというものが表面的なものでしかなかつたことに気づかされた。これは動かしがたい経験であつた。

金沢の友へ

金沢にもどつて友に会ひにゆきみやげ話に語りあはむ

合宿は鏡のやうなもの

(熊本大学 法 三年 平田裕英)

神社には鏡をお祀りしてあるといふ御話をお聴きした時に心に感じるものがありました。合宿に来て、友と再会し、先生とお会ひし班員の皆と共に生活してゆく中で、それらの人々が僕に向かって心を働かせて下さつてゐると感じました。

班長の岡山君が文章を読んで泣いた時、岡山君のやうに文章に迫ってゆけない自分を感じました。長内先生が道端のゴミを拾はれてゐる時、ゴミが落ちてゐる事にさへ気づかなかつた自分に気づきました。この合宿の目指す所は何か、何を学ばねばならぬのかと考へ迷つてをりましたが、さうではないと感じました。僕にとつては鏡のやうなものだったのです。

合宿もけふで五日のはやすぎて全日程の終らむとする

四日前に初めて会ひし友どちと別るる時の近づきにける

共に学び共に飯食ひ風呂入り過こせし日々は楽しかりけり

帰りせば文交さむと友どちの語りし言葉に応へゆきたし

理解できたふりをしない

(早稲田大学 社会科学 一年 村瀬廣司)

私は今回の合宿を通して、久しぶりに体験できたことがあった。それは理解できたふりをしなくてもよかつたことだった。私は今まで自分の思つたことを話していたのではなく、自分が思つたつもりになつたことを話したつもりであつたのだつた。そこでこれ以降は、決して理解できたふりをしないように心がけていった。班員の方々の発言に対しても、そこがわかりませんと正直に言うことができた。

この数年来このような姿勢を私は持つことができたか、否無知であることを他人に知られることを恐れて、わからぬことをわからぬと言えなかつた。

幼少の頃に親にたいして無邪気に質問をした、そのような

カメラ・レポート17



短歌創作の前の「短歌創作導入講義」に於て、短歌創作の意義、作り方の基本などを具体例を挙げながら判りやすく話される福岡県立山田高校教諭・與島誠氏。

体験をこの合宿で持つことができました。

かざりなき言葉のままに語り得し友らとあへたることぞうれしき

## 昨年の感動を再び味はった

(鹿児島大学 農 三年 原 一文)

昨年この合宿にはじめて参加しまして、とても感動させられ、その感動をもう一度、味はひたく今年も参加致しました。

私の班はみな心を働かせてこの合宿教室に参加してゐましたので、昨年の感動を再び感じることができました。また、全員とても元気で明るい人たちはばかりでしたので、すぐにとけ込むことができましたことを班員の方々に感謝してをります。これからも、この合宿教室にて学びましたことを生かして頑張っていこうと思ひます。

全体感想自由発表の折に

言の葉をつまらせ語る吾が友の姿しみれば感きはまりぬ

次々に吾が友どちの壇上にすすみて語ることぞうれしき

## 知識として知ることとは何も知らないことだ

(秋田大学 鉱山 一年 坂下詠治)

今回の合宿は、その中のどれを取っても大変有意義でありました。特にその中で一番心に響いた事は合宿二日目の班別討論で、いろいろ発言する私に対して、班長の岡山さんが「どうしてそんな涼しい顔をしてしゃべれるんだ」とおっし

やられたのです。この時、私はカーツとなり、心臓は激しく波打ちました。ものすごく恥ずかしかった訳であります。

物事を知識として知っていた私は結局何も知らなかったのです。班長さんは私にそのことを気付かせてくれたのです。感謝のしようありません。だから私は感謝に代えて、あの時感じた恥ずかしさを一生忘れないようにしていきたい。今はただそう思っております。

御講義を聞きて

御講義を聞きぬるのちにわきおこる拍手の音は高く響けり

## 第二十一班—女子学生—

### 独立不羈の精神

(鹿児島大学 教育 三年 江口芳子)

小田村先生の御講義を受けて、日本人として独立不羈の精神を持たなければならぬと強く思いました。今の日本人にはこの精神が欠けているんじゃないかと常日頃思っています。この精神は各人の国を想う、日本人としての自覚の上になり立つと信じ、努力しようと思ひます。

昭和天皇の最後の御製を一同に拝誦して

一同に拝誦しまつればいつのまに涙あふれて声のつまりぬ

大御歌拝誦しつゝ思ひ出す祈りをこめし二回の記帳を



## 普段経験し難い機会

(成城短大 教養 一年 坂東恵子)

数々のすばらしい御講義の中でも脳裏に強く焼きつきましたのは、山田輝彦先生の御講義での天皇陛下の御誄です。私はこの御誄を聞き、また自分で声に出して、改めて感激し目頭が熱くなりました。陛下の御心に接するという普段経験し難い機会となりましたし、そういう意味で、夜久正雄先生のおっしゃられた「耳をそばだてて天皇様の御歌御声を聴くように努める」という言葉も大変印象深く心に残っております

朗々と詠みあげらるる言の葉に強く感づるしきしまの道

夜久先生の御講義を聞きて  
天皇の御言葉御歌聞きゆかむ心無にして耳そばだてて

## 経験しなければ苦しみはわからない

(東北女子大 家政 二年 古川朝香)

講義の中で一番印象に残っているのは長内俊平先生のお話でした。先生の出身も私と同じ青森ということで何か感じるものがありました。

大変御苦労なされて勉学にはげみ、又何度も危険な目に会いたながらも立派に生きてこられたということを聞いて、涙が自然に出てきました。そして一番深く心に刻まれたことは、人は経験をしなければ本当にその苦しみはわからないということです。苦勞すること、そのもののありがたみや価値感



楽しいリクレーシヨンのひととき。足どりも軽やかに妙見岳を目指す。

がわかるということを知りました。私の家でも農業ということとで、やはり両親はすごい苦勞をしていると今あらためて思いました。

我が友の涙ながらの熱弁にしみ／＼胸を打たれたりけり  
み友らと日に／＼語りひ深まりて思ひ残して別るる朝かな

言葉に思いをよせ感じ学んでいきたい

(中村学園大 家政 二年 木下優子)

今この四泊五日を終えての実感、とにかく心の中があつくなる思いでみたされています。とても短く感じた四泊五日にやりとげたんだという充実感があふれています。

私は日本をいのちをかけて守ってきた先人たちのことばにとても心が動かされ、これからそういうことばに思いをよせ感じ学んでいきたいと思いました。とくに樋口一葉さんの歌が心にしみついています。

私は班員の方たちと接して、まだまだ自己中心的な自分を知りました。しかし友だちの思いを聞、思いをよせていくことができてとつともうれしいです。本当に身近な小さなことから思いをよせていくということが国を思う心につながっていくような気がします。

いつまでも明るい笑顔のみ友らに学びつづけてゆきませと願ふ

感動することを初めて体験した

(九州女子大 文 二年 田所三佳)

この合宿教室を通して感動するという事を初めて体験した、そんな思いがしています。大学生活をふり返っても、あたえられるものだけに満足してしまい、そしてそれに不満をもち、自分から何かを求めていく精神をも忘れていた気がします。私は大学に入学する前、四年間のうちで自分を得るということを一つの目標にしていました。しかし大学に入学して一年半、自分は何をしていったんだろうと思うくらい空白の部分が大きいのです。聞く、話す、学ぶというものを忘れていた気がするのです。それをこの合宿でやっと目が覚めた感じをうけ、そして自分を得る第一歩を私なりに歩み始めた気もするのです。

感動の体験多き島原で見えぬ心の蘇るかな

今一つ何かを求め来たれども感動多きことばかりなり

真実を知ること

(尚綱短大 文 二年 浅田千春)

諸先生方の講演は大変素晴らしく、改めて私が味わっていない戦前の御苦勞をなさっているだけに、その胸の内を思うと私達に訴えたいことがひしひしと伝わってくる思いを致しました。戦前の言い様のない苦勞を味わってこられ、今日物質的に恵まれた私達に対して、教えていきたい、真実を見る眼とは何かを語り続けていきたい、そんな諸先生方のお心を感しました。ともすれば一つの風潮がはびこるとそれに感化され、それが正しいと見る傾向もありますが、真実を知る



ということがいかに大事か身につまされて考え直されました。

一期一会を心に念じて微笑みて友に祈れり幸多かれと  
不思議なる縁えんによりて合宿に学びあへるがありがたかりけり

心が清められていく

(尚綱短大 教務課 椎葉みどり 21歳)

この合宿が終わろうとしている今思うことは、班別輪読、討論をする中で一人で考えている気付かないような事が、班の人々の意見によって発見されていき、たゞ講義を聞いただけだと後で自分に残る物が少ないけれど、その講義についてみんなで討論していくうちに、その時間ぎ逃していた大切な事や先生が本当に言われたかった事など知ることが大きな収穫でした。それと短歌など今まで一度も詠んだことなどなかったのですが、いろいろ悩みながら考えているうちに、心が清められていく感じでした。みなさんの短歌をそれぞれ見て、知らない人なんだけれどもその人柄が見えて来るようになかなかおもしろいものだと感じました。

有明の海を前にし我が心詠みきれずして焦りはつものる



山頂での記念写真。ハイ、チーズ。



## 第二十二班—女子学生—

言葉の難しさ貴さを知った

(九州女子大学 文 二年 椎山美恵)

初めて和歌創作に取り組み、和歌のすばらしさ、美しさを理解することができ、「言葉」の難しさも貴さを知ることができたように思います。自分の思いをうまく言葉に表せない苦しさを味わえたおかげで、講義をしていただいた先生方や班友の一言一言にも敏感になれ、「言葉」を学びながら、聞くということも関連して学べたのではないかと思えます。又合宿の間は、童心にかえったようで、感受性豊かな澄んだ心を持ってたように思います。

五日間という短い日数でしたが、今までと違った視点から物事を見れるようになった気がしますし、色々な事を語りあえるすばらしい友もでき自分をみつめなおすいい機会でした。十代最後にすばらしい五日間を過ごせたことを嬉しく思います。

班友と心ひらきて語りふはただに楽しく時も忘るる。

素直に感動することができた

(東京女子大学 文理 二年 柗島聡子)

涙を流して感動を訴える友達姿を見て、私も目頭が熱く

なりました。反面、再び大学に戻った時、今の気持を失くしてしまうのではないだろうかという不安がよぎりました。

これまでの友達つき合いの中で、こんなに表面的な会話しのできなかったのか。真剣に語り合うのはムリなのだろうかと何度か考えましたが、なんとなく周囲に流されてきました。この合宿で私は素直に感動することができました。真剣に取り組んでいる多くの友人を見たことは、私に勇気を与えてくれました。私の父母に対する態度を顧みて、自分のワガママに身をつまされた思いました。私も真の友人を自分から積極的に探し、勉学に励み、自分の大学を誇れる様になりたいと思いました。また来年も来たいです。来年は違った自分であろうと思えます。

全体感想自由発表を聴きて

友どちの熱き思ひに感動し今の気持ち大切にせむ

合宿で学びしことを胸にして一日一日を励みてゆかむ

まごころをみつめる

(中村学園大学 家政 四年 下田和子)

はじめての班長で、とても緊張しました。何もかも見すかされるというか、自分の心が鏡のようにあちこちにうつしだされるので、その度に反省させられます。特に和歌の班別相互批評は非常に大きな経験でした。自分のまごころが、自分でみつめられてなかったことに気づかされたのです。そして又班友一人一人の気もちをどれだけみつめて感じることで

きたらどうかと思います。はじめて御製を拝誦して感動したと言った友の本当に素直な心が、そして日本人の中に脈うっている天皇陛下をお慕いする美しい心が、自分の中にも友の中にも共通してあることのうれしさを、とても感じました。私はまだ勉強も足りないけれども、知識と同じく心をもっと美しく日本人として恥じない心でありたいと切に思います。

白井傳先生にお会いできて

先生のふるさと対馬にふたとせもまへにうかがひしことを思ひ出す

久しくも島原の地で先生のやさしきお顔を拝すうれしき

みんなで考える喜びを知った

(尚絅短期大学 教務課 竹下智子 20歳)

この合宿は友人から聞いて、別に何も思わなかったのですが、偶然参加することになり、不安だらけだった。正直言って、全く関心のないものの中に入りこむ心配と自分に参加する資格がないような気がしたからです。しかし、参加してみようと思ったことは、意見の大切さ、人の話をきいてそれをみんなで討論しあって考えることの喜びがわかったような気がします。私も学生として参加したかった(学生のうちに)。長いようで短かった五日間でしたが、帰れるうれしさと友達と離れなければならないと思うと複雑な気持ちですが、何かの縁で出逢ったのですから仲良くしていこうね。学校では学べなかったものを学びました。日本人として生きていく上でこ

カメラ・レポート 20



心の交ひ始めた友達とひと休みしながら談笑する。

ういう話を聞いた機会のあったことをうれしく思います。  
友となり語りあかした五日間早くも過ぎて口惜しきかな

### 心が清められた

(東北女子大学 家政 二年 浦田博子)

合宿に参加し、自分の心が清められ、とても素直な部分をつかむことができたと思います。日頃の生活の中でどこか心の奥でモヤモヤしていたもの、心から話すことができないもどかしさが友達と語らい、先生方の講義を受けるうちに、どこかに消えさせることができたと思います。始めは不安、自分の無知と考えの浅さを痛感し、「こんなこと言ったら教養、常識がない」と思われると思ひ難かしいこと言おうとしていましたが、素直に感じたことを話せばいいのだ。それが大切ではないかと思ひ始めるようになりました。

また防人の歌を読んで親の愛についてひどく心を打たれました。普段なにげなく接する中で自分がいかに親の愛を受けて育ってきたのか、それなのにと恥かしく思いました。

防人の歌詠む親の愛を思ひ己の姿をひどく恥ぢけり  
すめるぎの御製を拜し日本の安らかさ今新たにわかる

### いつわりのない心で人に接しよう

(大東文化大学 外国語 二年 橋本珠実)

昨日、短歌班別批評が終り、夜のつどいになってからやっと自分の中にずっとあった緊張がほどけてゆくような感じが

しました。自分の感情をそのまま口に出すことが私にとってこんなにも難しいことだとは思っていませんでした。班討の時などほとんど喋れず皆が思った事を言っているのを聞いて何度も涙が出そうになりました。理屈に勝るものなし、理論が大切と自分に思いこませてそれにすがって生きてきた自分が情けなくなり何も言えませんでした。人をおさえつけるような理論的な言葉は多く知っていても普通の言葉を知らなかったからです。自分の心に従い人とふれあうことの素晴らしさを知るよい経験になりました。これからはいつわりのない自分の心で人に接してゆこうと繰返し繰返し思いました。

真青に澄みわたりける大空は今の私の心にも似て

### 第二十三班—女子学生—

#### 人の心の中のまごころを信じる

(長崎大学 教 二年 早田保実)

私は班長という大役をいただき、その中でずい分と磨かれ、新しい発見をさせて頂くことができました。

いつも祈るような思いで、班員の言葉にじっと耳を傾けていると、班員一人一人の心の叫びが少しずつ伝わってくるようでした。「わからない」と苦しげに語る友の言葉に「それでもわかりたいんだ」という思いが聴こえるようで、私も又何とか返す言葉をみつけていくうちに、「人と人とのつきあ



い」について考えずにはおれなくなつたのです。私は班員とのふれあいの中で、『人の心の中のまごころを信じる』ということを学ばせていただいたような思いがします。自分を滅し、心を働かせて、出会う人、一人一人の心の中のまごころを信じて語り合うとき、そこには経験や立場や考え方を越えた直に心の通い合う世界が、広がってゆくような気がします。こんなに人を思える自分にならせていただいたことを、心から感謝致します。有難うございました。

ひたぶるに心通はせしみ友らと今日別るるはただに淋しき

周りの友に真心で接したい

(尚綱大学 庶務課 松村ひろ美 23歳)

初めこの合宿に参加するのは少々気が引けた。何もわからず班員のみんなについて行けるか不安であった。

講義に於いて、自分に素直に取り入れようと試みたが、現代の環境の中で育った自分の心は、それを許さないものがあった。しかしその中で一つだけ学び得たものは、日本国家の中の天皇の御存在である。天皇は我々祖先の親であり、その血を受け継いだ我々が、今こうして生き活動している。しかし汚染された現実の中で天皇と自分とを結び付けるのは、どうしても納得いかなかった。その心を教えてくれたのがこの合宿である。天皇が国民を思われる心は我々を思う両親の心と同じものである。合宿を終えて故郷に帰れば、両親が私達を待っている。私は孝行の念を忘れず、これからの人生を歩

カメラ・レポート 21



戦時・平時を問はず、祖国日本に尊い御命を捧げられた方々の御魂をお慰めする慰霊祭が、夜のじしまの中しめやかにとり行はれた。

みたい。そして周りの友に真心で接したい気持ちでいっぱいである。

班友と最後に語る折に

一刻と別れる時が近づけどまさに心は一つになりたり

日本という国の素晴らしさに感動した

(立政大学 文 三年 高橋寿枝)

日本という国はなんて素晴らしいことだろうというのが、この合宿での一番感動したことです。聖徳太子の時代から日本独自の文化、精神というものがたくさんあることや、天皇制を始めとする日本唯一のものも数多く守られ続けていることに驚きました。日本に対して愛着を持ち、日本人としての自己意識をはっきり持てる人になりたいのです。

幾人もの先生方の御講義を聞き、このままではいけないという危機感がつのってくる中で、その難かしい壁を乗り越えてみようという力が出てきています。

とにかくもつと勉強しなくてははいけません。知識としての学問ではなく、体験としての勉強を。

班長早田保美さんへ

疲れたる己が体を気で覆ひ尽くす心よただありがたき

我が身を忘れ他人を思う心に感動した

(東北女子大学 家政 二年 塚原さき)

毎日のように天皇についての御講義を聴き、頭がパニック

になりそうでした。しかしこの状態を救ってくれたのが、青年体験発表の森田先生のお話でした。癌で死を目前にしている人でさえ、他人のことを思うのを忘れないのに、自分は何不自由なく健康でいられるのに、という恥しさから涙が流れました。私が涙を流した講義は沢山ありました。山田輝彦先生の伊藤たかさんのお話、天皇陛下の御誅、長内俊平先生のお話など幾度となく涙を流しました。これらのほとんどが我が身かわいさの心を持たず、他人をどこまでも思いやるというところに感動したからでした。しかし、今でもなぜ涙が出たかわからないのが白井伝先生を拜見した瞬間に流した涙でした。一生のうちでこのような方にお会いできるのはそうあるものではないと思います。白井先生を拜見できただけでもはるばる青森から来たかいがあってと思っています。

南国に来てよかつたと思ふのは多くの人と出会へしことなり

言葉にはなくとも真心からあふれるものを感じた

(鹿児島大学 教 三年 指宿みき)

島原での合宿教室を終えるにあたり、反省するばかりです全体感想自由発表を聞いて、私が不本意な態度で講義を受け班別討論では素直な気持ちで自分の思うところを述べられなかったことなど、本当に残念でくやしい気持ち一杯です。

合宿講義の中で新しい知識をたくさん学んだと思います。

共感できることも本当に多くありましたが、私の内側からこみあげてくる涙をおさえられず、何か真実を感じることがで



きたのは、長内俊平先生の御講義と全体感想自由発表でした。長内先生の語られる温かく美しい言葉は、私を真実の世界へ解き放してくださいました。また全体感想自由発表の人の中には十分に思うところを述べられなかったと悔やむ方もいるかと思いますが、言葉には表われなくとも、まごころからあふれるものを感じさせてもらいました。合宿参加の諸先生方をはじめ、多くの友の方々に深く感謝致します。

全体感想発表を聞きて

我が思ひ言葉にせんと立つ友の志のぶることは重し

ただただ驚きの連続だった

(九州女子大学 文 二年 深松恵子)

この四泊五日の合宿は、ただただ驚きの連続でした。私は今まで、天皇、国、社会について、深く真剣に考えたことなどありませんでした。また友人の中にもこれらの事を話題にする人などいませんでした。それが普通だと思っていました。しかしこの合宿に参加し、自分と同じ世代の人が、これらの事について意見する姿を見て、今までの自分の世界の狭さを強く感じました。今回の参加によって、天皇とは何か、日本国民としてどうあるべきか、人間としてどうあるべきか、心と心のふれあい、いかに大切かなど様々な事を学び得ました。この数日間の経験は、私にとって一生忘れることの出来ないものになると思います。

本当にこの合宿に参加できたことを深く感謝しております



カメラ・レポート 22

班別輪読では、著者の思ひを深く味はふために、一字一句もおろそかにせず皆で読み進んでゆく。



す。

今ぞ知る真まことの心の清らかさ苦しき日々にも得るもの多し

感動できない自分が寂しく思えた

(神戸商科大学 商経 四年 諏訪田 妙)

指導して下さいました先生や、班長、班員の皆さんに申し訳ない思いで一杯です。私は最後まで感動できませんでした。

壇上に立ってお話された先生方の御講義の内容は、それぞれもつともな話だと思えます。しかし「なるほど」で終わってしまうのです。それ以上深く掘り下げてみようともしないのです。客観的にしか聞くことができないのです。

こゝに来るまで、私は自分でも情け深い人間だと思っていました。他人を思いやる心を持っていると思っていました。が実は非情な冷血漢であることに気付きました。体がくたくたになって倒れてしまいそうなのに、それでも悩んでいる班員の心を何とか慰めようとする友がいました。苦しんでいるのにずっと笑顔を絶やさない友もいました。そんな友達にさえ感心はするけれど感動できない自分が情けなく寂しく思いました。

すばらしき友や先生に出会つても私の心はつひに開かず

## 第二十四班——女子学生——

班友に支えられた五日間

(西南学院大学 文 四年 戸田淑子)

班長の役はたいへん難しいことでした。班別討論の度にあれでよかったのかと考へては迷いました。しかし短歌創作の時、皆さんがほとんど班友との出会いを書いてくれました。その時、胸のつかえがとれた思いがしました。今感想文を書きながら班友の笑いを聞いておりますが、私が皆さんのお役にたったのでは決してなく、班友の皆さんに支えられながら五日間を過ごせたのだと思えます。

もう一つは、「心を働かせる」「感ずる時に感ずる」ことの難しさです。去年にくらべて確かに知識はふえています。しかし、「理解できる」「わかった」「知っている」と思った瞬間に、心を働かせることをやめている自分に気付きました。この点を改めてゆきたいと思えます。

班友に

五日間の交はりなりし友らなれど離れ難しと思はるるかな

今、感じていることを大切にしたい

(尚絅短期大学附属幼稚園教諭 赤尾ひとみ)

四月に幼稚園教諭としてスタートしてから、毎日毎日がむ

しやらに保育のことだけを考えて本らしい本も読まなかった私でも大丈夫だろうか、不安のまま合宿に参加しました。

同じ年ごろの人たちはどんなことを考えているのかと、まず話すことより他の人の話を聞こうと思いました。一日、二日とたつうちに親しみが増して、冗談も交えながら話し合えるようになりました。大学の講義だけでは何かもの足りずにいた自分のそのままを語り合えた気がします。

先生方の御講義には涙せずにおれないことがしばしばでした。そして自分の未熟さを痛感させられ、もっとしっかりしなくてはと思うことばかりでしたが、少しは自信もできたように思います。今感じていること、思っていることを大切にしていきたいと思えます。

白井先生の横笛を聞きて

心から語りあひたる友どちと聞く笛の音の心にしみぬ

素直に思いを言い合う中から

(帝京大学 文 四年 小坂りか)

今、ふりかえってみて自分は肩に力が入って気負っています。だから与えて下さった半分も受けとれていなかったと思います。しかし昨日、自分は素直にあるがままをあるがままに受けとっていなかったと感じました。人の言葉にじっと耳を傾けた時、その人の心が、思いが伝わってきて、気が負いがとれ心静かになってゆくのを感じました。するとまわりは変りはしないのに違ったように感じられました。本当の語り

カメラ・レポート 23



「創作短歌全体批評」をされる九州大学医学部循環器内科講師・小柳左門氏。  
作者の気持ちにそって、正確な言葉で一首一首心をこめて添削された。

いをとあせていたのかもしれない。けれども本当の語ら  
いは、素直に思いを言い合う中に生まれるんですね。

長内先生が、現実の生活に立ち向かってゆくところから、  
自分を見つめる中からはじめようと言われました。私も、少  
しでもできるような努力してゆきたいと思います。

全体感想自由発表

短かくもともに語りひし友どちの顔かがやかして壇上に立つ

### 国を愛し、人を愛し、信念をもつて

(鹿児島大学 教 三年 吉永美紀子)

私は今まで学校で習ってきたことと、国文研を中心に学ば  
れている内容とのギャップにずい分悩みました。その心を開  
いてくださったのが昭和天皇の御製でした。正しいとか、間  
違っているとか、そういうレベルではなく、心の奥底から感  
じられるものに気付いたのです。「祖国日本」と言いたくて  
言えない程、天皇のことも、日本の伝統文化についても感じ  
る心を置き忘れていた、そのことに気付いたのです。

国を支える原動力は国民一人一人の力(心)に他なりま  
せん。「私がやらなくても」という逃げは日本人の誇りを捨  
てることです。今があるのは先人の命のおかげだということを  
肝に銘じて、真の学問をし、真の心を感じ、伝えていこうと  
いう勇気の湧き立つ合宿でした。国を愛し、人を愛し、心よ  
り湧き出する「信念」を信じて生きてゆこうと思います。

ふるえつつ我が胸のうち語りむと登る壇上あまりに高さ

離れ難き友にめぐりあひし喜びは別れゆくとも消ゆと思へや

### 心を働かせ、聞き、感じ、考えていこう

(東北女子大学 家政 二年 小向恵美子)

私は、この合宿のことは何もわからず、不安な気持ちと旅  
行気分が入り混じった複雑な心境だったのですが、日程を終  
えた今、参加して良かったというのが正直な気持ちです。

まず思ったことは、自分がいかに未熟だったかということ  
です。最近は大学の講義に出席していても、ただ出席してい  
るだけで自分は何を学んだのだろうかと思うことがしばしばで  
した。その疑問を、島原の地で日本全国から集まった人達と  
講義に耳を傾け、真剣に考え、語り合う中で解決の糸口を見  
い出せたような気がします。

わからないこと、惑うことが多く、与えられた問題にまだ  
答えは出ていませんが、心を働かせ、聞き、感じ、考えるこ  
とによって解決できるような努力していこうと思います。

合宿を終へたる今は昨日までのわれとはちがふ気持ちするなり

### また、この合宿に参加したい

(九州女子大学 文 二年 坂元麻子)

私は日頃の大学生活に不満とこれでもいいのかという不安を  
いだいていました。この合宿のスケジュールを見ると、講義  
はビッシリで、短歌創作の時間もあり、やってゆけるだろう  
かとすごく不安でした。でも何か求めたくて、がんばろうと



自分に言いかけながらこの島原にやってきました。しかし一日過ぎ、三日たち班友との語らいが増してゆくうちに不安がうすらいでいきました。講義はすばらしく、感銘を受けるとともに自分の勉強の足りないことを反省しました。まだ、「これだ」というしつかりしたものは生まれなかったけれども、晴れやかな気持ちを持てるようになりました。

来年は少し勉強して、また、この合宿に参加したいと思えます。友達にも声をかけて一人でも参加者が増えるよう努力しようと思えます。

全体感想自由発表にて

手をあげてまことのこころ口ぐちにみ友らは語る涙うかべて

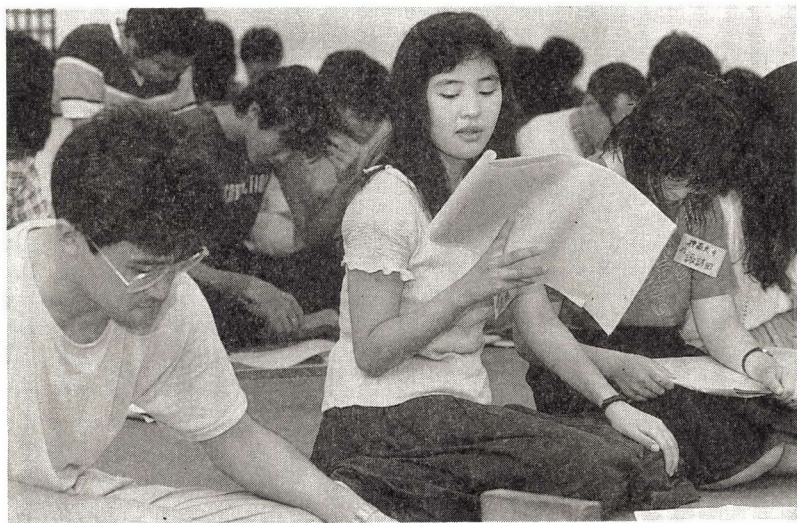
合宿最後の消灯を過ぎて

灯を消して枕ならべて語りあふ班の友らのはなしはつきず

真剣になるって、すばらしいことだ

(帝塚山短期大学 文 一年 葉丸恵美子)

この合宿で友達はできるだろうか。一人ぼっちになったらなどという不安は一日で消え去ったのです。それはここで出会った友達のお蔭でした。初対面の人とは思えないくらい語りかけてくれて、それも班友だけではないんです。正直いって驚きました。この、人の温りを感じる機会の少い冷めた時代に、真剣になることを馬鹿にされるようなさみしい時代にこんな人達がいてくれたなんて。私もいつしか心を開き、いろんな人の言葉に耳を傾け、自分の意見も述べました。



参加者全員の創作短歌が刷られた歌稿を見ながら小柳氏の批評に耳を傾ける。

人間には自分の志を確める時が必要だと思えます。今の若者で物事を茶化さず、自分に正直に生きられる人がどれだけいるでしょうか。「マジ？」なんて言っておどける人が殆んどではないでしょうか。でも私は恥ずかしくありません。真剣になるってすばらしいことだと思えるようになったのです。冷めたフリした人間にはなりたくありません。未熟ながらもそう感じる事ができました。十八歳の夏、この合宿で。

言ひたくも言葉にならずはらはらと涙あふれてとどまらぬかな

## 第二十五班—女子学生—

人の気持がわかるということ

(京都橘女子大学 文 四年 橋本加枝)

この合宿をうけるにあたって、とにかく相手の気持ちを、どれだけ素直な心でうけとめていくかということを思いやってきました。班長という大役を、四泊五日間させていたとき自分の心の未熟さ、言葉の拙さを本当に感じさせられました。班員と接することによって、歴史に対する接し方を学んだ気が致します。人の気持がわかるという事の難しさ、難しいが故に、わかり合えたときの喜び、聖徳太子の「共に是れ凡夫のみ」という言葉が有難く感じられました。これからは、人のため、国のため涙することが出来る人になりたいと思いません。

白井先生の笛をききて

めをつむり大人のふかれし笛の音のやさしきしらべに胸せまりく  
ふえの音は大人のみ心さながらに美ししらべに耳をすましぬ

素直な心になった

(実践女子大学 文 一年 大越淳子)

合宿に参加してとてもよかったと思いました。先生のお話を聞き、班友と語り合いだんだん自分が素直になってゆくのが分りました。自分の心を見つめ直す機会を持たれたこと、自分の意見を真剣に聞いてくれた友達のこと、友の意見を聞く事が出来たことは忘れ難い思い出になりました。全国各地から集った人と、それぞれの地方の言葉で意見を交わしお互の心が通じた時のうれしかったことの気持ちを大事にしてゆきたいと思えました。これからの日々は素直な心で人と接し、また日本人の誇りを持って生きてゆきたいと思えます。

語り合ひ心通ひし班友の生きゆく先の幸あれと思ふ

心に残る合宿

(尚綱短期大学 家政 二年 田部悦子)

私はこの合宿に初めて参加致しました。ここで感じたことは素直な気持になる事、人とのふれ合いの大切さが、どんなにか、どんなにか貴重なものかということを学び合宿参加の甲斐があったと思いました。いままでは、自分の考へを話す機会が少なく、自分の考へを他人に伝へる事の難しさを感じ



ました。でもその反面自分の気持の通じた時の喜びの深いことを学びました。この合宿ですてきな友に出合ひ、すばらしい先生に出会へたことをうれしく思い、学んだことを心の支へとしていきたいと思ひます。とても心に残る合宿でした機会があれば又参加させて頂きたいと思ひています。  
身にしみる御講義のことば思ひ返し語りゆくなり友らとともに

### 大学では感じられないこと

(東北女子大学 家政 二年 高橋幸子)

合宿で心に響く事が色々あった。先生方の講義班友らとの輪読・討論そして自分に問うてみる。人の話しがそのまゝ心に入つて来る、それを素直に受取ることが出来、うれしく感じた。大学では感じる事が出来ないことだ、ほんとうに心からうれしく思った。人の心を思う心が何よりも大切なことであり、一番難しいことだとあらためて思った。己を高め、立派な人となり、子供達や友人たちに心のつながりの大切さを教えたいと思う。この合宿で人としての大切な事をすべて良かった。先生方、国文研の皆さん、そして班友の皆さん、私に大切なことを教えていたゞき本当にありがとう御座いました。

師や友のことばにふれつゝ豊かな心になりゆく我れに気づきぬ

### カメラ・レポート 25



ユーモアを交へながらの率直なご指摘に、講義会場はしばしば爆笑の渦に包まれた。



## 自信の喪失

(拓殖大学 外語 二年 高森直子)

合宿に参加させて頂き、私は自分がいかに閉鎖的であったのかを知り、かなり自信喪失し、また自信を持っていた自分をはずかしく思いました。

しかし一緒に考えてくれる友がいて、班長さんの助言もありはじめてそういう風に考えるのかと思いました。足りないところを教えてくれる人が廻りにいることを有難く感じました。今までは、自分のことで手一杯で、他人の気持を知らうとする余裕がありませんでしたが、これからの私は少しは変わるのではないかと思っています。参加してよかったと心から思っています。友ともっと一緒にいたいと思います。

素直なる心になりたし我がために涙ながらの友を思ひて

## 合宿の体験を生かしたい

(九州女子大学 文 二年 豆田ゆかり)

初めて合宿に参加させて頂いて、振り返ってみて、心に残っていることは、自分の本当の気持を真正面から見つめ、その気持を飾らずに、ただたどしい言葉ながらも、語り合える友に巡り会えた喜びである。普段学校での友人との会話は、極めて表面的であり、友人の心の奥まで入り込む事は全く出来ない。然しこの合宿では講義の中で自分が印象に残った箇所を述べ、その事について班全体が討論する、そして積極的

に意見を述べ合うといふ、一つのコミュニケーションの場がとれた。日本文化の底を流るゝ生命「本物」をおぼろげながら見付けた気がする。これから先の生涯の中でこの合宿での体験を大切にして人に接して行きたいと思う。

壇上でこみあげる思ひおきへつゝ語りつぐ友に涙流るる

## 第二十六班—女子学生—

何か大きな勉強をさせていただいた

(中村学園大学 家政 四年 南里 枝)

私は去年、真心を語り合う素晴らしさを感じ、今年は班長として班員の皆にその感動を味わってほしいと、そればかりを思っ努力してみたのですが、持っている言葉の少なさや表現力の乏しきで皆の心に合うような響くような言葉をかけてあげることができませんでした。「討論の時間が長すぎるや」「あと何日で帰れる」などの班員の声を聞くと何とも言えない寂しさを感じました。全体感想発表の時も他の班の人が次々と「感動した」と言うのを聞いてみると、そういう感動を班員に与えることができなかつたと申し分ない気持になりました。人の気持ちに素直に引き出し、その人が感じたままを言える場、雰囲気を作ってあげることの難しさをつくづく感じました。反省することばかりだったのですが、いい経験をさせて頂いたとも思っています。何か大きな勉強をさせ

て頂いたと。それでやはり自分は勉強不足だと思ったのです。そしてもっと勉強したいと思うのです。こういう気持ちになれることが自分でも嬉しくて、ああ合宿に参加してよかったと思うのです。

我思ひ伝ふることの難しさに言葉の重み切に感じゆ

### 同世代の人たちと真剣に語り合えた

(拓殖大学 外国語 二年 寺崎奈津子)

私ははずかしがりやで、昔から友達に恵まれず、人の前で自分の意見を言うのが苦手でしたので、来る前に一番不安だったのは班別討論でした。もう一つは少し右っぽくっついやだなあということでした。けれども参加して色々な先生の講義を聞き、班の人たちと討論していくうちに、自分の意見を言うことに少しは勇氣を持てるようになりました。そして人の意見を聞くときは、自分の考えで受け止めるのではなくその人の気持をすなおに受け止めて考えてやらなければならぬことを痛感しました。また、天皇陛下を想う心、日本を想う心には右も左もないのではないかと思います。国旗にはまだ抵抗がありますが、少なくともこの合宿ではさほどのことは感じませんでした。参加して私が一番よかったと思ったことは親などではなく、同世代の人たちと真剣に語り合えたことです。本当に気持がすっきりして、心があらわれるような気がしました。普段の生活に入ったら友達と真剣に語り合うことなど極めて少なくなると思いますが、この気持を忘れ

### カメラ・レポート 26



「班別短歌相互批評」。自分の感動を正確に詠まうと班員が心を合はせて互いの和歌を直してゆく。歌を通じて班員相互の心が通ひ合ふ。



ないでゆきたいと思ひます。そして、色々な本を読んだり、色々な事にチャレンジして経験を積み自分を磨いて行きたいと思ひます。

初めには長きと思ひし合宿も過ぎさり見れば短かきことよ

心を開くととても心が安らぐ

(尚綱短期大学 家政 二年 金丸裕子)

不安な気持ちで来てしまい、五日間という長い時間を無事に過ごせるかどうか、又目的を持たず来てしまった事をとても恥づかしく思われました。講義を聞くにしろ、班別討論にしろ我身の無知さや甘えを思い知らされました。先生方のお話のすばらしさは何となく伝わって来ても、自分の無知さのため奥深い物をつかむ事ができずじめな思いをしました。しかし、私なりに理解し、何か伝わってくればいいと思ひ、班友の方も班付きの先生の話の聞き、心動かされる事も数多くありました。

日常生活の中で一つの事についてあれだけ深く話し合うこととはないように思ひます。他人の目を気にしながら生活している今の時代ではとても貴重なことだと思ひます。心を開くことがこれほど気持ちの安らぐ事なのか、それと同時に心を開くことはできそうでなかなかできないことです。この合宿で一緒に過した班友と長く付き合っていきたいと思ひます。そしてここで学んだ事を日常生活に活かしていければいいなと思ひます。班友と見た仁田峠の景色は忘れられぬものにな

ったと思ひます。  
いさり火のはえてうつくし夜の海を去りてのちにも忘れじと思ふ

ぼうつと目の前の景色がかすんでゆきました

(九州女子大学 文 二年 松尾教子)

一番印象に残ったのはやっぱり山田先生の御講義で靖国という新聞に紹介された二人の戦死された息子さん宛に書かれた母親の手紙の話でした。思いがふれすぎて少しつまりながら手紙を読まれた先生のお姿、そして手紙の内容が私の心の何かにふれて胸の辺りがあつくなり、涙がはらはらと落ちてゆきました。本当に何とも言えない哀しさ、息子を思う母親の心を思うと言葉も出てきません。ぼうつと目の前の景色がかすんでゆきました。

次に班別討論で私は初めて心からの誠の言葉を班員の人や先生から聞きました。それは何とも言えない新鮮な気持ちを私に与えてくれました。合宿も半ばになる頃、心から話し合った班員達との別れが近づいてくることの悲しみが段々増してゆきました。本当にまるで大学の身近にいる友達よりもはるかに近い友達ができました。これからも永くつき合ってゆきたいと今はもう願うばかりです。

山田先生の御講義を聞きて

ほとばしる思ひをのぶる師の君の言葉の葉あつく胸にしみいる  
靖国に今も眠れる我が子らを思ひてやまぬ心は哀し



無関心でいたことの愚かしさを指摘された

(中野区立鷺宮小学校 島村善子)

最終日ともなりますとやはりハードスケジュールだったのかしらと思われることも否めませんが、それも内容が充実していた証と思います。企画運営して下さいました国文研の方々のご尽力に心より御礼申し上げます。

今回は内容的に大変味わい深いご講義が多かったことが印象に残ります。これまで無関心でいたことの愚かさも指摘され奮起させられましたし、頭がスッキリ致しまして希望が持てましたことも嬉しゅうございます。本当に有難うございました。

村松先生のご講義を拝聴して

無意識に元号使い来たれども改めて知る意義の深さよ

## 第二十七班—女子学生—

せつせつと胸内に迫るお話

(鹿児島大学 農 三年 山内聡子)

昨年の初参加を契機に自分なりに勉強し、不安の中にも少しは自信を持って臨みました。班長として班別討論の進行をしていくうちに、自分が大切なことを見失っていることに気づきました。班友の多くは一年前の私を感じたと同じような



「夜のつどひ」では、有志により、また大学・地区別に楽しい出し物が演ぜられ、宴を盛り上げる。

戸惑い、すなわちこの合宿に来て初めて知る様々のことに戸惑いを感じているということです。感想を語ったり発言を求めたりする際に、本当に班員の「分かつようとする心」「感じようとする心」を察しようとしていたのだからかと顧りみさせられました。

長澤先生が「聞く」ということがいかに難しく大切であるかを語られ、長内先生が「知識」だけでいけないのであって実行しようとする心がなくてはならないと語られました。どのお言葉もせつせつと胸内に迫ってきました。自問を繰返す中で、班友のささやかな心配りや合宿に臨む姿勢が見えてきたように思われます。班長の務めを果すことによって、友だちの心を大切にするという得難い体験をしたように思います。班員の皆さんに出会えたことをうれしく思います。

先輩は我にかけより手をにぎり再び会ひしをよろこびたまひぬ  
我もまた再びまみえし喜びに御手をにぎりて御顔を拝しぬ

全体感想自由発表を聞きて

壇上であふるる思ひを語りゆく同胞の姿の心に迫り来  
思はずも我も涙す壇上であふるる思ひを語るを見れば

実りある勉強をさせていただいた

(九州女子大学 文 二年 飯田恭子)

初めての合宿、そして短歌の創作と新たな体験の連続でした。短歌の創作では、詠む際の苦勞、自分の気持が素直に表現できた時のさわやかさ、それを自分のことのように喜んで

くれた班友、その後の真剣な相互批評：本当に心が通い合うということを経験しました。

聖徳太子や天皇に関することなど、ふだんあまり考えることの少ない事柄についての講義が多く、最初は戸惑って来る場所を間違えたのでは？という気がしましたが、今は実りある勉強をさせていただいたと思っています。御紹介下さった山田先生、班付の山内先生、御指導ありがとうございました。

山裾のはるかかなたにダムのごと白雲の池の輝きて見ゆ

真の人づきあいを感じた

(長崎大学 聴講 西田佳代子)

二回目の参加でしたが、緊張と不安な気持ちで合宿にのぞきました。班員を気づかう班長さんや講義の感想を率直に語る友の姿に励まされつつ過ごしたように思います。しかし、班別和歌相互批評をやっていて、やはりもっともっと気持ち素直に表現して、お互いを理解すべきだったんだと気づかされました。そして相手の心を自分で確かめながら言葉をかましあっていくところに、本当の理解ができるんだなあという感じました。ああ、こうやって手ごたえを感じながらやっという感じがしました。真の人づきあいとはこういうことなんだという感じがしました。

まだ話したりないという気持ちに先立って別れるのが残念です。できるだけ連絡をとっていきたいと思っています。



そして、人や物事のよさを感じとるには、それだけの心の姿勢が必要なんだ、努力なくしては人や物事の素晴らしさは理解できないのだということを心に刻んでいきたいと思えます。

#### 班別和歌相互批評

友の詠むみ歌を読めば自づから気心知れるがうれしかりけり

長崎の街を訪ふが楽しみと幼なごのごと後輩ははしやぎぬ

合宿もはや終りなりひとときを名残り惜しみて友らと語らふ

#### “心死すべからず”——心にしみ入った言葉

(備ヤマハプランズショップ 甲斐恵子 24歳)

歴史について、日本の文化について、ここ数年来、自分なりに学んできたつもりでした。しかし、“知識と知恵”の違いにハッと気づきました。合宿で、人の言葉や心に己れの心を擦り寄せていくやうな生き方を学び、いはゆる歴史を“生きた歴史”へと変へていく努力の大切さを学びました。そして諸先生方の生きる姿勢に触れさせて頂いたことも大きな喜びのひとつです。班長さんのひたむきな姿も心に残りしました。班員の皆さんの心の裡が目を追ふにつれて喜びで満たされていくのを感じました。

私のノートには多くの言葉が留めてありますが、“心死すべからず”との山田先生の御講義の際のお言葉が、私の心にしみ入っています。



楽しい夜だ。熱演に思はず笑みがこぼれる。



向ひあひともに涙す班長と班員の胸内ふかく通ひぬるかな

意欲が湧いてきた

(拓殖大学 外 三年 小泉美奈子)

内容の濃い講義にびっくりして最後までついていけないだろうかと非常に不安でした。しかし、最後になるにつれて、少しずつ発言したいという気持が湧いてきて、同時に友人の意見を聞いてみたいとの意欲も覚えました。そして、まだ形にはなっていないが、ここで学んだことが今後の自分の生活に何かしら役に立つのではないかと感じられてきました。こんな気持になれたのは先生方の御講義はもちろんですが、班別討論の経験がそのようにさせたのでしょう。班長の山内さんが一所懸命になって発言しやすいように口火を切ってくださいましたし、班員たちの経験談を聞いているうちに「がんばろう！」という気持が湧いてきたのです。社会に出てからも、自分の意見を述べ、他人の話に耳を傾けることは、ものすごく大事です。この合宿の中で感じたことをこれからも大事にしていこうと思います。

友どちと語りすごせしこの宿をいよよ去りゆく時の近づく

自分の気持を大切に受けとめてくれた

(福岡教育大学 教 二年 船津洋子)

一人の下宿生活の中で、自分とはほとんど関係のないことと思っていた「国家」「天皇」についてのいくつもの講義に

は何か不可解な感じを抱かずにはいられませんでしたが、でも私のこうした気持ちを班員みんなや先生が大切に受けとめて下さったことに、とても驚き感動しました。今の私には講義内容についてあれこれ考えるのは難しいけれど、人が感動している姿、語る姿を素直に見てみようと思えました。同時に、自分がいまにも物事に感じる心をなくしているということにも気がつきました。輪読の中に「尊いもの美しいものを自分の高さに引き下ろして見てしまおう」との一節がありましたが、とてもずしりと感じられました。そして小さなことにも深く感じて語る班員の姿がすごく思われてなりません。大学に入ってから真にやりたいものが見つからずいたのは、自分の心のもち方に問題があったのだと気づいたような気がします。「何かがやれる」という思いで帰れることをうれしく思います。

心より出づる言葉を語る師の友の姿を忘れじと思ふ

### 第三十一班―社会人―

歴代天皇の御製を一首でも多く味合ひたい

(福岡県立山田高校教諭 古川克也 25歳)

学生時代に参加の機会がなかったといふことが聊か残念に思はれますが、四泊五日の日程が終はらうとしてゐる今、疲れて早く帰りたいといふ気持よりも、寝食を共にした班友と

の別れを惜しむ気持ちの方が高まりつつあります。私なりのこの充足感はきつと忘れられないものになるでせう。

自分が生を受けたこの日本、そして天皇陛下に就いて改めて考へさせられたといふことは意義深いことと信じます。所謂「天皇の戦争責任」とか「日の丸、君が代反対」等と叫ばれてゐる昨今ではありますが、さういふことを論ずる暇があったら、歴代天皇の御製を一首でも多く味はってみたい、私はそう思ひます。祖国、祖先に感謝をし、今の自分に一体何が出来るかを問ひたいと思ひます。その答へが出る迄には時間がかかるかもしれないと思ひますが、この合宿の感動を胸に秘めつつ、また明日からの人生に臨みたいと思ひます。

全体感想自由発表で登壇した折に

我が思ひ語らむと思ひあがれども人の多きに言葉忘るる

学生諸君に負けないよう頑張りたい

(日本植生会 小田高史 26歳)

私はこの合宿に参加し、真剣に講義に耳を傾け、日本の国について考え、討議されている学生諸君の姿を見て本当に感動を覚えました。私の学生生活を振りかえてみると、いかにその日を楽しく暮らすだけで祖国について考えたり討議しようという機会さえ得ようとしませんでした。本当に今の学生諸君は幸せであると思ひました。

日本国民として生まれたことに誇りを持ち、もっと日本の国のことを考えていかなければならないという気持です。学生諸

カメラ・レポート29



長崎県下県郡美津島町大山公民館長である白井傳先生は横笛で「桜井の別れ」を吹かれた。その美しい音色に、参加者は魅了された。



君と共に素晴らしい日本文化の継承に微力をつくしたいと思いません。学生諸君に負けたくないですから……。  
討議して身になる話多くあり我が人生にいかにか生かさむ

### 歴史の事実を表面的にしか見ていなかった

(宮崎神宮 川越 篤 28歳)

私は日々神職としてご奉仕を致します中で、天皇陛下の事日本の歴史、日本の国体について、更に日本人の在り方について、その正しき道を知り多少なりとも実践しうる人間と思っております。しかし、初めてこの合宿に参加させていただき、これまでの自分がただ知識の集積にしか過ぎず、自分の生の本質的なものを全くとらえていなかった事に気付きました。

心の底から天皇陛下を思い、国の行末を憂い、愛する家族友だち・故郷を思いつつ戦場に散っていかれた先人たちのお話を伺い、また、私よりもっと若い方が一所懸命勉強されている姿を見るにつけ、歴史の事実を表面的にしかとらえていなかった自分を本当に恥かしく思われます。

山田先生のおっしゃられた「歴史を生きてみよ、その事実がどういう意味をもつか、当時の人々がどううけとめたか、それを体験してみよ、名もなき民にささえられてきた事実を全身で感じなければ国の歴史は理解できない」との御言葉は私の心に痛烈に響きました。

慰霊祭

闇の中神降りたまふ警蹕の声とほりきて心静まる

### 合宿はこれからの私の人生の第一歩です

(福岡県立筑紫丘高校教諭 高岡竜司 26歳)

合宿に来て私のまだ目にしていない文章に触れ味わっていらっしやるのが私と先生方との大きな隔りだと思ひ、販売されていた書物を五・六冊購入しました。しかし班別討論を重ね、班別輪読を行い最終日の感想自由発表を聴くに及んで私は先生方との隔りはそんなものでうまるものではないことに気がつきました。それは言葉は人間関係を離れて存在するものではないのだから、先人の言葉に接するだけでなく、今生きている親・兄弟・友人・先生方とじかに語り合いその人の心が伝わってくるような、そういう人間関係をもつことこそが大切であり、そのことがあって隔りがなくなるといふことです。輪読や班別討論だけでなく、何げない語り合いの中にそれをもっともっと経験したかった。このままではいけないと思いつつ、ふんぎって合宿に来て本当に良かったと思ひます。合宿はこれからの私の人生の第一歩です。これからです。そういう思いで家庭、職場に戻り来年是非またこの合宿に来たいと思ひます。

いにしへの神々祖先のみこころを朝夕きこしめし太子たふとしわが家に帰りてはまづ母上にごころをこめてただいまといはん





「全体感想自由発表」。次々と挙手をして登壇した友らは、合宿中何に感じ、どう思ったかを、沁み沁みと、そして時には切々と語ってくれた。

会社の若い人達にも是非参加させたい

(柳ビョイ 近藤 建 48歳)

心に残る御講義が二つありました。一つは小柳先生の明治の先人の偉業を力あるお声で拝聴できたこと。もう一つは小田村先生のこれからの日本と日本人の生き方についてのお話しが心に残りました。また班別輪読で松吉さんの聖徳太子のご説明と輪読指導は昨年と違い非常によくわかりました。

しかし残念な事は参加者が昨年より減ったということですが、これは国文研の活動に問題があるのではないでしょう。高年齢の方が目立ち過ぎます。来年は私は参加しませんが、こんな良い合宿の場合は私の会社の若い人達にも是非体験させたいと考え二―三名づつの参加を今から申し込みます。

日の本の益良男つどひ学びける正しき思想生かし続けむ

日本の歴史の尊さを子供達に語り継いでいきたい

(厚木市教育委員会 山路昭夫 46歳)

全てが初体験という中で、私自身も若い時にこの様な勉強ができていればもっとと一日一日が充実した生活になっただけかと思われて残念であります。中学校時代の教員が参加していることを知り驚ろきを感じております。

天皇ということについては現代学校教育現場では国旗・君が代に関連して議論されていますが、私にとっては今まで何の抵抗も感じないで天皇を尊いものと思っていました。合宿

の講義や講演を聞いて日本の歴史には尊いものがあると痛切に感じ、この思いを自分自身のものだけにせず、もっとこれからの子供達に語り継いでいかないと本当に日本の将来はどうなるのか恐ろしく、かつ懸念に耐えない心情であります。湯を浴びて朝日をのぞみつ思ふとき別れせまるは淋しきことかな

### 第三十二班―社会人―

講義中、何度も「ドキッ」とした

(厚木市教育委員会 山口吉春 42歳)

長内先生は、実に静かでやさしい先生だが、「これは」という時になると、強く、はげしい口調で私たちに教えられた。講義中、何度「山口君、君は何をしているんだ。あれこれ言っている間があったら、君ができることをすぐしなさい」と言われているような気がして「ドキッ」としたことか……。まわりの人を、町を、そして国を愛する心を少しずつ育てていけるよう努力していきたい。ありがとうございました。

おだやかな有明の海眺むればはりつめをりし心なごみぬ  
師の君の一語一語に熱を感じまよへる我も力わきくる

非常に有意義であった

(出光興産 津田忠雄 30歳)

昨年に続き合宿に参加させて頂き、非常に有意義であった



と思います。皆様感謝いたします。

昨年、小柳陽太郎先生の「喜びもかなしみも…」の御講義で先生が感極まって泣かれたお姿がありました。しかし、私には何故か感動がなかったのです。この事を一年かけて自分のテーマとして考えつづけ、決して妥協せずに追求してきました。歴史を正確に学び、自分の生きざまを考え、御製を拝誦し、現在では、「喜びもかなしみも民と共にして歳はすぎゆき今は七十路」が私にとって一番好きな御製になりました。

また、昭和天皇の崩御に際し、自分の考えを持ち行動できたのは幸運でした。今後も、今上陛下や国家に対して自分の考えを持ち、行動していきたいと考えます。

若人が喜びを素直に語らへば同じ思ひに心おどりぬ

### 日本国民ならば誰でも抱く自然な感情

(大分県立別府青山高等学校 大野雅之 25歳)

今回の合宿で一番感した事は、「聞く」ことの難しさである。日常の生活において、自分では相手のことを理解している様に見えるが、実はその半分も理解していないのが現実ではなからうか。相手の話を傾けても常に自分の思考枠のなかで理解している。心を空にして、真剣に相手の心をつかむことができていない。かつ、そのことにも気づかない。

合宿が目指すところの、天皇、日本を理解し愛する精神は、日本国民ならば誰でも抱く自然な感情である。決して強要されるべきものでもなく、理不尽なものでもない。



閉会式。参加者を代表して中央大学文学部四年三林浩行君が「合宿で学んだ言葉と、班友のことをこれからも思ひ出していきたい」と挨拶した。



偏った知識、観念をまず捨てて、ものごとの本質を素直にとらえ、偽りのない生き方、学問を続けていきたい。

合宿最終日の朝のつどひにて

眠き目をこすりつつ空を見上げれば無限に広がる青また青なり

祖国について考えていきたい

(日本植生綱 津田和明 26歳)

会社研修の一環として、今回合宿教室に参加させて頂きましたが、我国日本について、これほど多くの方が真剣に考えておられるという事を初めて知り、本当に驚きました。又、班長、班付の方をはじめ班員の方々の熱心な姿勢に、当初業務命令として参加していた自分が恥ずかしく思われました。時が経つにつれて、初対面であった班員の方に、自分が率直な感想、意見を述べられる様になった事が驚きであり、感謝の気持ちでいっぱいです。今後自分なりに、祖国について考えていきたいと思えます。そして、会社の基本理念であります「職務を通じて国家社会の繁栄に尽くす」為、微力ながらも頑張りたいと思います。

鳥原に友らと語りひ幾度か我が未熟さに恥づかしくなりぬ

自信と勇気を与えられた

(宮崎神宮 杉田秀徳 24歳)

この合宿に於ては、万物への感謝の念を改めて思い深めることができました。悩み苦しんだ体験の中から新しく得た思

想、言語、動作というものは、私に自信を与え勇気を持たせてくれたと思います。

私たち日本人は心の清浄に慣れ、静かに自分を顧みる時、感性として清浄を尊ぶ心が生まれてくると思います。その心を言葉にして、信頼感の中で批判的探求が可能になる真の交流をこの合宿の中で深めることができたと 생각합니다。

また、常に相手の立場に立って考え、行動すること。これが知識や理論に優先することを教えて頂きました。

諸先生方、この機会を設けて頂いた方々、そして班長はじめ班員の方々に心より御礼申し上げます。

うたかたの消ゆるおもひのはかなき世に講義に学びし正道<sup>まじまじ</sup>求めむ

### 第三十三班―社会人―

若い人の真摯な研修態度に感銘した

(福島商業高校教諭 佐藤敬義 62歳)

若い方々が真摯な態度で研修している姿に接し、また諸先生方が親切に御指導なさっている御姿を拝し、誠に感銘深く存じました。そして私も多くの事を学習させて頂きました。

特に小田村先生と村松先生の御講義を感銘深く拝聴致しました。心から厚く御礼を申し上げます。今後とも御指導を頂きますよう切に御願ひ申し上げます。

しみじみと国歌斉唱終りたり若き友らと別れんとすも

知っているという気持が一番危険な境地だと  
実感した

(岐阜県立本巣高等学校教諭 野原清嗣 34歳)

初めての参加であったが国文研の先生方の御著書はいくつか拝読させてもらっていたのでそれなりに知っているつもりで参加した。しかし、この「知っている」という気持が、真信より遠ざかってゆく一番の危険な境地（経典の言葉を借りれば「不親近処」なのだということを実感させられた。班別討論に来て頂いた小柳陽太郎先生が私の言った「同じ考え」（小柳先生のように「同じ考えをもつ教え子を育ててゆきたい」という意味のことを言った）という言葉を否定された。それはどういうことだろうかと考えてきたが、青年体験発表をされた北浜氏の「聞いている人を説得するのではなく感動したことを言葉を選んで話す先輩の姿に感動した」という話を聞き、これではないかと思った。教師の性質上すぐ「知っている」かいないかだけを問題にしてしまいがちであったが、「感ずる心」があるかないかをこそ、いや自らが「感じているのか」をこそ問題としなければならぬだろう。国文研の先生方が謙虚で瑞々しい気持を持ち続けておられることに感動し、深く学ばされるものがあつた。教壇に戻って、生徒達にこの感動を伝えてゆきたい。そして彼らが祖先の魂に触れ、素直に感動できる気持を育んでゆきたい。

白井傳先生の笛を聞きて

カメラ・レポート 32



主催者を代表して閉会の挨拶をされる国民文化研究会副理事長・宝辺正久先生。  
先生は、「一所懸命に御講義を聴き、感激したことを班友と語り合ふことにより心が一つになりました」と合宿を振り返られた。



ますらおの御魂に語りかけるがに笛の音清くひびきわたれり

如何に感ずべきことを見過していたかを痛感した

(日本青年協議会 坂元義久 27歳)

いま合宿を終えるにあたって胸にあるのは「世の中にはこんなに感ずべきことがある」という事実の発見であり、「にも拘らず自分の心の用意ができてきていないがために如何に多くの感ずべきことを見過していたか」という痛感である。

人の話をよく聞き、また自分の意見もはっきり伝えるということは大変難しいことで、何かジレンマを感じていたが、北浜さんの体験発表を聞いて肝心なのは人の言葉に自分がどう感じたかということであり、その感じたものを表現することであると思った。その意味で夜久先生が「歌をつくることは巧拙を問うものではない。歌を一首つくるということ、一首の歌に感動するということが大切なことなのです」と言われた言葉が心に深く残った。

長内先生のご講義をおききして

いかるがの太子の御歌をうたはるる師の声心にしみ入りてきぬ  
祖先の血われらが内にも流るると語らる御声の胸に迫りて

素直な生き方がしたい

(日本植生塾名古屋営業所 田村康浩 26歳)

合宿教室に参加して今まで思っていたことが違っていたり知らない事が沢山あり、自分の未熟さが良く分かった。

講義を受け、班別で討論をし、学校では学ぶことのできないものを習得できた。これを他の人達へも話したいけれどもまだまだ勉強不足である。だから本をもっとよく読み自分のものにして行きたいと思う。

又、これまでの自分は精神的努力のないただの物識りになっていたし、自己中心的で相手の気持ちになって考えていなかったと思う。これからは素直な気持ち、喜びをもち、それを他にも伝えられるような生き方がしたいと思う。  
講義中しばしうとうとしたれども今となりてはなつかしきかな

天皇の尊い思いが感じられた

(尚綱大学附属図書館 夏野憲浩 24歳)

昭和天皇の御崩御の時、父と天皇について話し合ったことから、この合宿教室の話聞き、「今の日本を知る良い機会だ」と言われ参加しました。

天皇に就いての知識がなく漠然と考えていましたが、講義を受けて少しづつではありますが、天皇の国への思い、我々国民への尊い思いが感じられました。

又、これからの人生で何を学び感じねばならないか問われた思いがしました。経済大国日本の忘れ去られた本質を知りそれを受け継いで行かなければと強く心に刻みました。

合宿を終え、父が勧めてくれた訳がわかった様な気がします。合宿に参加出来て本当に得るものがありました。

班員の語る姿の真剣さに我の心も直くなりゆく



## 見学参加者

(長崎縣下縣郡美津島町大山 七十三歳 白井 傳)

葉月九日、眉山に朝日影が映え、一点の雲も無く晴れ、洵に味爽の懐ひ深きなり。五泊六日の合宿研修も忽に過ぎ、始めての参加であったが、過去三十三回、毎年この様な充実した一筋の道念に、相倚り相俱に炎威厳しき夏暑が修道されて来た稀有の、金剛不壞の壮心を今のうつつに尊く有難く、唯々感銘深く思量致し居ります。

今日まで指導御戒示下さいました理事長先生始め、諸先生方の、純烈丹誠の君国への深い御思念、全国各地より慕ひて集ひ、その声咳に接して来た一万に近き俊秀学徒達。明日の日本を担ふ不拔の志操を胸奥に鏤んで、日々の研学に、職能の場実践されあるを思ひます。一人でも多く、来る年毎の合宿教室に諸先生の御示教に触れられんことを希求致し居ります。意尽し得ませんが唯々有難く御礼申し上げます。終りに稚拙の腰折数首留誌致しました。

「別るる日に」

わかれがたきおもひしくしくふたびをあはむひもがなころきしつ  
まゆわかきをこのともよほにほふをとめのとよわすらへなくに  
ねもごろに横断歩道のあないするとものみちびきありがたきかも  
あさはやくゆふべはおそく指揮班のゆきとどきたるころうれしも  
あたたかくあつきおもひをむなちよりかたりたまへる大人らおもほゆ  
師よ友よおみすこやかにふたたびのなつをきしつあひわかれなむ

カメラ・レポート 33



「先生有難うございました。来年もまた参ります」。別れの淋しさと、全力で合宿に打ち込んだ満足感で胸は一杯だ。

ふつふつともゆるいのちをむなうちにひびをいのりてふみゆかめやも  
くもななくはれわたりたるあさひかげしまばらのつどひわすれがたしも  
ももと世のたけきをこころやましむるなかれときし松陰おもほゆ

合宿中に創作された「短歌詠草」

——しぎしまのみち——





## 短歌創作について

この合宿教室では、例年、主催者を含めて参加者の全員が、短歌を作ることにしてをります。これは、この合宿教室の大きな研修課題の一つであり、今年もまた、千数百首に上る短歌が創作されてをります。

短歌は、古来、私達の祖先が「しきしまの道」と呼び、言葉の修煉、延ては心の練磨の道として、永く守り伝へて来たものですが、現代においては、人々の日常生活には馴染みの薄いものとなり、殊に若い世代には、文学的趣味の一つとしてしか受け容れられなくなつてをります。従つて、この合宿教室に初めて参加する学生青年諸君にとつて、短歌の創作は無縁の感があり、ある種の負担でさへあるかに見受けられるのですが、合宿の日程を追ふにつれ、自らの心の動きを言葉にすることのむづかしさ、まごころの籠つた言葉の奥深い味はひを多少なりとも体験して行く中で、次第に、その意味が把握されてゆく様に思はれます。それに至るまで参加者の合宿課題の数々に取組む努力は並々ならぬものがあるのですが、知識の集積や論理の整合に重きが置かれ、人間にとつて最も根源的な心の問題を等閑に付してきた現代教育の束縛を自ら感知し、そこから一步でも二歩でも抜け出さうとする営みが、この短歌創作、そして、その後の参加者同士の班別による相互批評でした。心の奥底に眠つてゐるまごころを呼び覚まし、人のまごころに敏感に感じる、素朴にして溢れる様な人間性を取り戻さうとする試みが、細やかながらも実現されてゆくこの貴重な経験は、参加者全員にとつて、まさしく忘れがたい印象として心の奥深く刻み込まれたに違ひありません。

合宿三日目の午後、與島誠史（福岡県立山田高校教諭）による僅か一時間の「短歌創作導入講義」によつて短歌を作る上での基本的なルールが指導され、その後の散策を経て夕刻には歌稿を提出するといふ慌しい日程の中で生み出された短歌でありながら、作者の集中された内心の働きは、その言葉の端々に充分に表はされてをり、作歌上の巧

拙を超えて、強く心惹かれるものが籠ってをりました。提出時刻間近い夕食前の時間帯は、廊下に行き交ふ人影もなく、合宿所全体がまるで水を打った様に静まり返って厳肅な雰囲気包まれ、真実の言葉をさがし求めて一人びとりの張りつめた心の動きが、肌に触れて感じられる様でした。

提出された短歌は、その日のうちに国民文化研究会の会員によって選歌が行はれ、翌日謄写版刷りの数百首の歌集となって全員に配布されました。そして、その歌稿をもとに、小柳左門氏（九州大学医学部循環器内科講師）によって、創作短歌全体に亘る講評が行はれ、短歌批評のポイントについて指導がなされた後、各々の班に別れて、班員同士の濃やかな相互批評が行はれました。そこでは、技巧の巧拙を論じ合ふのではなく、作者の心を偲びながら、その心に添って、言葉を正しく客観化して行くといふ作業が、班員全員の心と知恵とを集めて徹底的に行はれました。さうして、互ひに友達の心に深く触れふ合ことよって、合宿生活において寝食を共にし、胸中を披瀝し合ってきた友情の結び付きが、ここにおいて一段と深まって行くことが確認されてゆきました。かうした、短歌創作を通じて展開される、日常生活にはまことに稀有な精神生活の体験は、参加者の一人びとりに、言ひ知れない、ほのぼのとした喜びをもたらしたのみか、学問と友情との分かちがたいつながりをも、自づから、感得せしめるに至るものでありました。

ここに収録された短歌は、その表現形式においては稚拙であるかも知れませんが、参加者各々の切実な情意の率直な表白であり、この合宿教室を通して現出された感応相稱かんおうさうじょうの世界の一大交響楽と言つていいかと思はれます。これらの短歌の中から瑞々みづらぎしい貴重な魂の輝きをお読み取り下さり、短歌本来の姿が顕現されつつあることの一端をお汲み取り下されば、と心から祈念する次第です。

# 短歌詠草（しきしまのみち）合宿第一回目の創作作品

（参加学生の第二回目の作  
品は感想文の末尾に収録）

## 第一班

西日本短大法三 田中裕一郎  
故郷をば見むといさみて登れども霞かかりて  
天草は見えず

鹿児島工専土木工学五 長谷正義  
雲仙に登りて廻りを見渡せば何とも言へぬこ  
の雄大さ

中央大文四 三林浩行  
急な坂気をつけ気をつけ降りゆくと後ろの方  
でずすと音す

拓殖大政経三 角田学  
小柳志乃夫さんと再会して  
ひさびさに先輩に会ひて懐しき思ひが徐々に  
高まりくるなり

早稲田大法一 川瀬弘至  
仁田峠のまはりに生へる樹々の葉に光さしき  
てまぶしくも見ゆ

福岡大聴講生 亀田隆久  
班別討論にて  
切々とおのが想ひを語りゆく友の言葉に心魅  
かるる

## 第二班

早稲田大政経二 岡田浩  
友達と今登らむとする山の頂き高く雲はかか  
れり

沖縄法文学文二 山田悦朗  
汗ながし息を切らせて登る山の景色見渡せば  
いと美しき

拓殖大外語三 唐沢昇  
人として何をすべきか考へることをゼロから  
始めむと思ふ

亜細亜大経済一 富井達之  
輪説に対する思ひ強けれど私の未熟さ今わか  
りけり

九大法二 大瀬博幸  
島原のロープウェイに乗りたれば眼下の景色  
晴れかに見ゆ

日大文理四 井坂信義  
戦ひにたふれし息子忘れずて四十年余生き来  
し母はも  
雲仙岳に登りて  
息せきて登り道行けば紫の蝶のひらひら横切  
りにけり

雲仙仁田峠にて  
早稲田大法四 新屋信隆  
山道を踏みしめ登ればとめどなく流るる汗の  
心地良きかな

## 第三班

千葉大工四 石川名津朗  
見上ぐれば大きな岩に堂々と陛下の御歌の  
刻まれてあり

亜細亜法一 佐塚謙  
新たなる友を求めてはるばると島原の地に我  
ら集へり

拓殖大外語三 栗山隆司  
雲仙の頂き隠す白雲のかかりしさまは帽子の  
如し

早稲田大文二 大島伸一  
石ぶみに刻まれし御製朗々と友らと共に声出  
して詠む

徳島大総合三 倉本聖也  
木々の間をみ友らと共に登りゆき先つ帝の御  
歌拝す  
天皇のみやまさりしま詠み給ふ御歌は巖に刻  
まれてあり



九州大法二 花田芳夫  
昭和天皇の御歌碑を仰ぎて

ご生前の陛下の御顔俣ばれぬ御歌刻みし碑を  
見上ぐれば

#### 第四班

西南学院大経済四 西山博章  
ゆつたりと子らに乗せたる白馬のわれに向か  
ひて歩き来るなり

中央大経済三 福田剣充  
すがすがしき風にあたりて友どちと語るひと  
時心地良きかな

早稲田大文三 福島伸行  
夢にみし九州の地へ踏み入ればやまなみはる  
か西へ連なる

九州産大芸術一 藤原武史  
ともすれば孤独になりし我なれど友を得たる  
が切に嬉しき

九州国際大国際商一 庄子文郎  
島原へ心はやれどわが乗れる列車は未だ博多  
駅なり

亜細亜大経済一 宝田誠  
班友と語る姿を想ひつつ窓の外見れば博多駅  
なり

#### 第五班

九州大法三 三沢茂美  
友どちの我においつきがなればとはげましつ  
つも我は追ひぬく

北九州大外国語一 土橋功昌  
汗をかき息を切らせて登山道登りてみれば吹  
く風冷たし

亜細亜大経済一 斎藤義宏  
故郷ゆ遠く離れたる島原で師の御言葉に胸内  
で泣く

早稲田大政経二 岡安太郎  
島原外港駅にて  
暑き中待合室にすわりたるさはやかなる乙女  
に心ひかれぬ

千葉大工二 中富仁  
小柳先生の御講義の後に  
国難の時代に生きし人々の言葉を辿り心偲び  
ぬ

佐賀大理工三 白木潤  
力込め明治の精神語りたまふ小柳大人は声た  
からかに

西南学院大経済四 田崎恭士  
昨日まで顔も知らざる間柄言葉交はせばはや  
友となりぬ

#### 第六班

高千穂商大商三 村上貴生  
諸先生の御講義をきき五年前皇居勤勞奉仕を  
させて頂いたときのことを思ひ出して

大宮の庭に並びし我らにも陛下は優しく言葉  
たまひぬ

拓殖大外語二 名和憲真  
班室で島原の風浴びながら何も言はずにたた  
ずみにけり

早稲田大政経四 鵜野光博  
初めて班長を務めて  
今日一日思ひ起せば力足らぬ我が身思はれ寝  
つかれぬかな

九州大教育一 高倉庸輔  
討論を楽しみに待つ今の我は心も素直になり  
ゆく覚ゆ

獨協大法四 木下裕司  
村松先生の講義を受けて  
大君の御めぐみ深き日の本に生まれあはせし  
身の幸を思ふ

亜細亜大経営二 佐藤順一郎  
與島先輩の導入講義の際  
我が歌の詠み上げらるるを聞きし時去年の思  
ひの蘇り来る

我もまた先輩のやうににこにここと笑顔たやさ  
ず生きてゆきたし

早稲田大一文五 本多 達 雄

小柳先生の御講義を聞きて

はるかなる明治に生きし先達の文読むみ声の  
心に響きぬ

師の君の思ひ込められしみ声聞けば先達の姿  
うつつに浮かび来

### 第七班

同志社大工二 村 木 隆 広

仁田神社にて

み社に参り柏手打られたればあたり音のひび  
きわたれり

東京大法三 松 岡 恒 男

国旗掲揚場設営作業にて

つるはしを打ちおろす作業にのど乾れて冷た  
き水に生くる心地す

防衛大国際関係論二 石 卷 義 康

班別討論の折

胸に抱く苦しさに耐へず我が思ひつたなき言  
葉で友らに明かす

み友らの素直なる心にふれあひて疑問の少し  
はれゆくおぼゆ

亜細亜大国際関係一 吉 井 一 聰

山の上ゆ有明海をみおろせば我の胸内の澄み  
わたりゆく

拓殖大政経三 岡 崎 巧

み友らと布団敷きつつ語りあふひとときすら  
も得るもの多し

中央大文四 土 井 郁 磨

班別討論の司會を行つて

かざらぬに思ひを言はむと話せども理屈がち  
なる言葉になりぬ

自らの拙き問ひに丁寧<sup>ていねい</sup>に答へて呉れるは有難  
きかな

早稲田大文三 檉 本 稔

父君の御霊に捧ぐ御誄<sup>おとぎ</sup>はかなしきなかに雄々  
しき偲<sup>しの</sup>ばる

身をすてていくさをとめたまふ大御心の今さ  
らながらにありがたきかな

### 第八班

亜細亜大経営四 木 村 謙 二

み友らと頂き目指し登れども景色が悪くや  
しとぞ思ふ

西南学院法二 田 鍋 彰 司

小柳陽太郎先生の御講義を聞きて

まつづくに時代に生きた人々を思ひ偲ぶが歴  
史と知れり

防衛大理工四 古 川 茂  
島原の風に友等とあたりつつ互いの心のわか  
りゆく寛ゆ

九州大工一 松 岡 篤 志

班別討論で白井さんの話を聞きて

己が身を捧げて国を護らむと語るみ言葉心に  
しみるも

一橋大社会一 松 井 哲

班友に自分の意見を正されて我が勉強の足ら  
ざるを取つ

高千穂商大商三 金 子 勝

島原に期待を持ちて来てみれば心優しき班友  
が待つ

東北大文二 伊 藤 智 実

九州に初めて足をふみ入れしあの感動をいま  
も忘れず

### 第九班

亜細亜大経済二 茅 野 輝 章

雲仙に登りて  
売店のおばさん我にはほゑみて雲仙にまたい  
らつしやいと云ふ

防衛大理工四 五 日 市 弘 之

率直に語り合ひ心を交はしゆけば膝の痛みも  
しばし忘れつ

熊本大教育二 北島直浩  
福島中佐と別れた馬を思ふ

病えてつひに中佐と別れゆく馬を思へば目頭  
あつし

中央大平成元年卒 久保田 真

合宿で逢へると思ひて来たれども君の姿のな  
きはさびしも

福岡大商二 森 信平

仁田峠期待をこめて見渡せば眺めをふさぐ雲  
のいたづら

玉川大文一 増田 貴広

講義の中暑さを忘れ夏を忘る登山のあせが夏  
を思はず

國學院大文四 亀井 正弘

野岳登山にて

山あひの靄かかりたる遠方にかすかに光る湖  
の見ゆ

### 第十班

亜細亜大法四 眞田 博之

山道を下りて着きし丘の辺に吹きくる風のす  
がすがしきかな

早稲田大社会科学四 村主 真人

開会式にのぞみて

友どちと声高らかにうたひたる君が代の調べ

に胸のつまりぬ

九州産業大芸二 北米 晃

はらへどもはらへども睡魔の襲ひきていかに  
講義中なれどもし難し

拓殖大外国語三 鎌田 淳一

ひしひしと吾が愚かさの身にしてみて学びに目  
ざむ鳥原の地よ

九州国際大国際商学一 城戸 健

仁田峠馬に乗らむと欲すれど時たらざるがい  
と口惜しき

鹿児島大農三 榎元 勝治

雑木を払へば歌碑のあらはれて疲れも忘れ柏  
手を打つ

### 第十一班

亜細亜大経営三 岡山 英一

倭建命の御歌を詠みて

今まさにかむあがりし時詠みたまふ倭し美し  
我を泣かしむ

秋田大鉱山一 坂下 詠治

仁田峠に登りてよめる

鳥原を頂きに登り見下ろせばかすみかかりて  
ほのかに見えたり

金沢工大四 吉田 隆之

寄席にて

高座にて晰しゆけども客席の静まりゆきて笑  
はせがたし

鹿児島大農三 原 一文

友へ

ふるくより傳はりきたる日の本の學びの道を  
ともに歩まむ

早稲田大社会科学一 村瀬 廣司

班別論議にて

言の葉のひとつひとつに込められし思ひを読  
みとることぞ難し

熊本大法三 平田 裕英

國武先生の御講義を聴きて

師の君の語りたまへば須佐之男も大國主もよ  
みがへりたり

師の君のいと楽しいげに語りたまふ姿し見れば  
吾れも楽しき

### 第二十一班

成城短大教養一 坂東 恵子

大君の先帝偲ばるる御詠に我知らずして涙流  
るる

東北女子大家政二 古川 朝香

班友と机囲みて語らへど自分の心未だ開けず

尚綱大文二 浅田 千春

数知れぬ昭和のみ霊よやすかれと我祈るなり



島原の地にて

尚綱短大教務課 椎葉 みどり

峠より有明の海見渡せど霞に隠れし大阿蘇の峰

九州女子大文二 田所 三佳

和歌つくる心がまへあれど我心あせるばかりで言葉いでこず

中村学園大家政二 木下 優子

天皇のさびしきみ心を知りて今支へていかむ国民として

日の本をいのちにかけて守りたる先人たちに学びてゆかむ

## 第二十二班

九州女子大文二 椎山 美恵

みなとともに御製を拜しすめらぎの大御心に触るる思ひす

大東文化大外語二 橋本 珠実

素直さを失ひたりし我が心に今ひとすぢの光さしこむ

尚綱短大教務課 竹下 智子

有明望む地にて文化を学びゆけば深まりてゆく友との絆

東北女子大家政二 浦田 博子

心おきなく語りあひたる友を得て忘ることな

しこのうれしさは

中村学園大家政四 下田 和子

御製にふれ感動せりと語らるる友の言葉に胸あつくなる

班別討論で御製を拜誦して

東京女子大文理四 椎島 聡子

すめらぎの変はらぬやさしき御心に触れて日本を誇りに思ふ

数首の御製を拜誦して

## 第二十三班

長崎大教育二 早田 保美

仁田峠にて

久々に出会ひし友と語らへば嬉しさこみあげ言葉つまりぬ

東北女子大家政二 塚原 さき

はるかなる南国の地で語り合ひて我がこころねの貧しさを知る

九州女子大文二 深松 恵子

いざ登山解放感に満ちあふれわらべのごとく山かけまはる

鹿児島大教育三 指宿 みき

まごころのあらはれいつるが和歌なれどまごとの歌を詠むぞ難かし

立正大文三 高橋 寿枝

大君の踏まれし御跡を今行けば足の裏よりうれしさみ入る

神戸商科大商経四 諏訪田

就職を忘れて友と語り合ふ不思議に何故か我焦りなし

尚綱大庶務課 松村 ひろ美

一首出来安心したりて微笑めば人は五首目とあわてて作る

## 第二十四班

帝京大文四 小坂 りか

フェリー船上にて

ほがらかに旅は道連れと声をかけ輪に加へたまふ心ありがたし

九州女子大文二 坂元 麻子

おちこちゆ集ひし友らと語りつつ笑み増へ行くはうれしかりけり

尚綱短大附属幼稚園教諭 赤尾 ひとみ

峠より帰りゆくバスにてみ友らと歌ふ子守唄わが胸にしむ

東北女子大家政二 小向 恵美子

をちこちゆ初めてまみえし友どちと親しくなりしを不思議と思ふ

鹿児島大教育三 吉永 美紀子

まことなる心ゆいでたる言葉こそ友の心に響

くものかな

帝塚山学院大文一 菓 丸 恵美子

縁ありて共に学びしみ友らは離れ難しと思はるるかな

西南学院大文四 戸 田 滋 子

体調をくづした時に友より励ましの言の葉を聞きて

口々に大丈夫かと問ひかくる友らの言葉ありがたきかな

## 第二十五班

九州女子大文二 豆 田 ゆかり

輪になりて熱き思ひを語り合ふ友のまなこに真みるかな

実践女子大文一 大 越 淳子

石段をおりゆくたびにかはりゆくみ山のけしきに心あらはる

拓殖大外二 高 森 直子

日を重ね對話を重ね今やつと心通へる友得しと思ふ

尚綱短大家政二 田 部 悦子

いまだ見ぬみ山のすがたをおもひつづいま着きたりし島原の地に

東北女子大家政二 高 橋 幸子

山道の白く小さな花を見てつかれし我的心や

すらぐ

京都橋女大歴四 橋 本 加 枝

小柳先生の講義で福島安正・郡司成忠さんのいさをききて

すばらしいいさをを立てしますらをの御心しのべば心をどりぬ

## 第二十六班

中村学園大家政四 南 里 枝

班長を不安なれどもあと三日心尽してやり遂げてみむ

九州女子大文二 松 尾 教子

御逝去の知らせを聞きて知らぬまに流るる涙ほほを伝ひぬ

拓殖大外語二 寺 崎 奈津子

空を行く雲の影かと思ひきや風に吹かるる稲の穂の波

尚綱短大家政二 金 丸 裕子

班友と楽しき時を過すほどに永き友にとの願ひ抱きぬ

鷺宮小教諭 島 村 善子

穏やかに語りたまへる師の声は我等が心把へゆさぶる

## 第二十七班

九州女子大文二 飯 田 恭子

感動の思ひ伝ふる術知らず心あふれて言の葉いでこず

鹿児島大農三 山 内 聡子

班別討論にて

先帝の御姿偲び涙して語りし班友に心打たれり

最初の班別自己紹介で 長崎大聴講 西 田 佳代子

いかならむ合宿なるかとふ友どちの心もとなき気持ち想はる

拓殖大外三 小 泉 美奈子

峠にて島原の町ながむれば歴史の重さの胸に迫りく

福岡教育大教育二 船 津 洋子

バスの中で歌ふ我らの姿から思ひ出したり修学旅行を

榊ヤマハランスショップ 甲 斐 恵子

やまみちにふと聞えたる虫の音に心なごむはありがたきかな

第三十一班

宮崎神宮 川越 篤

人皆は誠の道にぞひかれしと言ひける友の面輪のまぶし

戦争を体験せし人と友となり生きてる話聞くはうれしも

日本植生(株)東京営業所 小田 高史  
車中にて皆で歌ひし故郷に遠き故郷を思ひ出づるも

厚木市教育委員会七沢自然教室 山路 昭夫  
おそひくる睡魔に負けてウトウトと眠れる私の心弱しも

福岡県立筑紫丘高校教諭 高岡 竜司  
江頭氏の詩をよみつつ我が母の上を思へり恙なしやと

合同班別討論にて  
我が思ひを師らへ受けとめあたたかき御言葉をもてみちびき給へり

福岡県立山田高校教諭 古川 克也  
合宿前日、島原鉄道車中にて

合宿を愈々明日に控へつつ未だ見ぬ友に思ひを馳せり

(株)ビコイ 近藤 建  
君が代にあはせ日の丸のぼりゆく島原の朝は

美しきかな

第三十二班

厚木市教育委員会七沢自然教室 山口 吉春  
馬の背にゆらるる親子の語らひに我が子の声の聞こゆるがごと

宮崎神宮 杉田 秀徳  
歌づくりに頭を痛め苦しめばパスガイドの声も耳ざはりなり

出光興産(株) 津田 忠雄  
汗かきて眠りし孫を腕に抱きおおきくなりぬと母が驚けり

大分県立別府青山高校教諭 大野 雅之  
ふるさとをしばし離れて親友と語らふ中に我心見ゆ

日本植生(株) 津田 和明  
雲仙の霞にけむる村落に郷里さとの老ひたる父母の顔浮かぶ

第三十三班

福岡商業高校教諭 佐藤 敬義  
清らなる声美しくガイドする島原乙女忘れかねつも

日本植生(株) 田村 康浩

山道を勇みて登りはじむれど暑さと坂に足は進まず

尚綱大附属図書館 夏野 憲浩  
峠道思はぬきつさに顔ゆがめ先行く友の呼ぶ声聞こえず

日本青年協議会 坂元 義久  
山田先生のご講義で九十歳の蠶の方のお話をおききて

四十余年御魂偲びて御社を訪ひし蠶の御姿浮かびぬ

岐阜県立本巣高校教諭 野原 清嗣  
頂上ゆロープウェイにて降りゆけば汗垂る顔に吹く風すがしも

事務局

国立第一中学校一年 坂東 陽子  
熱心に講義聞く人聞かぬ人よりどりみどり沢山いるな

熊本県立第二高校一年 富士登 加良子  
バスに酔ひ気分が悪くて山につきどこにも行かず海を見おろす

熊本県立第二高校一年 吉原 美鈴  
峠にて遠くを眺むるわが胸は家族へのおもひやまず高なる

熊本県立第二高校一年 江原 紀子



霧たちて視野に広がる乳白色に世のはかなさが全て隠るる

筑紫丘高校二年 高 椋 剛 太

大いなる田舎の自然に囲まれてただたいくつで眠くなりにつけり

筑紫丘高校二年 辻 伸 幸

ただ広いただそれだけのことなれど我が心とらへてはなさず

筑紫丘高校二年 石 原 章 弘

高校の3ナイなんていらぬよバイクに乗ることそれは権利だ

### 見学参加者

—第三十四回全国學生青年合宿教室之賦—

對 馬 白 井 傳

くにおふるわかきともらときみがよをかへしうたへばなみだわきくも

つきみさうしづかにゆるるあさのぬにむねあつくしてひのみはたあふぐ

まゆやまにくものながれてすがしかりひとひあけぬるつどひうれしも

さにづらふをとめのかみもゆれみつつはんのまなびのわすらえなくに

すめるぎのみうたのいしづみおとなへばやま

あぢさゐのしろばなかほる

### 写真班

記録カメラマン 佐 藤 道 明

無心になりて撮影せしも壁ありて思ひまかせず悔みし日々よ

### 国民文化研究会

国民文化研究会理事長 小田村 寅二郎

国武忠彦君の講義をききて

「ふるごとぶみ」の神話を子らに教へ来し君が教へのすばらしきかな

神々はうつつの人のごとくなり子らの心を喜ばしけむ

（宝辺商店代表取締役 宝 辺 正 久

合宿地に向ふ折

有明の海をし行けば東の岸の家並夕日に光る雲仙の山裾海に入らむとす方にかがやく夕日まぶしも

八代に帰りゆく友と別れたる島原港の夕思ほゆ

ひたすらにこの道ゆきて失せにける友のおもかげ目に見ゆるかも

再びは会ふすべもなき師と友を数へつつわたる島原の港

（二回目の作品）

開会式の前

慰霊祭のゆには彼処と窓ゆ見れば日のみ旗風にはためきてをり

みまつりの庭つくらむと暑き日をつとめし友らをかへりみるかな

天降りますみたまに祈りささげたる小夜爆ぜたちし篝火を思ふ

心つくし聞きまた語る合宿の友らのまみのすがしかりけり

君と民と一つ心に守りこしみ国の道ぞしぬびつつ来し

かすみわたる有明の海見てあれど合宿終る時迫りけり

九州造形短期大学教授 小 柳 陽太郎  
開会式にて

君が代をうたへどかなし先のみかどの大みすがたのたようかびきて

福岡の地に迎へまつりしみすがたのよみがへりきぬあつきおもひに

みひつぎを送りまつりし二重橋のかなし思ひ出いまのうつつに

次々にわきくるおもひ胸にあふれ歌ひつゝゆけばまなうら熱き

（二回目の作品）

全体感想自由発表

今年また壇上に立つ若きらが清きおもひに胸うたれつゝ

人を信ずるよろこび知れりとにこやかに語る  
学生の面かがやけり

何ものかに導かれしごと合宿に来しよろこび  
を語るをとめ

桜井の歌朗々と唱ひゆく学生の声に力こもれ  
り

国防と口にはいへど守るべき文化を知らず  
ぎにきといふ

守るべき祖国のすがたやややに見えそめし  
よろこびを語る若きら

輪読に得しよろこびを語りゆくはれやかなの笑  
顔心にくる

先人のことばにふるれば胸内に美しき言葉生  
るごとしと

おやさしき昭和天皇の大みうたを偲びつつを  
とめの壇上に泣く

かゝるくしきつどひあらめやはてしなく乱れ  
乱るるみ世のさなかに

国民文化研究会事務局長 長内俊平

加納祐五先生より事前合宿あて懇切なるお便りを  
頂く、その返しとして便りのはしに

声あげて読みまつりけり輪読に入っていただ  
きたしとして賜びしみ文を

「ココロスガシキ合宿たれ」とのみことばは  
ことに嬉しく読みまつりけり

み姿はただに見えねどおもかげもしたしきみ

声もきく心地する

(二回目の作品)

おのおのも心つくして営めるつどひも無事  
に終りけるかな

朝とくおきてつどひの準備する若き友らの涙  
ぐましも

心こめつくりし斎庭にいでたりし三日月のか  
げは忘れえなくに

壇上に立ちて礼言ふ若きらをみればこの集ひ  
続けざらめや

九州女子大学教授 山田輝彦  
講義のとき

わがひと生そがよろこびも悲しみもなべてこ  
もれり昭和てふ御代

水雨ふる大み葬りの日の嘆きいまもうづけり  
わが胸内に

みいくさに死なせし子らをひた恋ふる嫗の文  
よ泣かざらめやも

先逝きし友らのねがひとこしへに生きよと祈  
り語り終へにき

病みがちの身をかはひつゝみそとせに余る四  
とせのかくて過ぎにき

(二回目の作品)

有明の海おだやかに風ぎわたりしろじろとし  
て夏の真日照る

ともかくもつとめ果せしよろこびに心足らひ

てひとり海見る

○

八代の友すでにしてうつし世になしと思ふに  
心切なし

夜久さんと共に過しし合宿の日々ありがたし  
心のみて

尚綱学園常務理事・事務局長 徳永正巳

夏草の生ひ繁りたる路の辺に簞え立つ見ゆ御  
歌碑

夏草を刈り払ひつゝ岩の面にしるけく仰ぐ大  
御歌かな

四十年の昔此地に行幸ましてみ歌詠み給ひし  
大君を偲ぶ

いまはなき大君の御姿偲びつつ去りがてに仰  
ぐ御製碑

(二回目の作品)

残されし生命なげ打ち恋闕の想ひを永遠に継  
がざらめやも

幡千代田コンサルタント・専務取締役

上村和男

昭和天皇の歌碑

山道を若き友らと語りつつ訪ねゆきけり大君  
の歌碑を

大君の歌碑のあたりは草しげり歌碑の御文字  
もふるびてみゆる

今は亡き大君の広き御心にふるる思ひす御歌

をよめば

(二回目の作品)

「別班輪読にて」

若きらと太子の御本読みゆけば心すべられ清  
がしき心地す

若きらの日をふるごにかんばせは明るくな  
りぬ太子読む日に

亜細亜大学名誉教授・亜細亜学園理事

夜久 正雄

白井傳先生

うたにのみあがめ来りしよき人にまさかにあ  
ひて語るうれしき

○

めざむれば鶏の遠音の聞え来て合宿三日の今

日晴れならむ

うすがすむ有明の海の朝ぞらに紅くれなゐの日は見  
えがくれつゝ

朝もやに見えがくれするうつくしき紅の目を  
をろがみにけり

○

わが友がこわいろまぜて古事のふみを語るを  
きくぞたのしき

ともし火のあまたかがやく島原の町の夜更を  
ホテルより見つ

(二回目の作品)

慰霊祭五首他一首

三日月のかげあらはれぬみまつりのゆにはの  
垣の森かげの上に

吹きわたる夜風すずしくしてゆれてつどへる  
ゆ庭しづかなりけり

ケイヒツの声低く長く消えゆきてみたまはい  
まし天降ります

ケイヒツの声の消えゆくたまゆらをなつかし  
みたま天にかへりぬ

みまつりをへてあふげば雲されて夜ぞらさや  
かに星かげも見ゆ

昭和天皇の最後のお歌をみな人とともにしよ  
めば涙湧きくも

(元)三菱重工業 小 縣 一 也

眉山をまのあたりみる明け方の裏庭ゆけば心  
地よきかな

若きらとともに力をは合せつつ努むべき業と  
今更に思ふ

神奈川県立深沢高校教諭 国 武 忠 彦  
島原の月のいでたる眉山に御霊祭りの集ひす  
るかな

くらやみに神よびの声ひびくとき身はかしこ  
みて胸つまりたり

亡き人のおりきたりたるけはひする御姿しの  
ばれ懐しきかな

日商岩井 大阪エネルギー第一部・部長

澤 部 壽 孫

ご講義を待つ間に友と語らへば面輝きぬいと  
さはやかに

二日前に会ひにし時には見えざりし友の笑顔  
に心はつみぬ

友の笑顔良ろしと友に伝ふれば友喜びぬ面輝  
かせ

忙しき日々あけくれにかはきたる心いやさる  
友の笑顔に

(二回目の作品)

国武忠彦先輩のご講義を聞きて

生き生きと古事記を語ります友の話を聴けば  
楽しも

泣き笑ひ猛くやさしき神々の国を統べらるる  
様のしのばる

「全体感想自由発表」を聞きて

つぎつぎに若き友らが登壇し語るをきけば涙  
あふれぬ

素直なる心になれしよろこびを友は語りぬ目  
を輝かせ

いかならむさやりありとも大君のみ心しぬび  
生きつらぬかん

来む夏の合宿に向け勧誘に力尽くさむ友らと  
ともに

協賛社広告推進部・部長 磯 貝 保 博  
妙見岳の見晴台より



夏空に雲しき流れ山並のつづく彼方はけぶり  
てみえず

雲間より夏日のさして山裾の広野のみどりあ  
ざやかにみゆ

(二回目の作品)

昭和天皇の御最後のお歌を一同で拝誦して

いくつしみのふかき御歌のかずかずを声を合  
はせて共に誦しぬ

みやまひのさなかの御歌誦みゆけば悲しみあ  
らたに声のつまりぬ

大御心をしぬびつ生きむ平成の御代に生きゆ  
く国民我は

熊本市立・帶山中学校教諭 北島 照明

村松剛先生の御講義を拜聴して

新しき御代のみかどを慰むるでだてなきさま  
を師は憂へらる

(二回目の作品)

「全体感想自由発表」

学生の思ふがまゝの言の葉にわれもいつしか  
心高なる

来年もぜひ合宿に参りますと言ふ学生のいと  
たくまじき

神奈川県立湘南高校定時制教諭兼亜細亜大学講師

山内 健生

かなくぎのき

めづらしき名の木もあるかなプレートに書か

れし文字は「かなくぎのき」ぞ

あらためて驚かされぬ枝みれば朽ちてさびた  
る金針のごと

その枝はさびの匂ひのするがごと色濃き茶色  
の皮にくるまる

めづらしき名前前の木なりよく見ればくすのき  
科とふそへ書のあり

(二回目の作品)

「お食事を一緒にしませう」と我にいふ班友  
の言葉のありがたきかな

なかなかその時々になふさはきし言の葉出で  
来ぬ我のもどかし

つたなかるわが言葉にも若きらのひた聞きを  
れば胸痛くなる

若きらの輝くまなこの美しく己が心の洗はる  
こちす

さちよあれかばかりひたに学びたるすぐなる  
心の若きともらに

○

顔色のすぐれぬ友のはほゑみて「大丈夫で  
す」とふ胸内思ふ

旅に病み心細くもあるらん心配かけじとか  
く答へしか

福岡県立新宮高校教諭 小野 吉宣

昭和天皇様御製碑に向ふ

歌碑めざし登る山道めであるがに遠く近くに小

鳥さへずる

道すがら大御心を伝へんと大石運びし人らを  
偲ぶ

草深き夏山の中刻まれし大御歌の碑堂々と建  
つ

大御歌誦しまつれば悲しくも先帝陛下の御声  
きくがに

(二回目の作品)

ささやかな力なれども新しき御代を支ふる柱  
とならむ

友みなと合成姓力信じつつ御代を支ふる力と  
ならむ

絶ゆるなくこの合宿をつづくるが御代守りゆ  
く力ならずや

さはやかに力湧きくる感動が我胸内ゆ湧きた  
ちやまず

有難きこのつどひかな師や友と続けざらめや  
この合宿を

㈱不動産コンサルタント代表取締役

松吉 基順

野岳なる大御歌の碑拝さむと夏の陽あびつつ  
峰つたひゆく

道のべに一輪咲けるつりがね草うなだれし花  
いと可憐なり

汗ばみし肌ぬぐひつつ見あぐれば妙見岳にう

す雲流る

(二回目の作品)

若きらとみ國のいのち語らひて悔いなかりけり島原の集ひ

共に学び語らひあひし日の本の正道忘れず生きませ友らよ

あづま安芸はた筑紫の國に離るとも正道求め生きませ友らよ

佐賀県立佐賀商業高校非常勤講師 末次 祐司

慰靈祭を前にして

先帝のみあと追ふごとゆきませし先輩のみ姿切に偲ばゆ

はるかなる空にますらむわが先輩のみたま降りませこゝの齋庭に

(二回目の作品)

長内俊平先生の御講義を聞きて

心こめ語ることばに思はずも溢るる涙止どめかねたり

止めどなく溢るゝ涙こらへつつ一言一言我は聴きたり

奇跡にも生命救はるる運命を母の守りと語り給へり

天地も動かすといふまごころを母に尽くせし大人は尊し

サイデン交通御取役締・佛山陽自動車学校社長

加藤 善之

大平田よりの船中にて

見渡せば大洋の如く水平線ただみゆるのみ有明の海は

合宿に参加するらむ若きらの笑まひ語らひ船中に満つ

ひたすらに講孟割読みふける若者もあり船はゆるれど

(二回目の作品)

久々に参加したりし島原の合宿教室今終らむとす

此の道は遙かなりけりされどまた此の道近しと思ふこの頃

此の道をゆきたまへかしますらをの遂ぐべき道ぞ益良雄の道

国際化迷ふべしやはこの道をひたゆきたまへその道ならむ

この國を守らむと思ふまごころを遂げさせたまへ天地の神

(元)熊本県砥町立砥用東中学校長

北島 道治

はろばると有明の海ひろがりて島山見えず霞みわたれり

薄墨の斑の雲の浮び居て島原の海は今し明けゆく

(二回目の作品)

霞みたる有明海を島原にへさきを向けてフェリーたぶゆく

三代の思ひを載せてひたすらにフェリーひたく島原さして(親子孫の三代で合宿参加す)

幾度か涙しつゝも御話の神州不滅書きつけて見る

晴れ渡る朝の空に眉山のことなど友と語る葉しさ

島原の子守の歌のあはれさを思ひつつバスは今帰り来つ

雲仙の眺めよろしも言の葉に言ひ表はさむ術もなくして

(柳)中央塩ビ製作所代表取締役 星野 貢

照り返へす強き日ざしに汗しつゝ山路を登るみ歌しぬびて

碑の前に友らと立ちて高らかに誦しまつりぬ大み歌を

(二回目の作品)

壇上に声つもらせて絶句する乙女の姿息吞み見守る

ほゝぬらしこみあぐる念ひこらへつゝお世話になりましたと乙女は語りぬ

元法政大学人事部長 香川 亮二

合宿への途次油山を訪ねて

久びさりにまうでむものど心いそぎ油山さして車はしりゆく

山裾に古りし山門もとのごと立ちてありをり正覚禪寺

のぼりゆく石の坂道苦むして詣づる人の影は  
見えずも

なんの鳥かきよと鳴きては飛びゆきし後はし  
づけさひとしほましぬ

この坂をのぼりてつひに亡友君がかへらざり  
しより四十年あまり

(二回目の作品)

合宿つゝがなく終りて

たちこめしもやにかくれて天草の鳥影見えず  
夜は明けぬれど

道をゆく車の影もいまだ見えず人は眠りの中  
にあるらし

ふと見ればうすくろき煙やムヤムに立ちの  
ぼりては空に消えゆく

草を焼く煙ならむかすでにして働く人あり影  
は見えねど

中空に一はけうすきくれなゐの色のさしきぬ  
日のあらはるゝか

鞍平塚魚市場相談役 福岡 政夫

仁田峠よりの掃り、バスにて「故郷」

を歌ひつゝ

若人と「兎追ひし」と諸声に歌ひつゝ偲ぶ高  
砂島を

若き友らまさきくありて来む年の夏に再び会  
はむとぞ願ふ

(二回目の作品)

慰霊祭の夜に

しつらへし齋庭の明り消えさりてかぶり火折  
々火の粉をあぐる

警蹕けいどの声ややに高まりてみ空のみ霊今くだり  
ます

師友先輩せんぱいの面輪おもつぎつぎ浮びきてみ声うつし  
くききまつりけり

在りましし日々ひびの如くに大君を守らせ給へと  
こひのみまつる

昭和の帝しのびまつりし大君にまめに仕へむ  
生けるわれらも

舞岡八幡宮宮司 関 正臣

宮脇昌三さんに(八月五日)

激励電報われら受けたり合宿を始めむとして  
集へる時しも

「平成の御代の始めの合宿」と言ふ言の葉に  
今めざめたり

山ごもる信濃国辺に國思ふ人を偲べば力湧き  
来る

(二回目の作品)

合宿最終日の朝

ふりあふぐ天津御空は一片の雲なく晴れて澄  
みわたりたり

世の常の暮しにまぎれ過しける六十まりの年  
恥づかしきかな

長内俊平兄の講義を

浸み出づる涙止らず君が言葉ひたすらにただ  
聴き入り居れば

友と呼ぶ事も長く思はるる君の来し方親しく  
聴きつゝ

私立・東福岡高校講師 小林 国男

奈良崎君の合宿導入講義の中に父君のことに

ふれられしを聞きて

敗戦の負ひ目苦しく故郷にかくるゝごとく復  
員せしと

満州の極寒の地につはものと心つくして励み  
給ひしを

戦ひに敗れし責まよをかなしくも一兵卒の父君負  
ひ給ふ

(二回目の作品)

女子班付となりて

おとなしき乙女ならなりしがそこはかと心なご  
むがうれしかりけり

くぐもれる思ひはいつしかときほぐれとつと  
つと述ぶる乙女ならなりし

それぞれのお国の方言披露する夜の集ひの乙  
女ならなりし

日本銀行監事 小田村 四郎

仁田峠御製碑

ふたたびもみ幸しましてこの山をめだたまひ  
けりさきのみかどは

なつかしき雲仙岳とのたまひしその山道をバ



スは登り来ぬ  
尾根道をひとり歩めばひぐらしの鳴く声涼し  
秋立ちぬらし

碑いしを蔽ひし草木友どちは鎌とりもちて刈り  
払ひけり

(二回目の作品)

白井傳先生、合宿に参加し給ふ

海路はるか対馬のくにゆまゐられし大人のみ  
心の有難きかな

いや高きしらべのみうた数さはに詠まし給ひ  
ぬ湧きいづるごと

水茎のあとうるはしき数々のみふみにこもる  
君がいのちは

桜井の別れをしのぶ横笛の音色しづかに君ふ  
きませり

すこやかにましませ茂る醜草を刈るべきつと  
めいよよ重ければ

浄土真宗本願寺派光隆寺僧侶 岡棟 猛

島原到着

幾たびも夢に糸がきし島原を訪ねきたりぬ友  
に會はむと

師の君にまみゆるよろこび胸に抱き我は来り  
ぬこの島原に

(二回目の作品)

合宿をふりかへりつゝ思ふかなみ友の姿の老  
いたるさまを

刀折れ矢つきて逝きしとみ友はいふ胸ふさが  
りてもだし聞くなり

航空自衛隊航空教育隊教官 村山 寿彦

仁田峠に立ちて彼方をながむれど有明の海は  
雲にけぶりて

緑濃きミヤマキリシマ群生ふる峠の風はさは  
やかにして

(二回目の作品)

白井傳先生の横笛を聞きて

先生のおふるる思ひさながらに笛のしらべは  
嫺々じょうじょうとして

天皇をひたに思はるる先生のみ心こもりぬ笛  
のしらべに

先生のかなしき思ひこもります大楠公の曲の  
しらべは

楠公のかなしきしらべは先生の熱き思ひにい  
まよみがへる

先生の熱き思ひのしのばれて楠公の曲わが胸  
をうつ

先生の思ひこまれる横笛のかなしきしらべ胸  
にしみぎぬ

先生の思ひのたけのしのばれて胸あつくなり  
ぬ横笛の音に

目をとちて耳をすませば今もなほ横笛の音は  
耳にのこれり

島原の合宿の夜のひとときの横笛の音はわす

れざるなり

拓殖大学外国語学部教授 松本 幹男

開会式にて

日の丸に心ととのへみ友らと君が代歌ふ声の  
限りに

(二回目の作品)

朝の集ひに

眉山の頂き仰ぎ有難く朝の気すひ込みぬ胸一  
杯に

浅黒き峰を伝はり濃き雲のおほふがごとくせ  
まり来る見ゆ

九州大学医学部循環器内科講師 小柳 左門  
国武先生の御講義をお聞きして

国の始めの歴史をたどり淡々と語りたまへる  
話し楽しも

神々のうつしくそこにいますごとと声音こゝろをまね  
て語りたまへり

祖先らを深く愛でますお心のおのづあふるる  
やさしき御言葉

「大和は国のまほろば」と三度四度詠よみたま  
ふ御顔に喜びあふる

恋ひ慕ふ大和の前に足なづみたふれし皇子みこの  
命かなしも

美しくかなしき国くにのふるごとを伝へむ君の願  
ひ思ひつ

(二回目の作品)

幼き日ともに遊びし弟君とのなつかしき思ひ  
出聞けは楽しも

こまごまと野菜の種子の保存など戦地ゆ姉上  
に書き送りましたまひしといふ

命あるものいとほしむ御心の深き弟君としの  
びまつるも

されど嗚呼御心深き弟君はみ戦征きて失せし  
ましといふ

お話を聞きつつ涙とどまらず語りゆく師のみ  
姿見えす

戸田建設機関発事業統轄部副参事・主任

青山直幸

小柳陽太郎先生の御講義を拝聴して

壇上に登りたまひて語らるる師の君の目は輝

きてみゆ

髪の毛の白さ増したまふかに見ゆれどもはりのあ  
る声いよ強しも

にこやかな笑みの中にも厳しさをたたへつつ  
師は語りたまへり

国の危機に備へんが為各国を巡廻せむとす福  
島中佐は

極寒のシベリアの地を単騎にて横断せんとの  
勇断すさまじ

病魔にてたふれし愛馬を友のごといとほしま  
るる姿悲しも

(二回目の作品)

「班別短歌相互批評」の折、深夜に至りて

班室にもどりてみればはや皆は相互批評に取  
り組みてをり

己が歌声高らかに詠みゆける姿しみれば胸熱  
くなる

にこやかに笑み浮かべつつ深々とお願いしま  
すと頭下ぐる友

友の思ひひたしのびつつ言の葉を選びては歌  
を直しゆく友ら

友ら皆心尽くして言の葉を直さむとすれと思  
ふにまかせず

友ら皆なすすべなくてただひたに歌みつめつ  
つもだし続けぬ

さ夜ふけて眠気いや増せども友らは歌ひたむ  
きにみつめてやまず

やうやうに己が思ひにかなひぬる歌できし時  
の友の喜び

己が思ひにかなひぬる歌詠みゆける友の顔かほせ  
すがやかに見ゆ

やつたねと肩たたき合ふみ友らの笑み交はず  
見れば涙こみあぐ

熊本市役所保健衛生局・技師 折田豊生

班別討論にて伊藤たかさんのマッカーサーへの

手紙を読む

わが友が涙ながらに示したるふみをし我も涙

して読む

すめらみことに代はりて我身ささげむとつづ  
りたるふみのおだやかにして

われをすてすみわたりたるみ心を思はざら  
めやふみのしらべに

(二回目の作品)

亡き加藤敬治先生をしのびまつりて

みまつりのよそほひなりし斎場にひとり訪れ  
師の君を思ふ

みたままつりにはおごそかにしづまりて夏  
の夕を風わたるなり

この道にたつらなりてあるをいくばくのたのみ  
に我もつとめてゆかむ

なすべきも定かにあらず我がつとめつたなく  
あれど導きたまへ

福岡県立福岡中央高校教諭 占部賢志

福岡安正中佐と愛馬の別離の件り

(小柳陽太郎先生の御講義を聴きて)

シベリアをとともに駆けたる愛らしき馬刀尺き  
果て臥やせしといふ

かなしげに嘶く馬にすり寄りて首筋撫でて慰  
めんとなす

慰むる主にこたへて耳揺らしかそけく嘶くあ  
はれこの馬

今しいのち尽きんとすなる愛馬抱く中佐の胸  
にあふるる思ひよ

熊本県立第二高校教諭 白 浜 裕

福島中佐 単騎シベリア横断

ますらをの雄心おこしシベリアの荒野を単騎  
行きし中佐は

むら雲のおほふごとくに歯牙をとぎ北夷は御  
国に迫りつつあり

極寒の野道行くうちひづめ割れ愛馬はつひに  
臥して動かず

病えし愛馬さすりてなぐさむる中佐の眼に涙  
あふるる

雄心の内に秘めぬし武士のまことの心あらは  
れにけり

(二回目の作品)

平田裕英君(熊大・法・三年)へ

鹿児島の友らとつながり深めつつ学びゆきた  
しとふことばうれしき

山口県立高森高校教諭 宝 辺 久太郎

福島安正の書をよむ

たふれたる馬を臥さしぬその首を撫でさする  
中佐の胸は迫りぬ

「凱旋」と別れてゆく地はいまだしも見ざる  
酷寒の果てとなるべし

中佐の書のしらべ高きも師の君のうねるがこ  
とときみこゑうるはし

(二回目の作品)

夜久正雄先生の御講話をお聴きして

あかげらにみこころたくしてよみまししみう  
たいくたびもよみまつるかも

看護婦らよくわれをみとりぬ」とのらしま  
ししみうたにたみら泣かざらめやも

くにたみにみうたのこして神あがりまます  
もへば胸のせきあぐ

久留米大学附設高校教諭 名 和 長 泰  
つぎつぎで御祖をまつるこの道をわが友どち  
ととはに歩まむ

(二回目の作品)

夜久正雄先生の御講話をお聴きして

ゆきましし天皇様の大御歌を拝誦しまつれば  
涙流るる

福岡県立武威台高校教諭 藤 寛 明

アルバイトの高校生連をレクリエーションに

送り出した後、事務作業の合間に

晴れ渡るみ空を眺つつ思ふかな生徒らかへり  
て詠む歌いかにと

大分県立大分豊府高校教諭 石 井 雅 晴  
事務局の一員として参加して

数多人の助けのありて合宿の業の果されゆく  
を知りけり

講師村松先生お迎への為、名和事務局長の

夜更けに洗車されしを知りて

他の人の眠りし後に唯一人勤め果さるる御姿  
を思ふ

(二回目の作品)

はじめて会ひし友の鹿大生らに見えて  
この一歳御文幾度も戴きし友らと初めて会ふ  
ぞ嬉しき

友ら皆と許さるるなら時を忘れ心ゆくまで語  
り合ひたし

仙台防衛施設局施設企画課 山 根 清

靖国神社に祭られし子供への手紙

子等のもとはやゆきたしとつづられて老いた  
る母の手紙ぞあはれ

さはあれど寿命の限り頑張るとのみ言葉強く  
心に残る

さきゆきし子等の面影あきらけく老いたる母  
の御胸に生くるか

(二回目の作品)

終戦時の昭和天皇御製を一緒に拝誦して

いくたびも読み親ししみし歌なれど御心の  
ばれ涙こみあぐ

国民を救ひたまひし大君の御歌しよめば涙こ  
みあぐ

日本興業銀行広島支店営業課長代理

小 柳 志乃夫

国武さんの御講話をお聞きして

生き生きと古事記の神を語ります先輩のお話  
聞けば楽しも

豊かなる学びのあとこのしはれてともしと思  
ふ先輩の御話



北九州市立八幡病院放射線技士 森 田 仁 士  
青年体験発表準備の折

妻と同じ病ひにたふれ追ふがごと君逝きては  
や四歳の過ぎつ

再びのコバルト治療に臨みてもお願ひします  
と笑みし君はも

再発の悲しみ越へて笑みたまふ面輪浮かびて  
泪あふれ来

(二回目の作品)

うすもやのかすみのうちゆ陽は登り有明の海  
の淡く輝く

(二回目の作品)

日産自動車幌栃木工場第一工務部生産課

奈良崎 修 二

合唱教室に八年ぶりに参加して

つとめをば果たし得るかと案じつともらの  
集ふ台宿へ向ふ

久しぶりに来たりてみればみともらのかはら  
ぬゑまひに会ふがうれしも

久々に会ひしともらとくさぐさのことども語  
りぬ夜の更くるまで

佐賀県立病院好生館医師 安藤 洋 志

雲仙岳に昭和天皇の歌碑を訪ねて

四十年前天皇のたどられし道を我踏み歌碑  
を訪ふ

大巖に彫り刻まれし御歌碑は草木に隠れてひ

つそりとあり

御歌碑を隠して茂る草々を刈り払ひければ御  
歌見え来ぬ

大君の雲仙岳にみ幸し給ふその日は晴れて花  
咲きはこりたり

上代より伝へ継がれし大和心我が胸底に今も  
流るる

(二回目の作品)

浜の町病院醫師 長澤 一成

山田先生の御講義

昭和とふみ世はかなしとあかげらの御製誦み  
つつ語り給ひぬ

今は亡き子等を憶ひて靖国に手紙書き遣りぬ  
老女かなしも

たゝかひに命さゞげし亡き子等のあますが如  
く手紙認めぬ

(二回目の作品)

小田村寅二郎先生の御講義

信あらばなにごとかならざらんとふ聖徳の太  
子のことを語り給ひぬ

福岡県立筑紫丘高校教諭 酒村 聰一郎

風雪の異郷の荒野をますらすと進みゆきたる  
愛馬倒れぬ

(二回目の作品)

山田輝彦先生の御講義の中の「母からの手紙」  
を讀みて

やすくにのみ魂となりし我が子らに「豊」  
「豊」と呼びかくる母はも

四十年余り四年過ぎにし今もなほ失せにし子  
らの面輪うつつに

戦ひに二人の吾子を失ひし母の悲しみいかに  
かりなむ

九十路を教へしいまも吾子にあててふみ書く  
母の御心悲し

御命の長らへしことを母君は吾子らのお蔭と  
文にしるせり

「メイヨノセンデンシタガカナシカタデス」  
とふ御言葉読めば涙こみあぐ

福岡県立須恵高校教諭 那 須 三元

山田先生の御講義を聞きて

靖国にしづまりあます子の魂に文書きたまふ  
九十越えて

み戦さにたふれしわが子に読み聞かせてよと  
心をこめて文書きたまふ

(二回目の作品)

山田輝彦先生の御講義をお聴きして

九十路の母のみ文に告げられし大人の講義に  
聴き入りにけり

靖国の社にしづまりいまます吾子のみ魂に  
文書きたまふ

たくはへし年金と共に送られし文は聞くだに  
心打たれぬ

たどたどしき言葉の中に子を思ふ心あふれて  
涙流れく

日立製作所エネルギー研究所 松 井 哲 也

鳥島君の短歌導入講義を聞きて

私は奄美大島の出身ですと語り始めたり地図  
を書きつ

(二回目の作品)

友等と別れし折一人の友北九州にて輪談会を  
始めんといふことを聞きて

帰りなば友と文読む集ひをば始めむと聞きて  
うれしかりける

日本油脂煉戸塚工場技術部 上 村 栄 章

山田輝彦先生の御講義を聞きて

靖国にねむる息子に手紙を書く母の思ひのひ  
しとせまりく

言の葉に祈りこめたる母心あふれし文に涙と  
どまらず

(二回目の作品)

名和長泰事務局長に帰京のあいさつをした折に

疲れられてか椅子にもたれてうとうとされる  
事務局長の姿勢し

別れの折に

九州の友との別れの迫り来て刻一刻と時は過  
ぎゆく

さらばまた会はむと言ひて部屋をでて別れゆ

く姿さびしく思ふ  
玄関まで見送りゆきし友どちの姿うれしく疲  
れ忘れぬ

福岡県立玄洋高校教諭 矢 永 誠 二

小柳陽太郎先生の御講義で、福島中佐の話の聞きて

ぬかるみの荒野にひづめを傷めたる愛馬はつ  
ひに病にたふる

草に臥す愛馬に群る蚊を逐ひて慰め給ふ姿か  
なしき

馬を愛づる中佐の姿に異国の人々もまた涙す  
といふ

さがりがたき思ひにたへて雄々しくも旅立ち給  
ひぬシベリアの地へ

(二回目の作品)

夜久正雄先生の御講話で昭和天皇最後の御歌を  
よみて

全員で声を合はせて拝誦す大御心を偲びまっ  
りて

御闘病の中でもつねに国民を思ひたまへる御  
心ふかし

あかげらの音たへてさびしとの大御歌を拝誦  
すれば胸あつくなる

那覇防衛施設局建設部 神 谷 正 一

道の辺の草々の中につりがねの白きひなびし  
花見つけたり

つりがねの名はほたるぶくろと思ひ出し足を

とどめてながめけるかも  
とばまれば汗は額を流るれどかすかにそよぐ  
風涼しかも

(二回目の作品)

とつとつと素直になりぬと壇上でなみだ声に  
て語るをとめご

学内で真顔で語る時なしと残念さうに後輩は  
語りぬ

うら若き後輩らの思ひつたはりきてわれも新  
たに学ばんと思ふ

福岡市立弥永小学校教諭 是 松 秀 文

田中三代子さんが息子さんに宛てし文を聞きて

母君は長生きできし御礼を亡き吾が子息に告  
げ給ひたり

母君の切なる思ひ今は亡き息子のもとへ届け  
と折る

(二回目の作品)

慰霊祭の準備をせし折

暑き中皆で力を出し合ひて祭りの庭をととの  
へんとす

「田中三代子さん(歿へ九十歳)が二人の息子

(清国神社の御祭神)に宛てし手紙」——山田輝

彦先生の御講義を聞きて

おふたりの息子亡くされし母君の心しぬべば  
ただに悲しき

母君は長生きできし御礼を愛しき吾が子に告

げ給ひたり

福岡県立門司北高校教諭 濱田 清人

レクリエーションに出で発つ友らを見送りて

み霊なごめの祀りの庭を心あはせ整へてゆけば汗のあふるる

固き地に穴うがちゆく友どちらはたちまち汗を流しゆきけり

なれぬ業にとまどひをれば師の君や先輩の助けのありがたきかも

コピーライター 布瀬 千代子

白井傳先生にお会ひして

み友らとつながりを得て幾年も天皇慕ひて来られしといふ

韓国に近き対馬ゆ集ひたまふ大人の御言葉胸にしみ来ぬ

師の君の作りたまひし四十の御歌を友らと詠むは楽しき

海に入りなむとする弟橘の御歌を大人と共に詠ひぬ

(二回目の作品)

二十四班班付の香川亮二先生が油山を

訪れしといふお歌をよみて

過ぎし日に我も訪れし油山に友を偲びて登られしといふ

油山の険しき道を体かばひ歩みゆかれしか我が師の君は

国のため命捧げし友偲ぶ大人の御心思へば悲し

慰霊祭斎場で小田村寅二郎先生とみ空を見上げつつ

みまつりを終へし齋庭にてみ空をば見あげてごらん師はのたまひぬ

師とともにみ空見あぐれば星ひとつまたたくが見ゆまつりの庭に

去年の夏もさうだつたねとふ師の君の御言葉深く我が胸にしむ

日本真空技術師 北浜 道

亡き大君のめで給ひにし草や木にふれし御詠の御言葉悲しも

(二回目の作品)

慰霊祭にて小田村四郎先生の御製拜誦を拜聴して

大御歌をかみしむる如誦みたまふ御声の響きの胸に沁み入る

福岡県立山田高校教諭 與島 誠央

屋敷を食べるさなかも壇上に登るを思へば体ふるへる

班友に楽しみにしてますと励まされいよよ体のわななけるかも

ただいまより導入講義に入りますとふ友の声聞き動悸高鳴る

壇上ゆ友らみつめて語りゆけばおのづこころ落ち着きてゆく

うたごころ友らのこのころに湧けかしと願ひを

こめてひたかたりゆく

(二回目の作品)

國武忠彦先生の御講義

みおやらの悲喜動乱の人生を語り給ひぬうつ見る如

母恋ひて青山を枯山なす泣き枯らすササノラの命のなんぞはげしき

スサノヲがひとたび動けば海河はことごとにとよむとふたけきこの神

おもしろき講義なるかなみおやらの手ぶりととひうつつ浮びて

柳峰屋 松吉 基光

微笑みて何の記録ですかとの問ひかけに講義の録音と我は答へぬ

録音は大変ですなと気づかひし乙女の言の葉ありがたきかな

ありがたきただ一言の言の葉に我の心はずがしくなりき

(二回目の作品)

廊下にて一人たたずみ班室ゆもれ聞こえくる父の声を聞く

とつとつとまた力強く班友に真心伝へむと語りをるなり

面見えずただ声のみぞ聞きをるに父の姿ぞ心に浮かぶ

声のみぞ聞きをるの我の臉にはやさしく強き父



の顔浮かぶ

真心を伝へむとする父の声は一人無き廊下に響く

友どちの一人一人に語りゆく父の言葉の力強しも

京華産業 桐山 澄子

部屋割をきかむと思ひ事務局へ入りて班付と  
ききてとまどふ

班付の先生にあひにこやかに名前を呼ばれ心安まれり

はじめての経験なれど心こめ班の友らに接してゆきたし

(二回目の作品)

ことのはを求むることのむづかしさ短歌批評で教へられけり

船橋市立古和釜小学校教諭 竹内 孝彦

昼間、懸霊祭祭壇づくりに奉仕して

汗ぬぐひ時をり見あぐ雲仙の山頂に今し友は立つらん

(二回目の作品)

「全体感想自由発表」の最後に、班友の古川克也君

(福岡県立・山田高校・教諭)が登壇す

自らの思ひの丈をのべ得ずたすに最後の朝を友は迎へしか

むなぬちのこみあぐる思ひおさへかね席たちてゆく友を見つめぬ

思ふこと思ふがままに述べてよと壇上の友を  
我見守りぬ

神奈川県立土溝高校常勤講師 大日方 学

小野吉宜さんが御製碑の周りの草を刈り  
とられるのを見て

鎌とられ御製碑の前の草々を力込められ刈りとられゆく

(二回目の作品)

「班別懇談」の際の班長真田博之君

(重大・法・四年)

班友の思ひ一つに統べようと必死に語る姿にうたれぬ

班長を助けるはずの我なれど何もできずにはがゆき思ひす

君の思ひ伝はりけるか班員は輪になりて語る夜の更けゆくに

東和銀行 朝沼島支店 長場 真一

指揮班の先輩と行動を共にして

いきいきと地味な仕事を努めたる先輩にふれ力湧きくも

(二回目の作品)

歌稿製作の過程をみたあとで

夜ふけまで歌稿にせんと筆を持つ先輩の姿にあたたかさ覚ゆ

中央大・平成元年卒 久保田 真

合宿で逢へると思ひて来たれども君の姿のなきはさびしも

(二回目の作品)

郡司成忠大尉の「手記」を読み

島に着き「嗚呼！我が占守」と言ひしとふその御心はいかばかりかも

途中にてたふれし友等の魂魄が島で我を待ちたるといふ

すぐさまに大御心をいただきて猛然奮迅立ちたると大人はも

福岡県立支界高校常勤講師 倉光 朋子

語らひを尽くせぬままに別るるは御友ら想ひて悔いのみぞ残る

記録カメラマン 佐藤 道明

無心に撮影せしも壁ありて思ひまかせず悔しき日々よ

## あとがき

秋も日毎に深まってまゐりました。皆さんその後いかがお過ごしでせうか。広やかな有明海を見おろす島原で共に学び合った「合宿教室」から早や三カ月が過ぎやうとしてをりますが、やうやくこの『感想文集』を皆さんのお手許にお届け出来ることになりました。この『感想文集』は、「合宿教室」の最後に「走り書き」して戴いた感想文と短歌を編集したものです。

編集作業は、まづ、それぞれの班の班付（社会人班の場合は班長）の方々（国民文化研究会会員の助言者）に、感想文と第二回目の創作短歌を添削・編集していただくことから始めました。

皆さんお一人お一人の心のこもった文章・短歌を丹念に読み返し、編集してゆくことは神経を使ひ、時間のかかる作業ですが、皆さんがお書きになった生々とした言葉に心を打たれ、同時に皆さんの緊張したあの時のお姿も思ひ出されました。それぞれの方々に編集していただいた編集方針は以下の通りです。

### (一) 「感想文」について

原文をできるだけそのまま掲載することを基本方針としました。ページ数の関係で執筆者のお心のうちが最も強く表現されてゐると思はれるところを摘録しました。文意の不明瞭なところは、執筆者のお気持を辿りながら、原文のニュアンスが損はれないやう慎重に加筆しました。なほ、「かなづかひ」については、原文を尊重し、漢字及び文法上の誤りについては訂正してをります。

### (二) 「短歌」について

合宿では二回にわたって短歌をつくりましたが、第一回目のもものは、全参加者それぞれ一首以上を洩れなく本冊子の巻末の「短歌詠草」のところに収めました。また、この感想文の執筆の折につくっていた第二回目の和歌は、それぞれの感想文の末尾に入れました。感想文と同じく、文法上の誤り等は訂正いたしました。

この『感想文集』作成のためには、班付および社会人班の班長の方々以外にも多くの方

々のご協力を得ました。お忙しいお仕事のことで、休日や勤務終了後の時間をさいてご協力をいただきました国武忠彦、磯貝保博、藤井貢、布瀬千代子、竹内孝彦の諸氏に心から御礼申し上げます。

最後に、この『感想文集』の「あらまし」作成に御協力いただいた国民文化研究会会員の諸氏、および第一回目の短歌の編集にご尽力いただいた東京の青山直幸さんに厚く御礼申し上げます。またカメラ・レポートの写真は福岡の佐藤道明さんにお世話になりました。

いろいろな方々のご努力によって出来上がったこの感想文集を、ご精読下さるやう切願してやみません。

「合宿教室」の四泊五日間の様々な経験が鮮明に甦って来る事と思ひます。三カ月前に島原で得た感動を単なる「思ひ出」に終わらせることなく、合宿教室で得た真に語る友との交流に、また新たな学問の求道への出発点とされるやう切に祈ってをります。なお、ご精読

後には、是非とも班付（又は班長）の方々に  
一筆礼状を差し上げていただきたくお願ひ致  
します。また、来年合宿の地で再会しませふ

（上村栄章記）





〔資料〕

第三十四回 “合宿教室（島原）” 感想文集

非売品

平成元年十月三十一日発行

編集兼発行者

東京都中央区銀座七―一〇―一八 柳瀬ビル

電話 〇三―五七二―二五二六（代）

FAX 〇三―五七二―一五三七

社団法人 国民文化研究会

理事長 小田村寅二郎

編集委員 上村 栄章・金子 光彦

北浜 道・大目方 学

吉川 理夫・秋山 信之

